

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第34集

川端遺跡Ⅱ

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 VII

2019

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第34集

川端遺跡Ⅱ

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 VII

2019

長崎県教育委員会



写真 1 川端遺跡 平成 30 年度調査区遠景（南西から）



写真 2 A 区遺構検出状況（上が北西）



写真3 石棺墓 (ST04) 床面検出状況 (南から)



写真4 B区竪穴建物跡 (SC01) 完掘状況 (東から)

刊行にあたって

本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴い、平成30年度に実施した川端遺跡の発掘調査報告書です。

近年、大村市内では都市計画道路池田沖田線、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の建設に伴う大規模な発掘調査が実施され、縄文時代から近世まで、大村地域の歴史を知る上で重要な成果が上がっています。

今回の調査では、弥生時代から古墳時代の遺物が多く見つかかり、また弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての住居跡と石棺墓を検出しました。周辺では富の原遺跡、竹松遺跡など弥生時代の中期から後期の石棺墓を含む墓域や集落跡が確認されており、今回の調査成果は弥生時代から古墳時代にかけての大村地域の歴史的変遷を考える上で重要なものとなりました。

発掘調査にあたりご協力いただいた多くの関係者の皆様方に深く感謝を申し上げますとともに、今回の調査成果が学術的に広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

令和元年12月

長崎県教育委員会

教育長 池松 誠二

例 言

1. 本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴い、平成 30 年度に実施した川端遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は平成 30 年度都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う川端遺跡発掘調査報告書作成費にもとづいて発行した。
3. 本事業は長崎県県央振興局建設部都市計画課が事業主体となり、発掘調査主体は長崎県教育委員会が、発掘調査は長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センターが担当した。発掘調査の長崎県遺跡調査番号は KBT201801 である。
4. 発掘調査及び報告書作成において下記の業務委託を行なった。
発掘調査支援：株式会社大信技術開発・扇精光コンサルタンツ株式会社 JV
5. 平面直角座標は世界測地系を、方位は座標北を用いている。
6. 発掘調査に係る現地指導、情報・資料提供など以下の方々に御指導・御協力いただいた（敬称略、所属順）。
野澤哲朗（諫早市文化振興課）、大野安生・安樂哲史・柴田亮・田島陽子（大村市教育委員会）、中尾篤志・宮武直人・濱村一成（長崎県教育庁学芸文化課）、古門雅高・川道寛・川畑敏則・中川潤次（長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所）
7. 金属製品の透過 X 線撮影及び保存処理は、長崎県埋蔵文化財センター調査課片多雅樹係長、近藤佳恵文化財調査員が、赤色顔料の調査は片多、岩佐朋樹文化財保護主事が行なった。
8. 本書に収録した遺物の実測および製図は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。
9. 本書収録の遺物・図面・写真類は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。
10. 本書に掲載した地質図は、地質図幅「北部（縮尺 1:200,000）」『九州地方土木地質図』（九州地方土木地質図編纂委員会 1985）を使用し作成したものである。
11. 本書に掲載した周辺遺跡分布図は、国土地理院コンテンツの標準地図を使用し加工して作成したものである。
引用元 URL：国土地理院ウェブサイト <https://maps.gsi.go.jp/#16/32.950730/129.944572/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>
12. 本書の編集は山梨が行い、執筆は自然科学分析を岩佐、片多、その他は山梨が行った。

本文目次

I. 遺跡の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
II. 調査に至る経緯	5
1. 調査に至る経緯	5
(1) 都市計画道路池田沖田線建設	
(2) 協議	
2. 試掘・範囲確認調査	5
(1) 調査期間と面積	
(2) 調査体制	
(3) 試掘・範囲確認調査の概要	
III. 調査の概要	7
1. 調査期間と面積	7
2. 調査体制	7
3. 発掘調査の流れ	7
(1) 協議	
(2) 発掘調査の流れ	
4. 層序と地形	8
(1) 基本層序	
(2) 旧地形の推定	
5. 調査の概要	11
(1) 遺構	
(2) 遺物	
6. 整理作業・報告書作成	11
IV. 縄文時代の遺物	16
1. 遺物	16
(1) 土器	
(2) 石器	
V. 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	18
1. 遺構	18
(1) 竪穴建物跡	
(2) 石棺墓	
(3) 溝状遺構	
(4) 自然流路	
2. 遺物	28
(1) 土器	
(2) 石器	
(3) 金属器	
VI. 古代～近世の遺物	37
1. 遺物	37
(1) 須恵器	
(2) 貿易陶磁器	
(3) 土師質土器	
(4) 中世須恵器・石鍋・瓦質土器	
(5) 近世陶磁器	
VII. その他の遺構と遺物	40
1. 遺構	40
(1) 土坑	
(2) 石列状遺構	
(3) 不明遺構	

2. 遺物	42
(1) 金属器	

ピット一覧	44
遺物一覧	45

VIII. 自然科学分析	52
--------------	----

IX. 総括	56
【引用・参考文献】	58

図目次

図1 表層地質図 (S=1/100,000)	1
図2 周辺遺跡分布図 (S=1/20,000)	3
図3 本調査調査区位置図 (S=1/4,000)	6
図4 基本土層断面 (S=1/80)	9
図5 A区北西壁・B区南東壁土層断面 (S=1/80)	10
図6 調査区東側微高地断面模式図	11
図7 調査区全体図 (S=1/300)	12
図8 A区遺構分布図 (S=1/200)	13
図9 B区遺構分布図 [3a層上面] (S=1/200)	14
図10 B区遺構分布図 [3b層・4層上面] (S=1/200)	15
図11 縄文時代の遺物 (S=1/3)	17
図12 SC01 実測図 (S=1/60)	18
図13 SC01 出土遺物 (S=1/3)	19
図14 ST01 実測図 (S=1/40)	20
図15 ST03 実測図 (S=1/40)	22
図16 ST04 実測図 (S=1/40)	23
図17 石棺墓出土遺物 (S=1/3)	23
図18 ST05 実測図 (S=1/40)	24
図19 ST07 実測図 (S=1/40)	26
図20 SD02・03 実測図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	27
図21 SD02・03 出土遺物 (S=1/3)	27
図22 NR01 実測図 (平面 S=1/200・断面 S=1/60)	28
図23 NR01 出土遺物 (S=1/3)	29
図24 弥生～古墳時代の遺物① (S=1/3)	30
図25 弥生～古墳時代の遺物② (S=1/3)	31
図26 弥生～古墳時代の遺物③ (S=1/3)	32
図27 弥生～古墳時代の遺物④ (S=1/3)	33
図28 弥生～古墳時代の遺物⑤ (S=1/3)	34
図29 弥生～古墳時代の遺物⑥ (S=1/3)	35
図30 弥生～古墳時代の遺物⑦ (S=1/3)	36
図31 古代～近世の遺物① (S=1/3)	38
図32 古代～近世の遺物② (S=1/3)	39
図33 SK01 実測図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)	40
図34 SK04-07 実測図 (S=1/40)・SK04 出土遺物 (S=1/3)	41
図35 SS01 実測図 (平面 S=1/100・断面 S=1/60)・出土遺物 (S=1/4)	42
図36 SX01 実測図 (S=1/60)	43
図37 その他の遺物 [包含層出土] (S=1/3)	43
図38 川端遺跡平成29年度調査 SK01	58

表目次

表1 周辺主要遺跡一覧	2
表2 ピット一覧1	44
表3 ピット一覧2	45

表 4	遺物一覧 1 (石器)	45
表 5	遺物一覧 2 (土器・陶磁器)	46
表 6	遺物一覧 3 (土器・陶磁器)	47
表 7	遺物一覧 4 (土器・陶磁器)	48
表 8	遺物一覧 5 (土器・陶磁器)	49
表 9	遺物一覧 6 (土器・陶磁器)	50
表 10	遺物一覧 7 (土器・陶磁器)	51
表 11	遺物一覧 8 (金属器)	51

写真目次

【巻頭図版】

巻頭図版 1

写真 1 川端遺跡 平成 30 年度調査区遠景(南西から)

写真 2 A区遺構検出状況(上が北西)

巻頭図版 2

写真 3 石棺墓(ST04) 床面検出状況(南から)

写真 4 B区竪穴建物跡(SC01) 完掘状況(東から)

【写真図版】

写真図版 1

写真 1 B区南西トレンチ土層断面状況(北から)

写真 2 A区南西トレンチ土層断面状況(南東から)

写真 3 B区遺構完掘状況(右が北西)

写真図版 2

写真 4 竪穴建物跡(SC01) 検出状況(北から)

写真 5 SC01 東西ベルト土層断面(北西から)

写真 6 SC01 南北ベルト土層断面(南西から)

写真図版 3

写真 7 SC01-P1 土層断面(北から)

写真 8 SC01-P2 土層断面(西から)

写真 9 SC01-P3 土層断面(南から)

写真 10 SC01-P4 土層断面(北から)

写真 11 SC01-P5 土層断面(東から)

写真 12 SC01-P6 土層断面(南東から)

写真 13 SC01-SL1 半截状況(北西から)

写真 14 壁際溝土層断面(北西から)

写真図版 4

写真 15 ST03 棺内完掘状況(北東から)

写真 16 ST05 棺内完掘状況(北から)

写真 17 ST05 南側壁下石材確認状況(北東から)

写真図版 5

写真 18 ST01 検出状況(北から)

写真 19 ST01 西半土層断面(西から)

写真 20 ST01 東半土層断面(東から)

写真 21 ST01 完掘状況(北から)

写真 22 ST03 検出状況(北東から)

写真 23 ST03 棺内円礫出土状況(北東から)

写真 24 ST03 遺物(刀子) 出土状況(南東から)

写真 25 ST03 掘方完掘状況(北東から)

写真図版 6

写真 26 ST04 検出状況(南から)

写真 27 ST04 床面上赤色顔料(東から)

写真 28 ST04 床面下赤色顔料検出作業状況(南から)

写真 29 ST04 床面板石除去状況(南から)

写真 30 ST04 短軸断面(西から)

写真 31 ST04 側壁材下円礫確認状況(北東から)

写真 32 ST04 完掘状況(南から)

写真 33 ST05 検出状況(北から)

写真図版 7

写真 34 ST05 蓋石検出状況(北から)

写真 35 ST05 側壁上粘質土ブロック検出状況(北から)

写真 36 ST05 西半土層断面(南から)

写真 37 ST05 長軸東側掘方断面(北から)

写真 38 ST05 短軸南側掘方断面(西から)

写真 39 ST05 南側壁下石材検出状況(北から)

写真 40 ST05 完掘状況(北から)

写真 41 ST07 検出状況(南西から)

写真図版 8

写真 42 ST07 土層断面(北西から)

写真 43 ST07 棺内完掘状況(南西から)

写真 44 SD02 ベルト土層断面(北から)

写真 45 SD02 完掘状況(北から)

写真 46 SD03 ベルト土層断面(東から)

写真 47 NR01 検出状況(北西から)

写真 48 NR01 ベルト土層断面(南東から)

写真 49 SK01 検出状況(南西から)

写真図版 9

写真 50 SK01 土層断面(南西から)

写真 51 SK01 完掘状況(南西から)

写真 52 SK04-07 検出状況(南東から)

写真 53 SK04-07 土層断面(南東から)

写真 54 SS01 土層断面(北西から)

写真 55 SX01 検出状況(南東から)

写真 56 ST03 調査風景

写真 57 B区作業風景

写真図版 10

写真 58 出土土器・石器(縄文時代)

写真 59 SC01 出土遺物

写真 60 石棺墓出土遺物

写真 61 SD02・03 出土遺物

写真図版 11

写真 62 NR01 出土遺物

写真 63 出土土器(弥生～古墳時代) ①

写真図版 12

写真 64 出土土器(弥生～古墳時代) ②

写真図版 13

写真 65 出土土器(弥生～古墳時代) ③

写真図版 14

写真 66 出土土器(弥生～古墳時代) ④

写真図版 15

写真 67 出土石器・金属器(弥生～古墳時代)

写真 68 出土陶磁器・土器(古代～近世)

写真図版 16

写真 69 出土瓦質土器・石鍋・陶磁器(古代～近世)

写真 70 SK01・04 出土遺物

写真 71 SS01 出土遺物

写真 72 出土金属器

写真 73 出土金属器X線撮影写真

I. 遺跡の環境

1. 地理的環境

川端遺跡の所在する大村市は長崎県本土部の中央に位置する。多良山系の南西麓を占め、西側では大村湾に面する。市域の西半分は多良山系からの土石流堆積物により形成された扇状地形（大村扇状地）が南北約 7km・東西約 3km にわたって広がっており、雲仙市や多良岳周辺の火山麓扇状地を除けば県内最大の扇状地となっている。

大村湾を挟んでさらに西側の西彼杵半島は中生代(2億～6,600 万年前)の長崎変成岩よりなるが(西海市 2016)、大村市域で確認されている最も古い地質は古第三紀層(6,600 万～2,300 万年前)である。市域南部の三浦半島や郡川中流域の河床で古第三紀始新世(5,600～3,400 万年前)の諫早層群が露出しているほか、遺跡周辺の富の原地域では地下約 300 m で古第三紀の粗粒砂岩層が確認されている(松下ほか 1974、阪口 2013)。

富の原の粗粒砂岩層は諫早層群よりむしろ漸新世(3,400～2,300 万年前)の杵島層群に類似するという。

大村扇状地の扇頂と扇央を結ぶ基底地形の断面からは、現在の萱瀬川や扇状地よりも急傾斜の勾配が推定されている。また、鬼橋から富の原方向と上川原から黒丸方向にかけて西向きの尾根地形が二つ、黒丸から宮小路にかけて谷地形が認められる。

多良岳火山は後に開析され、火山南部及び北東部に土石流堆積物からなる多良火山麓扇状地が緩やかに広がっており、火山南部の諫早市から大村市南部にかけて大きく 3 つの火山麓扇状地が形成されている。

また多良岳火山西側は、郡川水系及び大上戸川水系により開析され、



図1 表層地質図 (S=1/100,000)

地質図幅「北部(縮尺 1:200,000)」『九州地方土木地質図』(九州地方土木地質図編纂委員会 1985)をもとに作成

【堆積岩類】

第四紀	{ 完新世 — 沖積層 { 更新世 — 扇状地堆積物	— Qal 礫・砂・粘土
		— Qt 礫・砂・粘土
古第三紀	— 始新世 — 諫早層群	{ Pas 礫岩・泥岩、等 { Pam 頁岩・砂岩、等

【噴出岩類】

第四紀	— 完新世～更新世	— 雲仙・多良火山岩類	— anu 角閃石安山岩・輝石安山岩・玄武岩
新第三紀	— 更新世～中新世	— 松浦玄武岩類	— bam 玄武岩(アルカリ・ルア卜質、等)
			— anph 輝石安山岩・玄武岩
			— // [縞] 凝灰角礫岩
			— anhh 角閃石安山岩
新第三紀	— 更新世～中新世	— 豊肥・瀬戸内火山岩類	— // [縞] 凝灰角礫岩
			— rhh 流紋岩・石英安山岩

その土石流堆積物等により火山裾部に扇状地が形成されている。この大村扇状地の形成時期は旧期(更新世)と新期(完新世)に分けられ、その他の谷底低地や氾濫原、河海性沖積地(三角州)等とともに大村平野をなしている。

扇状地の大部分を占める旧期扇状地は厚さ60m以上の砂礫層からなる。地点によっては始良丹沢火山灰(AT)に覆われ、さらにその上位には鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)をのせていることから、砂礫層上部は最終氷期最盛期(2~3万年前)に形成されたと推定されている。この砂礫層は大村湾海底の沖積層の基底砂礫層に連続する。扇端の両角部には新期扇状地または三角州が形成され、扇端北側角部では現在の矢次橋付近から郡川河口に向けて広がっている。これらは厚さ10m以上の砂礫とシルト・粘土の互層及び貝殻片からなっている。郡川下流の条里遺構はこうした砂礫層の上に構築されていたとみられ、新期扇状地面と沖積面の形成は1,300年前までにはほとんど完了していたと考えられる。扇状地の表面には土石流堆積物や自然堤防などからなる多数の微高地が傾斜方向に放射状に伸びており、その間に旧河道が認められる。

2. 歴史的環境

川端遺跡周辺では旧石器時代から近代までの各時代の遺跡が確認されており、継続的に生活の場として利用されてきたことが分かる。

旧石器時代の遺跡は郡川右岸の多良山系西麓丘陵上に分布しており、ナイフ形石器や台形石器を出土した葛城遺跡、野田A遺跡、野田の久保遺跡がある。遺跡が丘陵上に分布する状況は縄文時代早期中葉の押型文土器段階まで続くが、縄文時代早期末になると大村湾周辺の低地部まで遺跡が進出する。縄文時代の遺跡として黒丸遺跡、立小路遺跡、岩名遺跡、野田の久保遺跡、竹松遺跡などがあり、黒丸遺跡では縄文時代晩期に扁平打製石斧や石皿の出土量の増加が顕著に見られる。中尾篤志は「最近の研究では九州の縄文時代後期後半以降、ダイズ・アズキ・イネ・オオムギなどの栽培の可能性が説かれ、扁平打製石斧の急激な増加はこれらの栽培と密接に関連した現象である可能性が指摘」されており、長崎県内でも島原半島でダイズの土器圧痕やイネの圧痕が検出されていることから「同時期に

表1 周辺主要遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	立地	時代	備考
1	川端遺跡	遺物包含地	平野	弥生時代~中世	
2	竹松遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代~近世	
3	黒丸遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代~近世	集落遺跡
4	沖田黒丸条里跡	条里跡	平野	古代~中世	
5	嵩木遺跡	墳墓	平野	弥生時代~古墳時代	
6	富の原遺跡	遺物包含地	平野	弥生時代	甕棺・鉄戈
7	平野遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代~中世	
8	立小路遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代	
9	小路口遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代~中世	
10	小路口鬼の穴古墳	古墳	平野	古墳時代	横穴式石室
11	竹松小学校遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代	
12	寿古遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器時代~近世	
13	好武城跡	城館跡	丘陵	中世	大村氏の居城
14	今富城跡	城館跡	台地	中世	大村氏の居城
15	冷泉遺跡	遺物包含地	台地	古墳時代	
16	皆同郷古城石棺	墳墓	平野	古墳時代	
17	稗田遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生時代~古墳時代	
18	憩場石棺遺跡	墳墓	台地	古墳時代	
19	野田の久保遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文時代・弥生時代・近世	
20	黄金山古墳	古墳	台地	古墳時代	石棺系横穴式石室
21	地堂古墳	古墳	台地	古墳時代	横穴式石室
22	岩名遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代~弥生時代	甕棺
23	野田遺跡	遺物包含地	台地	縄文時代・弥生時代・近世	
24	葛城古墳	古墳	台地	古墳時代	横穴式石室
25	葛城堤遺跡	遺物包含地	台地	旧石器時代	



図2 周辺遺跡分布図 (S=1/20,000) 国土地理院標準地図をもとに作成

おける大村湾沿岸での遺跡の大規模化や扁平打製石斧の増加も、同様の文脈で理解できる可能性は高い」としている（中尾 2013）。

弥生時代の遺跡としては黒丸遺跡、稗田遺跡、竹松遺跡、富の原遺跡、小路口遺跡、岩名遺跡などがある。黒丸遺跡では石包丁などの大陸系磨製石器、矢板列や木製農耕具が見られ、水田耕作が行われていたと考えられる。集落は富の原遺跡で中期～後期初頭の掘立柱建物跡や堅穴建物跡が、竹松遺跡で後期の堅穴建物跡が確認されている。両遺跡では墓域も確認されており、成人甕棺墓と在地の墓制である石棺墓が共存している。富の原遺跡では成人甕棺墓の副葬品として鉄剣や鉄戈が出土しており、北部九州地域との強いつながりを持つ拠点集落であったことがうかがえる。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては冷泉遺跡で堅穴建物跡と墓域が確認されており、堅穴建物跡から台付甕などとともに出土した低脚高坏や底部の丸底化した甕は、大村市域では最古段階の土師器に位置づけられる。墓域は箱式石棺墓 3 基と配石墓 3 基が確認されており、秀島貞康は石棺墓と配石墓が 3 基ずつ 2 つのグループに別れ、グループ間に約 9m の間隔があることから築造時にはマウンドが存在した可能性を指摘している（秀島 2013）。他に古墳時代の集落遺跡は黒丸遺跡、稗田遺跡、岩名遺跡、竹松遺跡などがあり、稗田遺跡、岩名遺跡と竹松遺跡では堅穴建物跡が確認されている。墳墓は古墳時代前期の墳丘が滅失した円墳が竹松遺跡で確認され、前期以降継続して古墳が築造されていたことが分かってきた。郡川右岸の丘陵上に所在する黄金山古墳は出土遺物から 4 世紀後葉から 5 世紀初頭に位置づけられる。現在は失われているが、主体部は箱式石棺上に板石を積み石室を構築する石棺型横口式石室であり、同様の石室は大村湾沿岸では東彼杵町ひさご塚古墳などに見られる。この石室の構築技術は「玄界灘沿岸部の石室構築技術の影響を受けながら、実質的な石室構築技術は、肥後型石室の技術を強く受け継いで」いるものとされる（宇野 2013）。6 世紀には横穴式石室を有する円墳である小路口鬼の穴古墳と、消滅のため詳細は不明だが前方後円墳といわれる茶屋の辻古墳が大村扇状地上に築かれる。古墳以外にも、古墳時代の墳墓として皆同郷古城石棺や憩場石棺などが知られている。これらの石棺は平野や低丘陵上に位置するが、平成 30 年度に多良岳山麓丘陵中腹の標高 100m を越える地点でも弥生時代終末期～古墳時代前半の石棺墓（坂口町石棺墓）が発見された（柴田編 2019）。

古代になると大村市一帯は肥前国彼杵郡となる。郡川下流域は彼杵郡衙比定地の一つであり、郡川下流域や大上戸川下流域には条里地割が残っている。平安時代以降には郡七山十坊と呼ばれる寺院群があり、中世には撰関家領荘園彼杵荘となることから肥前西部では少ない広い平野部を有する大村市域の重要性が窺える。古代から中世の遺跡は黒丸遺跡、寿古遺跡、竹松遺跡があり、寿古遺跡やそれに隣接する好武城跡では古代から中世の輸入陶磁器などが出土している。近年の長崎県教育委員会、大村市教育委員会の竹松遺跡における調査では四面庇付掘立柱建物跡や総柱建物の倉庫群、刻書紡錘車、刻書・墨書土器、石帯、多量の輸入陶磁器の出土が確認されており、有力者の存在が想定される。

後に大村藩主となる大村氏は藤津郡から本拠を移したものとされる。その移動の時期には諸説あるが、久田松和則は貞治 5（1366）年の郡地方の寺院焼失に着目し、この頃から大村氏が彼杵郡に本拠を移してきたものとする（久田松 2014）。城館として郡川流域に好武城跡、今富城跡があり、居館は最初大上戸川沿いの低地に大村館がつくられたが、16 世紀前半には対岸丘陵上に三城城が築城される。大村氏の居城が三城城に移った後、大村館周辺は城下町（三城城下）として発展し、大村藩初代藩主大村喜前により玖島城が築城されるまで、三城城とともに大村氏の領地支配の中心となった。

II. 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

(1) 都市計画道路池田沖田線建設

大村市の中心市街地以南は幹線道路が国道 34 号線のみであり、慢性的な交通渋滞の発生が問題となっていた。また大村市は、人口増加に伴い旧来の狭小な道路網の中で市街地化が進行している。都市計画道路池田沖田線はこのような背景の中で、国道 34 号線のバイパス機能を有し、大村中心市街地の渋滞緩和及び防災上危険な市街地の解消など地域の利便性向上を目的とした主要幹線道路として平成 15 年 8 月 22 日に延長 3,420m が都市計画決定された。

また、池田沖田線起点は長崎自動車道大村インターチェンジや新規開業する九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）新大村駅、長崎空港に程近く、当該道路を整備することで、都市計画道路久原池田線、富の原鬼橋線、国道 444 号線といった周辺の既存道路とのネットワークによってこれらの交通網へのアクセスを容易にし、緊急時における円滑な交通の確保が期待される。

(2) 協議

都市計画道路池田沖田線の建設予定地は小路口遺跡、立小路遺跡、川端遺跡、竹松遺跡といった周知の埋蔵文化財が点在しており事業実施の際には調査が必要となるため、平成 20 年度から県央振興局都市計画課（現在は道路第二課）と埋蔵文化財の取扱いについての事前協議を重ねてきた。

平成 24 年 5 月 24 日、工事に先立ち、長崎県教育委員会と県央振興局都市計画課で「竹松遺跡及び道路建設予定地内の埋蔵文化財の取扱い」について打合せを実施した。県教育委員会は周知の埋蔵文化財である竹松遺跡の重要性を説くとともに、路線計画が変更できない場合は記録保存調査の実施が必要である旨を通知した。また、試掘・範囲確認調査の具体的方法の説明として、用地買収が完了した箇所から 20m 間隔で 2m × 2m の試掘坑を設定する予定であること、立ち退き宅地跡及び地形の状況などから設定箇所が変化すること、現地見や新幹線建設事業に伴う既往調査の結果から本調査の場合には大規模な調査が予想されることを通知した。

2. 試掘・範囲確認調査

(1) 調査期間と面積

①平成 25 年度

期間：平成 26 年 1 月 16 日～平成 26 年 1 月 23 日

面積：28 m²（うち川端遺跡調査範囲内 4 m²）

②平成 28 年度

期間：平成 28 年 9 月 26 日～平成 28 年 9 月 30 日

面積：8 m²（うち川端遺跡調査範囲内 8 m²）

(2) 調査体制

調査主体：長崎県教育委員会

調査担当：長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所

①平成 25 年度

文化財保護主事 山梨千晶

文化財調査員 新井実和

②平成 28 年度

文化財保護主事 浦田和彦

文化財調査員 村川逸朗

(3) 試掘・範囲確認調査の概要

池田沖田線に伴う試掘・範囲確認調査は平成 25～28 年度に用地買収が完了した箇所から順次行われ、平成 30 年度川端遺跡発掘調査範囲についての試掘調査は平成 25 年度と平成 28 年度に実施された。

① 調査方法

調査対象範囲に 2m × 2m の試掘坑を設定し、人力掘削によって発掘調査を行った。平成 25 年度調査では計 5 箇所 28 m²を調査し、内 1 箇所 (TP3、4 m²) が後述する A 区に相当する部分に該当する。B 区相当範囲については平成 28 年度に計 2 箇所 8 m²の調査を実施した。

② 基本層序

調査区にあたる範囲の層序は平成 25 年度調査と平成 28 年度調査で共通している。

1 層：耕作土。

2 層：黒色～灰褐色土。僅かに砂が混じりマンガンの沈着が見られる。農客土か。

3 層：黒色土。近世～弥生時代の遺物を含む。

4 層：明黄褐色土。平成 25 年度試掘調査 TP3 では人頭大以上の礫を含む。遺物は出土していない。

③ 調査結果

平成 25 年度の調査ではほとんどが小片ではあったが、3 層を中心に弥生時代から古墳時代の遺物が出土し、また試掘坑壁面でピットの可能性がある落ち込みがあることを確認した。この調査で TP3 周辺に弥生時代から古墳時代の包含層が残存している可能性が高いことが想定された。

平成 28 年度の調査では平成 25 年度に調査が実施できなかった畑に調査坑を設定し、3 層上面で列状に並ぶ石が確認された。遺物は 2～3 層から近世の陶磁器や弥生時代から古墳時代の土器片が出土し、包含層が広がっていることが確認された。また、試掘調査対象地の周辺の畑脇には石棺墓の棺材と思われる板石が見られた。耕作者からそれらの石材が田畑の耕作中に見つかったという内容を聞き取っており、周辺に石棺墓が存在する可能性が考えられた。これらの試掘調査結果を受け、1,448 m²が本調査範囲として設定された。



図3 本調査調査区位置図 (S=1/4,000)

「長崎県遺跡地図」(長崎県学芸文化課)をもとに作成

III. 調査の概要

1. 調査期間と面積

期間：平成 30 年 5 月 21 日～平成 30 年 10 月 10 日

面積：1,448 m²

2. 調査体制

所長	石橋 明
総務課長	田川正明
調査課長	寺田正剛
調査課 主任文化財保護主事	山梨千晶

<調査支援>

○株式会社大信技術開発

現場代理人	村上 隆幸
調査員	竹田 将仁
調査員	柳田 利明
調査員	大坂亜矢子
調査員	横山 精士
調査員	堀苑 孝志 (平成 30 年 8 月～)
調査員	伊ヶ崎穰次 (平成 30 年 8 月～)

○扇精光コンサルタンツ株式会社

調査員	織田 健吾
調査員	町田 利幸

3. 発掘調査の流れ

(1) 協議

発掘調査の開始に先立ち、平成 30 年 4 月 17 日に県央振興局道路第二課、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所、長崎県埋蔵文化財センターの三者で現地協議を行った。協議では調査範囲、プレハブヤード用地の確認と平成 29 年度調査区の排土置場としての利用の可否、調査開始時期等の工程予定などを確認した。なお、この協議の際には調査範囲外の道路建設用地内にある石垣を撤去して排土移動ができるようにしたうえで平成 29 年度川端遺跡調査区を排土置場として利用することを考えていたが、支援業者決定後の打ち合わせの際に石垣撤去は難しいとの意見を受け、調査時には調査区内で排土を仮置きして反転調査を行うこととなった。

(2) 発掘調査の流れ

調査範囲内には中央やや北寄りに 1m 程度の段差があり北側が低くなっている。調査区内で排土の仮置きをすることとなったため、この段差を境に北側を A 区、南側を B 区とし、B 区、A 区の順で調

査を実施した。平成30年5月21日から調査区の設定、環境整備、重機を用いた表土掘削を行った。表土掘削中にB区の南東部が大きく攪乱を受けており、攪乱中に拳大から人頭大の礫が密に含まれていることが分かったため、同時に重機を用いて攪乱を除去している。6月1日から作業員を雇用し、遺構検出、土層堆積状況確認のためのトレンチ掘削（A・B区南西壁際、B区南東壁際、A区北西壁際）、遺構調査、包含層掘削、記録作業を行った。また、A・B両区とも掘削、記録作業終了後に重機を用いた下層確認を行った。

4. 層序と地形

(1) 基本層序

1層 暗褐色（10YR3/3）粘質土 粘性弱い、しまり弱い。わずかに砂混じる。耕作土。

2層 暗褐～黒褐色（10YR3/3～3/2）粘質土 粘性やや強い、しまりやや強い。細砂～粗砂大の白・黄色粒・0.5～3cmの礫をまばらに含む。層下部に酸化鉄が沈着する。農業用の客土と考えられ、近世の遺物を含む。

3a層 黒褐色（10YR2/2）粘質土 粘性強い、しまり強い。細砂・白色粒・1～5cmの礫をまれに含む。弥生時代～中世の遺物を含む包含層。

3b層 黒褐～黒色（10YR2/2～2/1）粘質土 粘性強い、しまりやや弱い。細砂・白色粒・1～3cmの礫をまれに、5～10cmの礫をごくまれに含む。層下部に4層由来と思われる褐色土ブロック・人頭大の礫を含む。弥生時代後期～古墳時代の遺物を主体とする包含層。層最上部に中世の遺物をわずかに含むが、3a層の影響を受けたものと考えられる。

A区は攪乱の影響もあり調査時に3a層と3b層の区別が難しく、遺物はすべて3層として取り上げている。

4層 黄褐～暗褐色（10YR5/6～3/4）砂質シルト 粘性強い、しまり強い。細～粗砂・白色粒・1cm～人頭大程度の礫を多く含む。30cm以上の礫をまばらに含む。

5層 黄褐～褐色（10YR5/6～4/4）砂質シルト混じり砂礫 粘性弱い、しまり強い。粗～極粗砂・1～3cmの礫を密に、5cm～人頭大の礫を非常に多く含む。一部砂層。扇状地礫層。

(2) 旧地形の推定

基本層序の1・2層は客土と考えられA・B区ともに水平堆積を呈するが、3a層以下はわずかに北に向けて下っている状況が確認できる。3a・3b層は黒ボク土であるが、阪口和則はこの黒ボク土について田中正央の研究を引用し、降下火山灰起源ではなく流水の影響を受けた堆積物であり、扇状地形成時に礫層の上にフラッド・ロームとして堆積したものが母材となったとしている（阪口2013）。調査区の北に向かって傾斜する堆積状況は南東から北西に向けて傾斜する扇状地地形を反映したのと考えられる。調査では黒ボク土が細分され、細分した層間で遺物の時期も分かれることから弥生時代以降も複数回に渡る洪水などにより黒ボク土の堆積が進んでいったことが想定される。

東西方向の堆積状況は調査区の南北で異なっており、調査区南壁ではほぼ水平に堆積するものの、調査区北壁では東側で扇状地礫層と考えられる砂礫層が検出されるレベルが調査区内のほかの土層断面に比べて高い。また、A区北東部では包含層が検出されず、ビニール片などを含む攪乱土が4層直上まで入る状況が確認されている。周辺の地形として、調査区から東に200m程の位置を郡川が北流

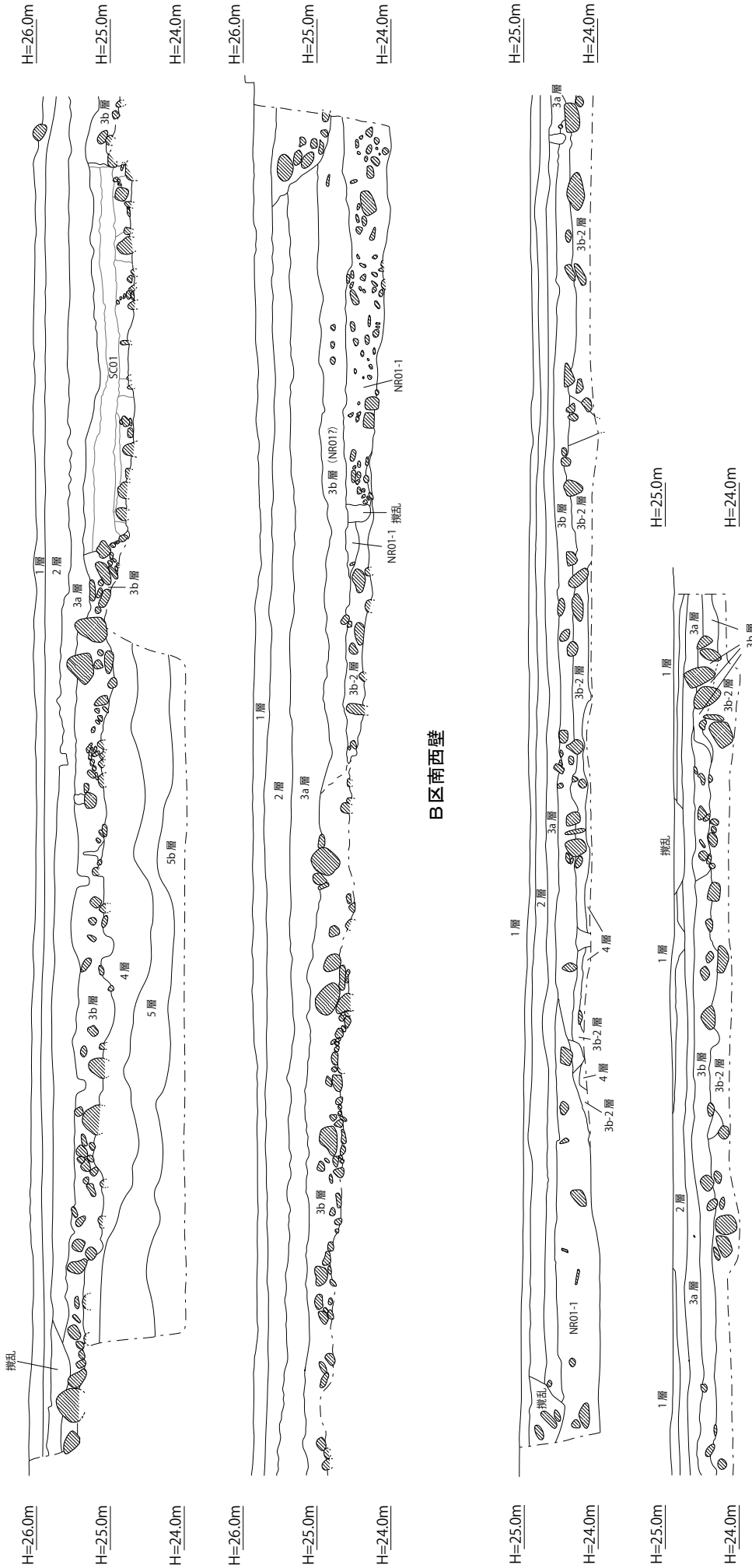
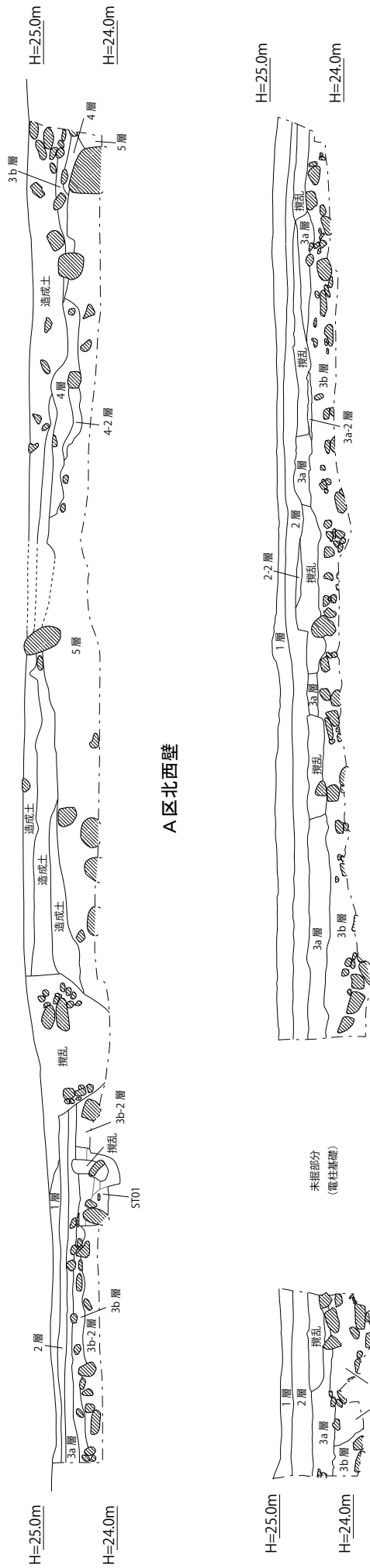


図4 基本土層断面 (S=1/80)



【基本土層・A区北西壁・B区南東壁土層注記】

- 1層 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 粘性弱い、しまり弱い。わずかに砂混じる。耕作土。
- 2層 暗褐～黒褐色 (10YR3/3～3/2) 粘質土 粘性やや強い、しまりやや強い。細砂～粗砂大の白・黄色粒・0.5～3cmの礫をまばらに含む。層下部に酸化鉄が沈着。
- B区南東壁 2-2層は2層よりもやや色調が暗い。
- 3a層 黒褐色 (10YR2/2) 部分粘質土 粘性強い、しまり強い。細砂・白色粒・1～5cmの礫をまばらに含む。中世～弥生時代の遺物を含む包含層。
- B区南東壁 3a-2層部分は3a層よりやや色調が明るい。
- 3b層 黒褐～黒色 (10YR2/2～2/1) 粘質土 粘性強い、しまりやや弱い。細砂・白色粒・1～3cmの礫をまばらに、5～10cmの礫をごくまれに含む。層下部に4層由来と思われる褐色土ブロック・人頭大の礫を含む。
- 3b-2層 3b層と4層の漸移層
- 4層 黄褐～暗褐色 (10YR5/6～3/4) 砂質シルト 粘性強い、しまり強い。細～粗砂・白色粒・1cm～人頭大程度の礫を多く含む。30cm以上の礫をまばらに含む。
- A区北西壁 4-2層部分はしまりが非常に強い。
- 5層 黄褐～褐色 (10YR5/6～4/4) 砂質シルト 混じり砂礫 粘性弱い、しまり強い。粗～極粗砂・1～3cmの礫を密に、5cm～人頭大の礫を非常に多く含む。
- 5b層 黒褐色 (10YR3/1) 粗砂～細砂 しまりやや弱い (層上部は強い)、2cm～人頭大の礫を含む、鉄分沈着により赤みを帯びる。
- NR01-1 黒褐色 (10YR2/3) 砂混じり粘質土 粘性・しまりやや強い、0.5～10cmの礫を深い部分ほど密に含む。底部に酸化鉄沈着。

図5 A区北西壁・B区南東壁土層断面 (S=1/80)

しており、この郡川沿いの河岸段丘低位面と調査区の間には微高地が存在している。今回の調査区は現状では微高地が下りきった位置にあたり周辺の畑と標高は変わらないが、本来は調査区北東部に微高地が張り出していたものと考えられる。南北方向においてもA区では3a層上端が水平になり、B区に比べ堆積も薄い。用地買収前の地割ではA区は現在北西に隣接する畑と一枚の畑地となっており、標高が下がる北西側に合わせて周辺を削平したうえで客土を搬入しているものと考えられる。

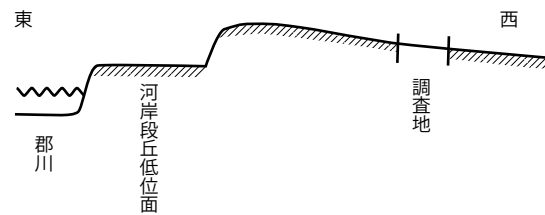
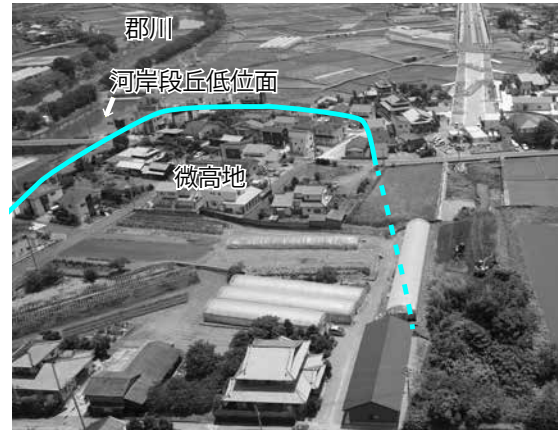


図6 調査区東側微高地断面模式図

5. 調査の概要

(1) 遺構

調査では竪穴建物跡1軒、石棺墓5基、溝状遺構2条、自然流路1条、土坑5基、ピット82基、石列状遺構1列、不明遺構1基を検出した。竪穴建物跡からは古式土師器や弥生土器が出土しているが、床面直上から出土した土器に古式土師器が含まれていることから、弥生時代終末から古墳時代前期の遺構と考えられる。石棺墓は1基から副葬品と考えられる刀子が1点出土しており、ほかの石棺墓でも埋土や掘方から弥生時代後期の土器片がわずかに出土している。5基のうち3基は後世の土地改変により破壊されていたが、側壁が残存しているものをみると、いずれも側壁石材の下に円礫や板石を入れて側壁の高さを調整していると思われる状況が確認できた。

(2) 遺物

遺物は攪乱や遺構のほか2層から3b層で出土しており、特に3a層、3b層からの出土量が多い。2層及び攪乱は近世陶磁器を中心とした遺物が出土している。3a層からは土師器、弥生土器の出土も見られるが、滑石製石鍋や底部糸切の土師器、白磁・青磁片が含まれており、古代末から中世までの遺物包含層と考えられる。3b層は層最上部に滑石製石鍋や陶磁器が見られたが、3a層からの混ざり込みである可能性が高い。層全体としては弥生時代後期の土器が多く、古式土師器も含む。高坏や方形透かしを有する器台の破片が目立つが、器台の多くは小片となっており、実測できなかったものが多い。少量ながら須恵器、縄文土器片や打製・磨製石斧、石鏃、黒曜石の剥片といった、縄文時代や古代の遺物も出土している。

6. 整理作業・報告書作成

令和元年6月から9月にかけて、長崎県埋蔵文化財センターで整理作業員を雇用して報告書作成に向けた整理作業を実施した。整理作業は遺物の水洗、接合、ID番号付与、実測、遺構・遺物のデジタルトレースの流れで行った。出土金属製品は透過X線撮影後に、鉄製品はグラインダー、銅製品はメスを用いて錆取りを行い、保存処理を実施した。処理完了後はチャック付袋に収納し、デシケーター内で保管している。また、石棺墓で検出された赤色顔料の由来について、長崎県埋蔵文化財センターに導入されている蛍光X線分析装置等による自然科学分析を実施している（第VIII章）。

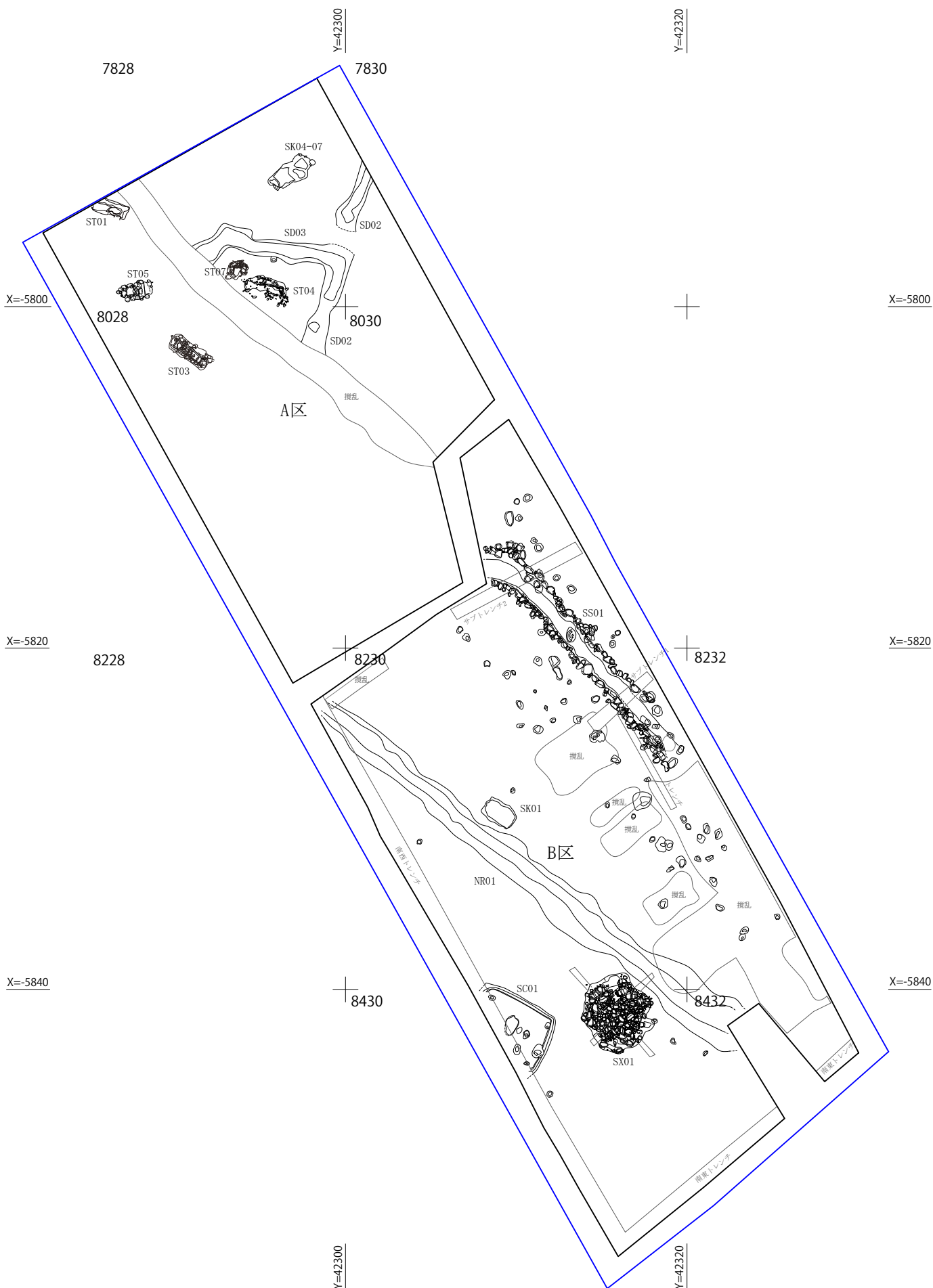


図7 調査区全体図 (S=1/300)

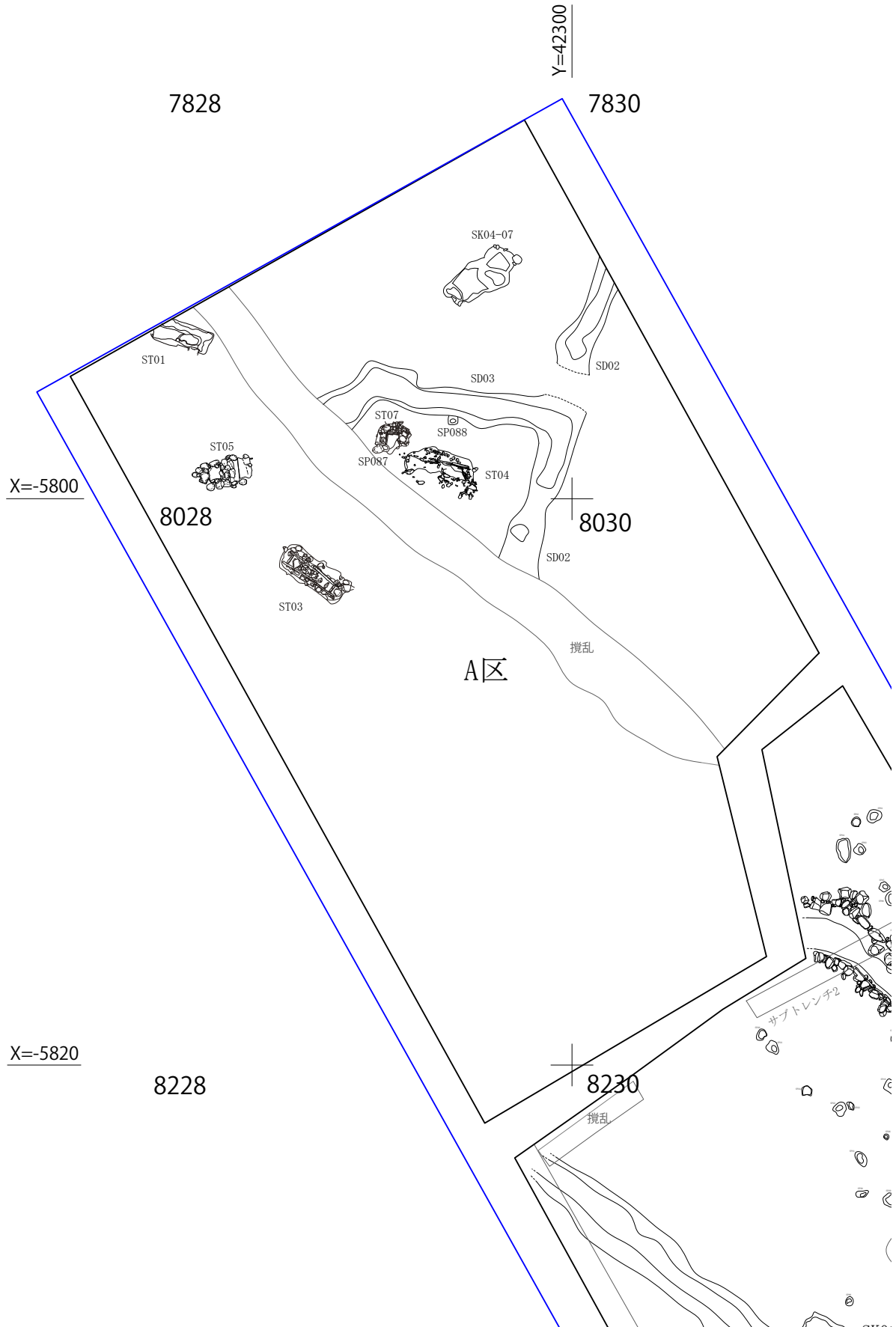


図8 A区遺構分布図 (S=1/200)

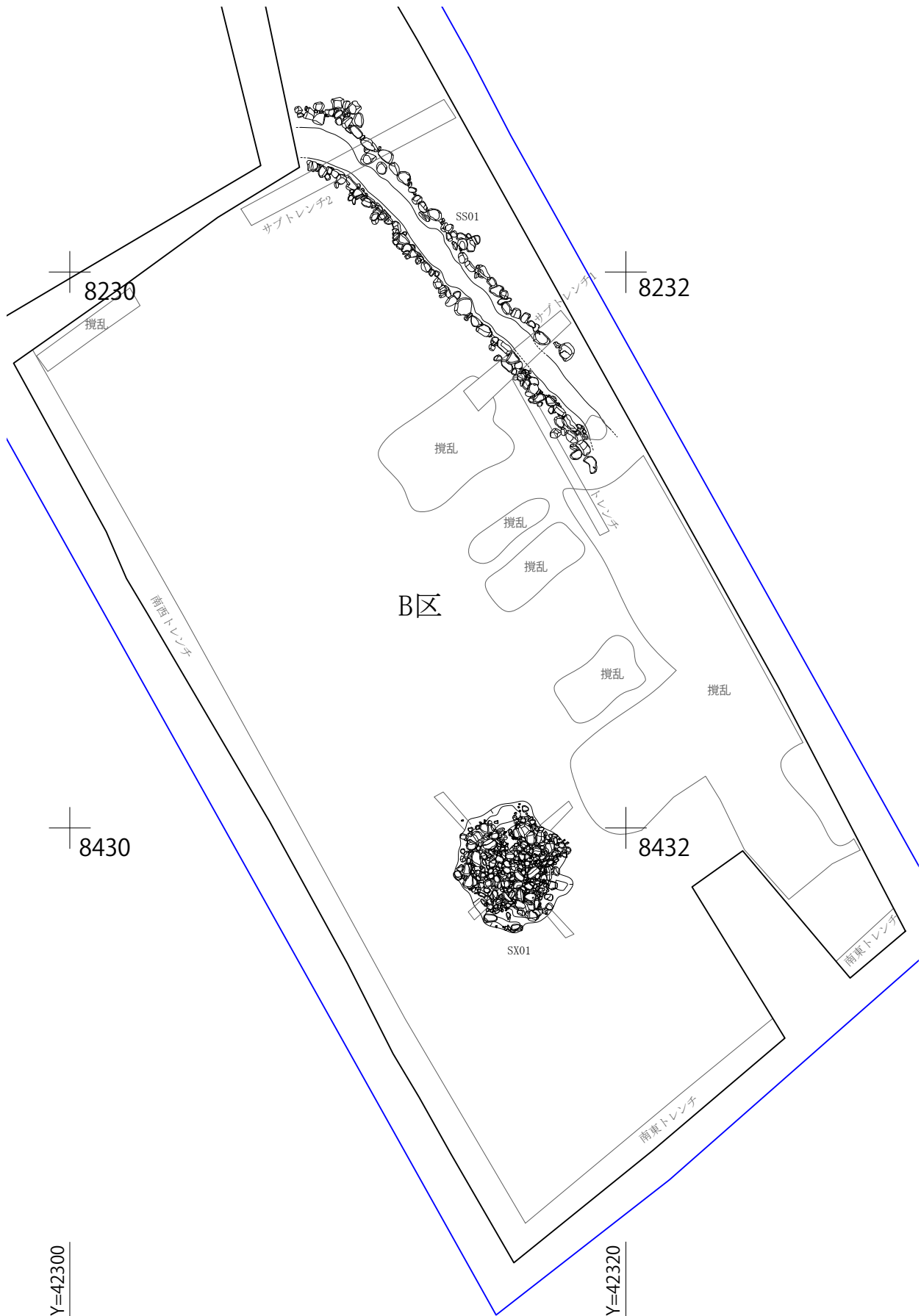


図9 B区遺構分布図 [3a層上面] (S=1/200)

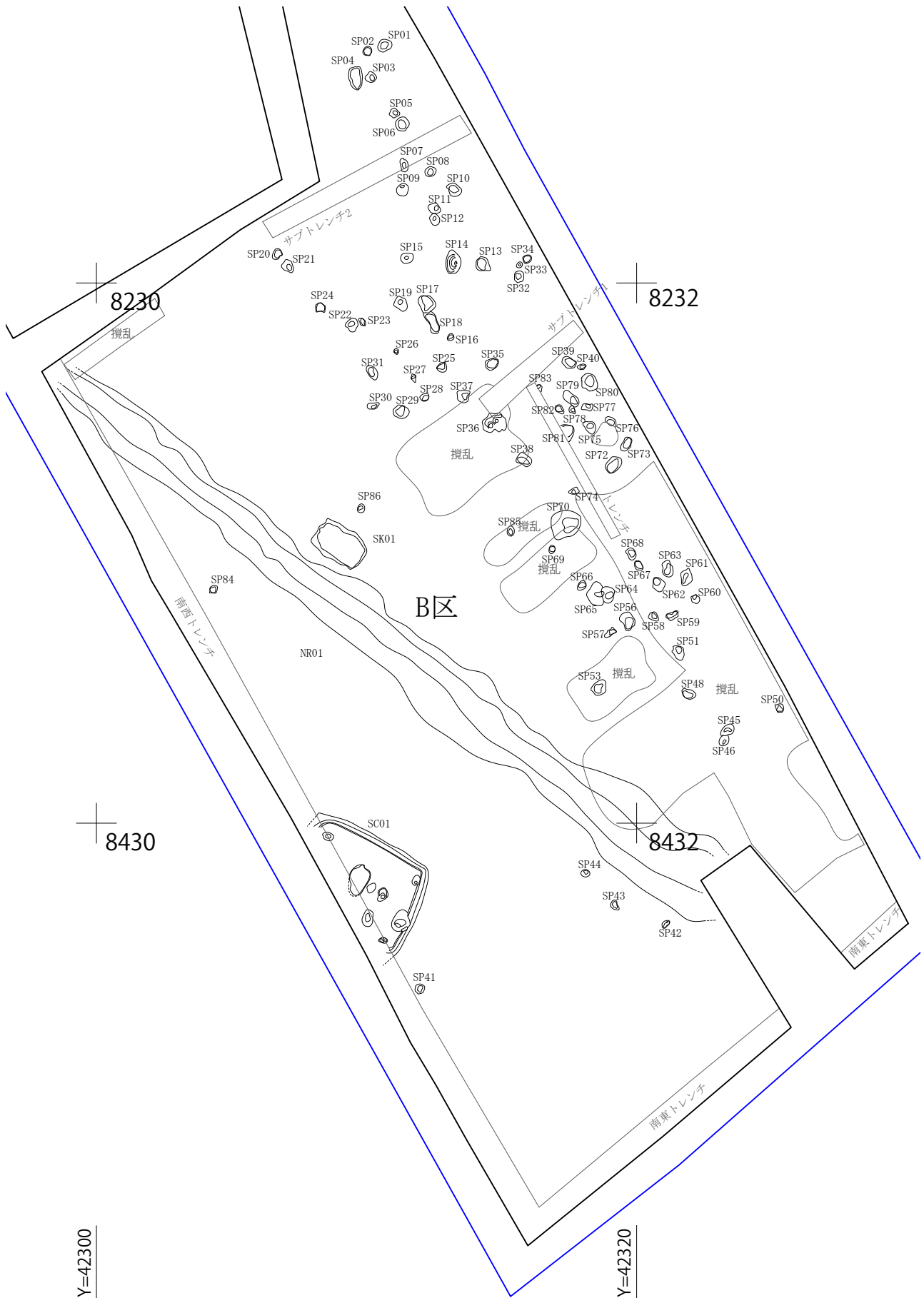


図 10 B区遺構分布図 [3b層・4層上面] (S=1/200)

IV. 縄文時代の遺物

1. 遺物

(1) 土器

1は深鉢片で、3b層から出土した。口縁がわずかに外反し外面に貝殻腹縁を押捺する。器壁は小孔が多くあばた状になっているが、内外ともにミガキの痕跡が見られる。形状や施文から縄文時代早期の所産である可能性があるが他に同時期と思われる遺物は確認できない。

2・3は深鉢の底部で、器壁は内外とも小孔が多くあばた状を呈する。縄文時代後期から晩期の所産と考えられる。

(2) 石器

①打製石斧

4は大型の安山岩製打製石斧で、基部が欠損する。やや厚手で板状の自然礫を加工しており両側面と刃部はやや丸みを帯びる。側縁から刃部に調整が入り表面の調整は浅い。使用痕は確認できなかった。

②磨製石斧

5は蛇紋岩製の磨製石斧で、側縁の一部と基部が欠損する。全面を研磨し扁平に仕上げている。側縁は面取りされており明瞭な稜を有する。着柄痕や使用痕は確認できなかった。

6は蛇紋岩製磨製石斧を再加工した小型の製品で、石斧から剥離した破片の剥離面端部を研磨して刃部を作り出している。加工されているのは刃部のみで全体は剥離したままの状態で使用されている。用途は不明だが石鑿などの小型加工具として使われたものであろうか。

③環状石製品

7は安山岩製と思われる石製品で、円礫の中央部に表裏両面から穿孔を施している。穿孔の周囲に明瞭な面は無く、側縁部も丸みを帯びており稜は見られない。近隣では竹松遺跡で同様の石器が出土しており石錘と報告されている（安楽 2016）。側縁の一部に剥落が見られるが使用によるものか不明である。

④石鏃

8～10は黒曜石製の石鏃。8は側縁が直線的な凹基鏃で、両脚部が欠損する。裏面の抉り周辺には調整が及んでおらず、一次剥離面の痕跡を残している。9は先端と両脚部が欠損する。基部は深く抉っている。体部中央が厚く、断面形は三角形に近い。全体的に摩滅している。10は先端を丸く収めており平面形は台形に近い。基部の抉りが浅い凹基鏃と見られるが、抉りの両側端部には調整が見られない事から両脚部が欠損している可能性もある。表裏全面に細い調整痕が見られる。

11、12は安山岩製の石鏃で、11は基部をV字形に大きく抉る。右側側縁の2箇所が欠損し抉れている。体部中央に稜が通り、表裏全面に斜め方向の擦過痕が見られる。12は抉りの浅い凹基鏃で左側脚部が僅かに欠損している。ローリングを受けていると見られリング等は不明瞭である。左右の形状がアンバランスで右側脚部も欠損の可能性があるが、摩滅のためか明瞭な破断面は見られない。表裏全面に擦過痕が見られる。

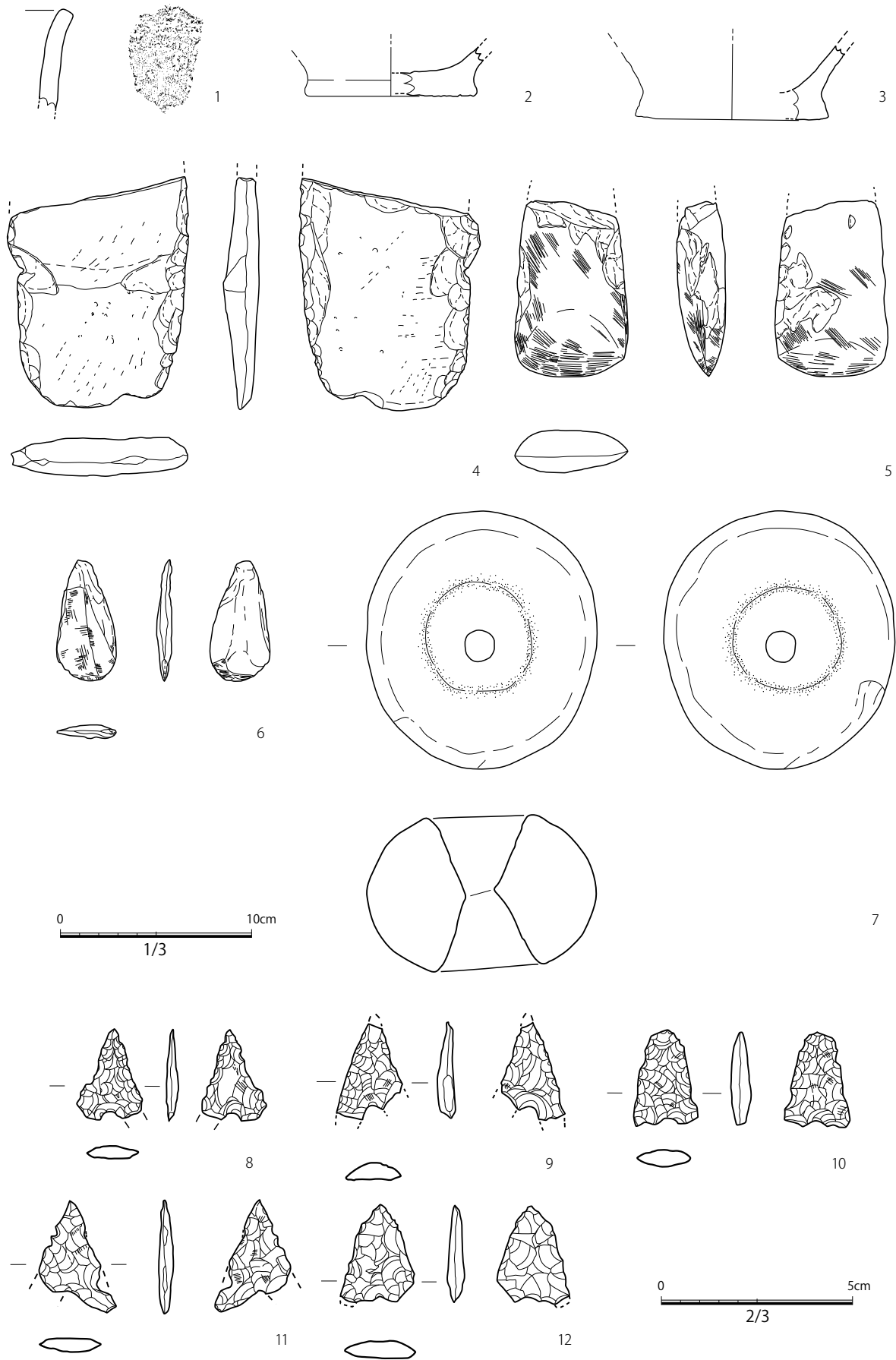


図 11 縄文時代の遺物 (S=1/3・石鏃のみ 2/3)

V. 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 竪穴建物跡 (SC)

① SC01

B区 8230・8430 グリッドに位置し 3b 層上面で検出した。平面形は長方形を呈し一部が調査区外に延びる。北東辺 4.6m、南東辺約 3.5m、検出面から床面までの深さは約 20cm を測り、壁際には幅 16～22cm、床面からの深さ 8～12cm の壁際溝がめぐる。炉の周囲と壁際の一部を除き床面の硬化が見られる。床面では炉跡 1 基、ピット 6 基 (P1～P6) を確認した。

炉跡は竪穴建物跡中央部に位置し長さ 114cm、幅 74cm の歪な楕円形を呈する。掘り込みは北側が浅く南側が深くなり、炉床の焼け方も南側の方が強い。深さは最も深い部分で建物床面から 20cm を測る。

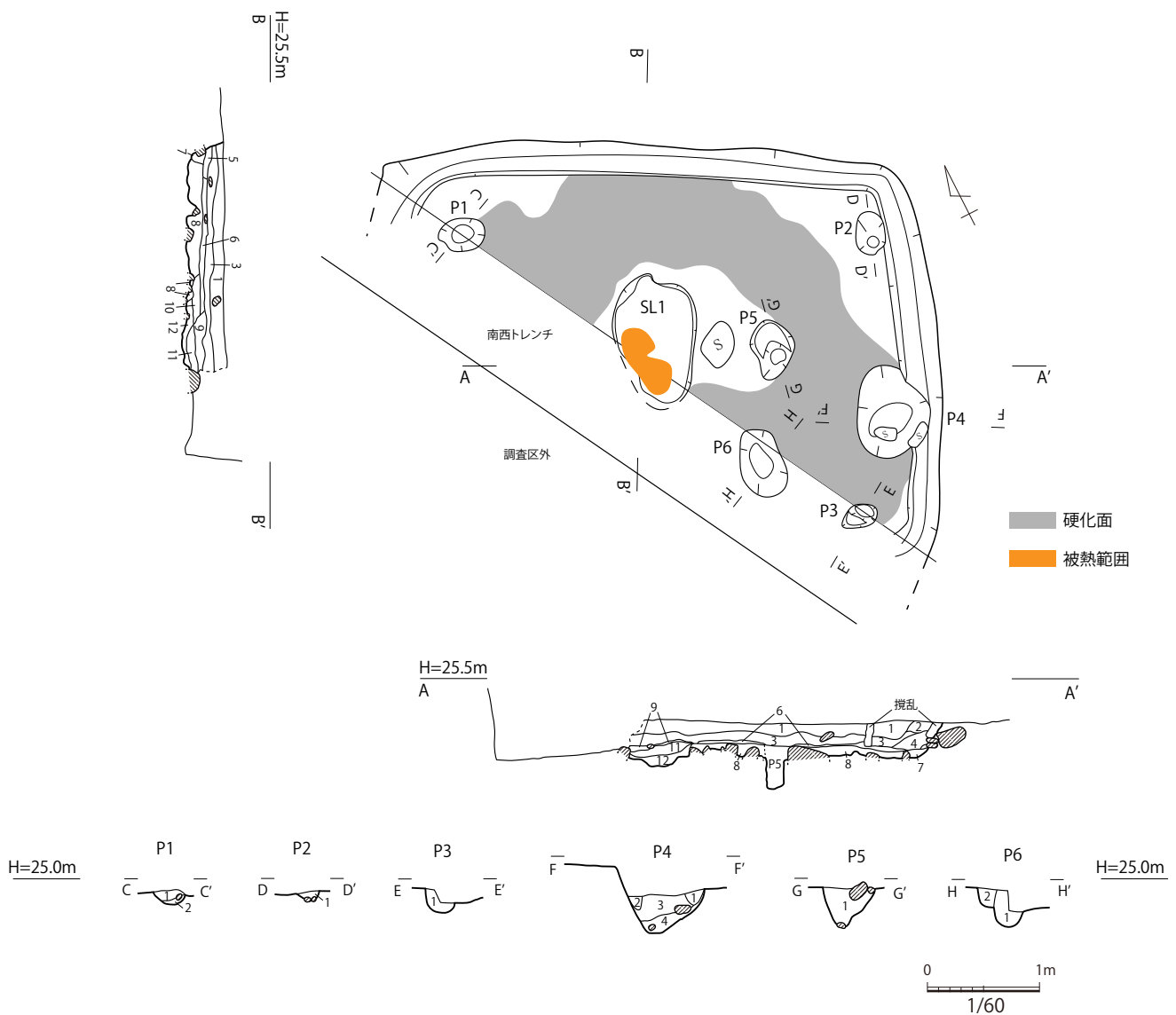


図 12 SC01 実測図 (S=1/60)

P1～P6 はいずれも楕円形を呈し、長軸 20～70cm、深さ 8～39cm を測る。P1～P3 は検出位置から柱跡とも考えられるが、P1、P2 はそれぞれ深さ 12cm、8cm と浅く支柱穴とは考えにくい。P4 は建物跡短辺中央の壁際に位置しており梯子穴等の出入口施設の可能性がある。

遺物は弥生土器、古式土師器が出土した。13～14 は古式土師器の甕で、13 は布留系甕である。竪穴内の北東部の床面直上、埋土下層・上層で出土した土器片 3 点が接合した。口縁部は若干内湾し、中央付近がやや肥厚する。端部は外側におさめて面取りしている。調整は、口縁部は内面に強いヨコナデもしくはヨコハケ後にナデを行い、外面は横方向のナデ調整が見られる。外面肩部付近にはヨコハケ、体部内面は横位のケズリが施され、器壁を薄く仕上げている。古墳時代前期前半のものと考えられる。14 は南東部埋土下層で出土した。やや外側に開きながら直立する口縁で、調整は外面にタテハケ、内面に横位に近いナメハケが施される。内外面ともにハケ目を切って横方向への砂粒の動きが観察され、ハケ後にヨコナデ調整を行っていると思われる。15 は鉢で床面直上で出土し、口縁が内湾し端部は丸くおさめる。外面にはヨコナデ、内面にはヨコハケ後ナデが施される。16 は埋土下層出土の小型丸底壺で、頸部の締まりはやや弱く、口縁部は長く伸びる。調整は風化のため不明瞭である。17 は布留式甕の口縁部で、埋土上層から出土した。中央部がやや肥厚し若干内湾する。内外面ともにヨコナデ調整が見られる。18 は土師器の口縁部で、わずかに内湾しながらほぼ直立する。内外面ともに調整は不明瞭だが、一部に横方向への砂粒の動きが見られ、ヨコナデが施されていると

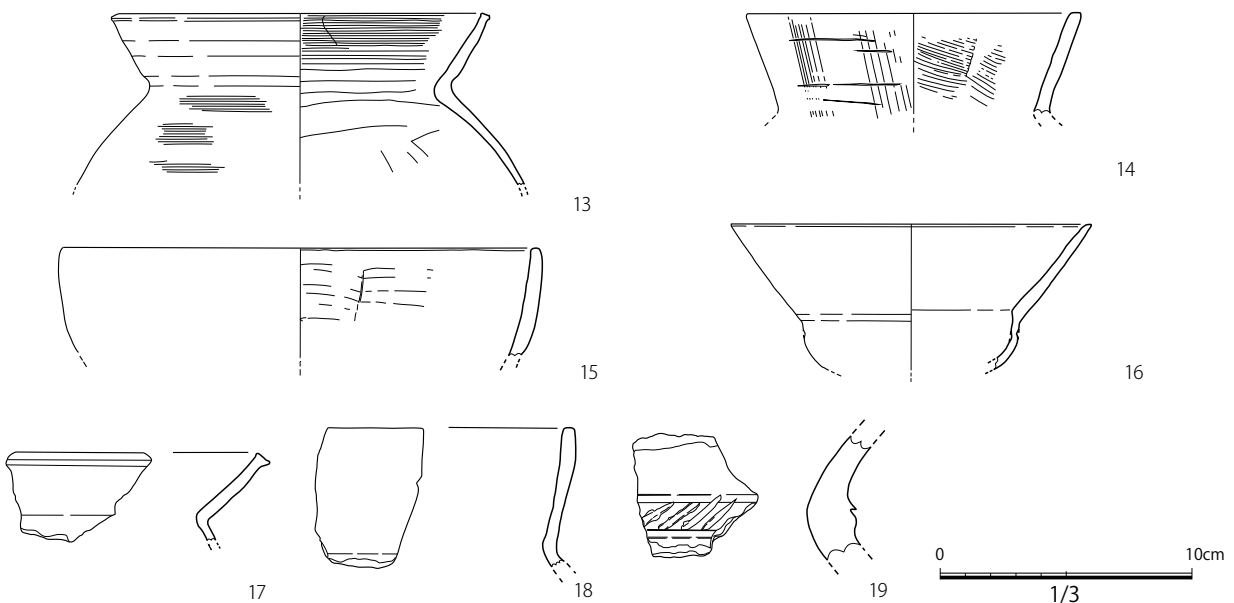


図 13 SC01 出土遺物 (S=1/3)

【SC01 土層注記】

- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。褐色土ブロック・2～5cm の礫をまばらに含む。
 - 2 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 粘性やや強い、しまりやや強い。1層よりやや明るく、極粗砂まばらに含む。
 - 3 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 粘性やや強い、しまりやや弱い。褐色土ブロック・1cm 以下の礫をまばらに、2～5cm の礫をまばらに含む。
 - 4 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。1～5cm の礫をまばらに含む。
 - 5 極暗褐色 (7.5YR2/3) 粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い。褐色土ブロック多く含む。
 - 6 極暗褐色 (7.5YR2/3) 褐色土ブロック混じり粘質土 粘性・しまりやや強い。2～10cm の礫まばらに含む。
 - 7 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 周壁溝埋土。場所により黄褐色土ブロックや 1～10cm の礫を含む。
 - 8 極暗褐～黒褐色 (7.5YR2/3～2/2) 細砂混じり粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い(層上部は強い)。褐色土ブロック、1～10cm の礫をまばらに含む。
 - 9 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 粘性強、しまりやや強い。SL1 埋土。焼土粒まばらに、黄褐色土ブロックまばらに含む。
 - 10 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。SL1 埋土。黒褐色土ブロックまばらに、焼土ブロックまばらに含む。
 - 11 明褐～橙色 (7.5YR5/8～7.5YR6/6) 粘質土 粘性弱、しまりやや強い。SL1 埋土。粗砂～2cm の礫まばらに含む。特に層表面に黒褐色ブロック含む。
 - 12 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土 SL1 埋土。細～粗砂、焼土粒混じる。3～5cm の礫を含む。
- (ピットの土層注記はピット一覧表に記載)

考えられる。床面直上と埋土上層で出土した破片が接合している。19は床面直上出土の弥生土器で、大型の壺の頸部である。屈曲部に突帯を貼り付け刻みを施す。外面にはヨコナデ、体部内面はナデ、頸部内面はヨコハケが施される。

出土遺物から SC01 は古墳時代初頭の竪穴建物跡である可能性が高い。

(2) 石棺墓 (ST)

① ST01

A区 7828 グリッドに位置し、平面形は長方形を呈する。周辺は竹の根による攪乱が著しいが、調査区壁面の観察から 3b 層上面からの掘り込みと考えられる。主軸方位は N-69°-W で北西から南西に向けて構築される。検出面では板石の集積が見られたが、棺材と考えられる立位の石材は確認できなかった。そのため当初は土坑墓と考えたが、掘削の結果、床面で石材を据え付けた跡と考えられる溝状の掘り込みを確認し、また棺材と考えられる板石の一部が埋土中に残存していたことから、耕作などにより石材が抜き取られた石棺墓と判断した。遺構の一部が調査区外に延びるため全長は不明だが、調査区内では長さ 193cm、幅約 80cm を測る。棺床面までの深さは検出面から約 15cm、棺材抜取跡は床面から深さ 10～15cm を測る。

② ST03

A区 8028 グリッドに位置し、3b 層上面に属する遺構と考えられる。主軸方位は N-54°-W で北西から南西に向けて構築される。蓋石は既に失われていたが、蓋石を除けば棺材はすべて残存しており、石棺内法で長さ 175cm、幅が北西側 38cm、南東側 30cm を測る。掘方は長さ 257cm、幅約 100cm を測り、石棺幅から頭位は北西と考えられる。棺材は両側壁の端部が小口よりも外側に出るように組まれている。両側壁は長さ 115～130cm、高さ 35～40cm の板石 2 枚を重ね合わせ、両小口は長さ 30～40cm、

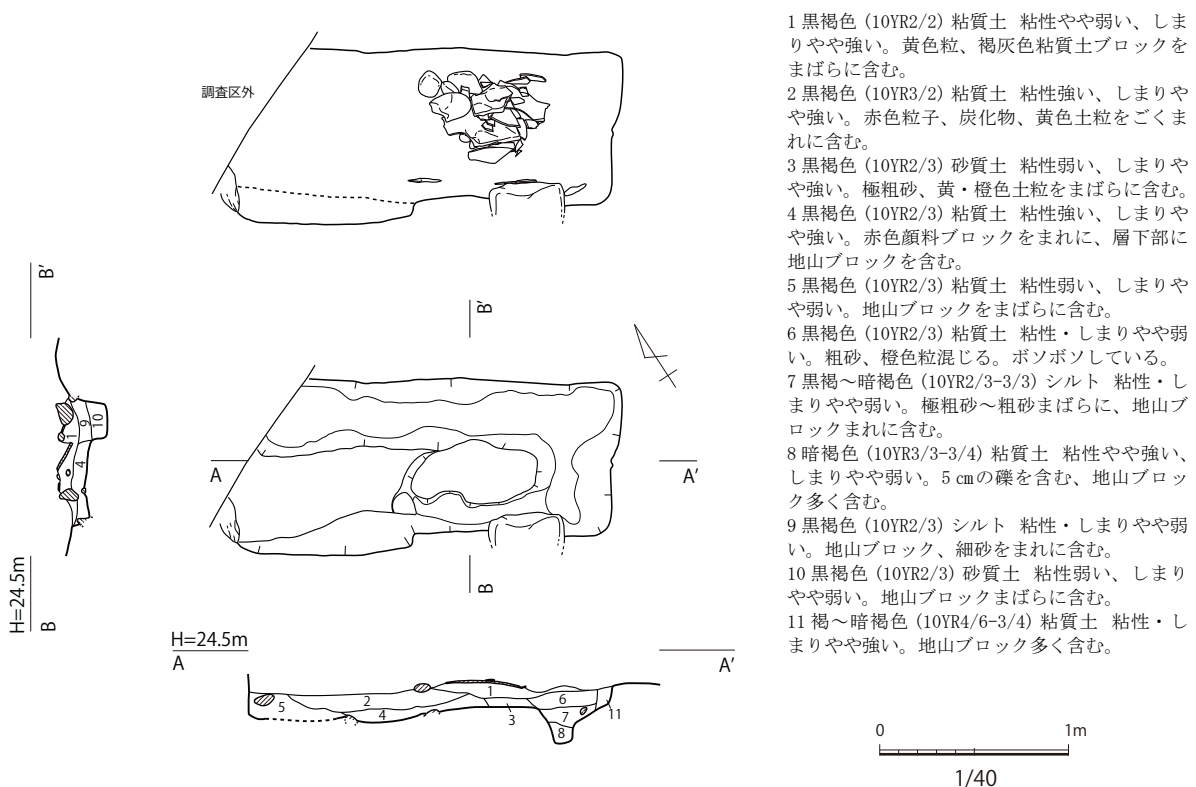


図 14 ST01 実測図 (S=1/40)

高さ 39～53cm の板石 1 枚を立てる。また、小口据付のための掘方の深さを変える、側壁の下部に円礫を噛ませるなどして棺の上端の高さを調整している様子が確認できた。側壁周辺では一部で白色の粘質土ブロックを確認しており、棺材の目張り等であった可能性がある。

棺内埋土には頭位側に円礫が多く含まれているが、これは蓋石が取り除かれた際に混入したものと考えられる。この礫の混入のため棺内、特に頭位側の埋土は乱れていたが、棺内 5 層上面が棺床だったと考えられる。赤色顔料の使用は確認できなかった。

遺物は棺内から副葬品と考えられる刀子が 1 点と土器小片、掘方からも土器片が出土している。刀子は棺内北西部の混入した円礫下で出土し、検出時には刀身が折れ、切先側と茎側が重なった状態となっていた。刀身の破断がいつ発生したかは不明だが、検出状況から破断した状態で副葬に供された可能性がある。棺内出土の土器はいずれも小片であり、土器の副葬はなかったものと考えられる。20 は掘方から出土した甕の口縁部で、直線的に延び端部をつまみあげる。弥生時代後期の所産と考えられる。21 は棺内から出土した刀子で切先と茎が欠損する。断面は二等辺三角形で身部から茎部の間はナゲ関となる。

③ ST04

A 区 7828 グリッドに位置し、他の石棺墓同様 3b 層上面から掘り込まれた遺構と考えられる。主軸方位は N-79°-W で東西方向に構築される。隣接する攪乱の影響か蓋石及び南側側壁の棺材は失われており、両小口も大きく破損している。検出時には石棺内部の床面近くまでビニール紐などを含む攪乱土が堆積していた。残存していた北側側壁は長さ 145cm を測り、長さ 65～80 cm、幅 5～6 cm、高さ 37～43 cm の短冊形に加工された板石 2 枚が並べられている。棺材は失われているが側壁はさらに西側に伸びており、確認された西側小口の位置から、側壁長は 190 cm 程と考えられる。石棺幅は残っている棺材の破片から、東側で約 40 cm、西側で約 30 cm と見られ、頭位は東であったと考えられる。掘方の法量は主軸長 240 cm、幅 101 cm、深さ約 35 cm を測る。北側側壁石材を除去した際に、側壁下で円礫を確認しており、ST03 同様に円礫を含む土を埋め戻した上に側壁を設置して、側壁上端の高さを調整しているものと考えられる。

残存している側壁には上端を含めて赤色顔料が塗布されていたと見られ、棺内にも赤色顔料混じりの粘質土の堆積が見られた。粘質土下では北側側壁石材下端とほぼ同レベルで面的に板石が検出された。一部で重複しており、石棺が損壊した際に南側側壁が倒れ込んだ可能性も考えたが、北側側壁の石材に比べて板石が薄いことから側壁材とは考えにくく、床面として板石を敷いていると考えられる。板石は長さ 35 cm～40 cm、幅 28～32 cm、厚さ 2cm ほどで 3 ないし 4 枚使用されているとみられ、いずれも赤色顔料の付着が見られる。赤色顔料は棺材や石棺内への使用だけでなく構築段階から用いられており、床面の板石下にも赤色顔料が堆積し、また残存していた石棺北側の掘方埋土にも赤色顔料が含まれている。

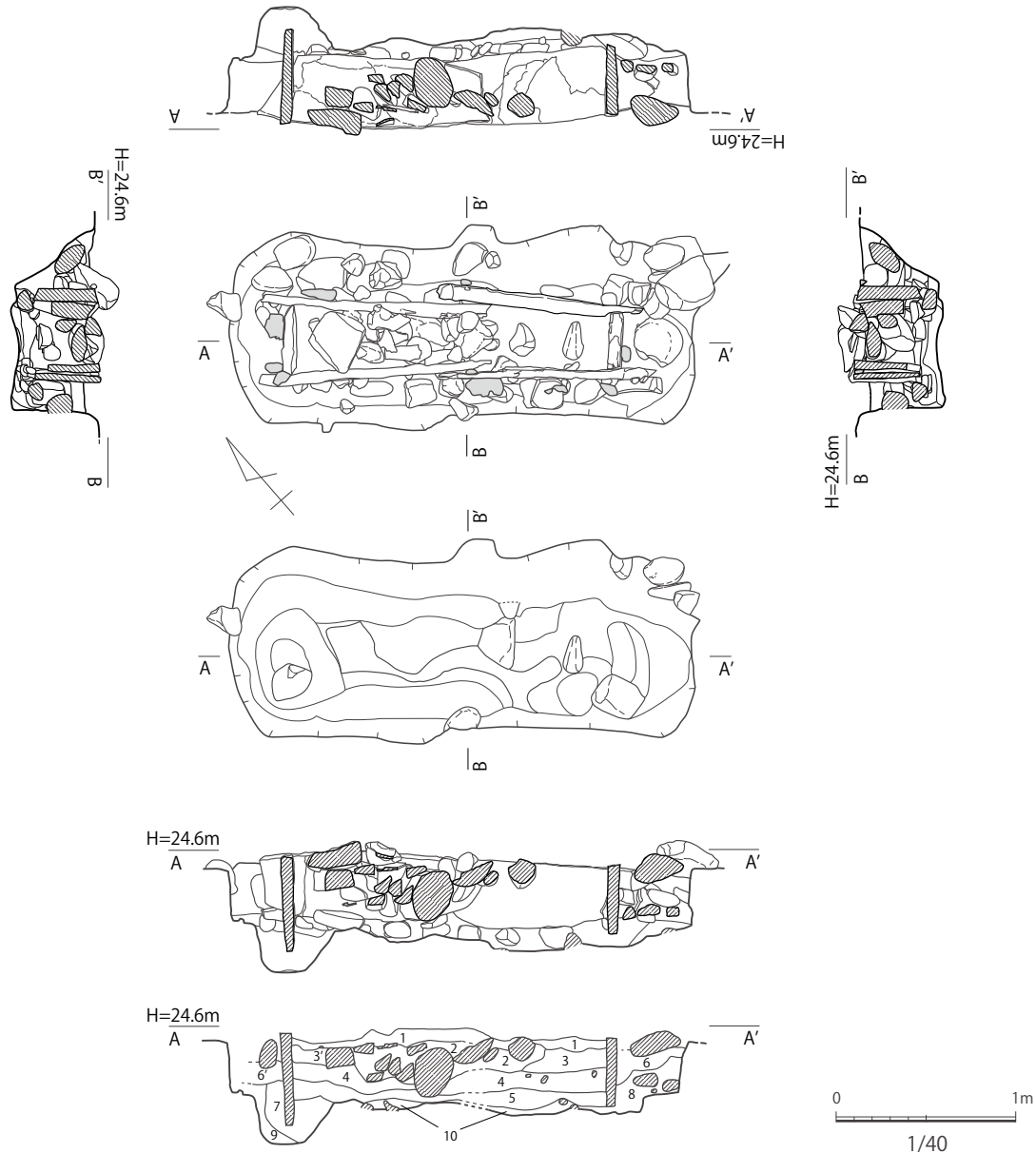
遺物は副葬品と見られるものは確認できなかったが、石棺内及び掘方から土器の小片が出土している。石棺の破損状況から石棺内出土の土器も石棺に伴うものとは判断し難い。22 は棺内から出土した口縁部で内外にナゲを施す。直口壺と思われる。23 は掘方出土の弥生土器底部片で平底を呈する。外面は底面までハケ目を施す。

④ ST05

A 区 7828 グリッドに位置し、3b 層上面で検出した。主軸方位は N-81°-E で東西方向に構築される。

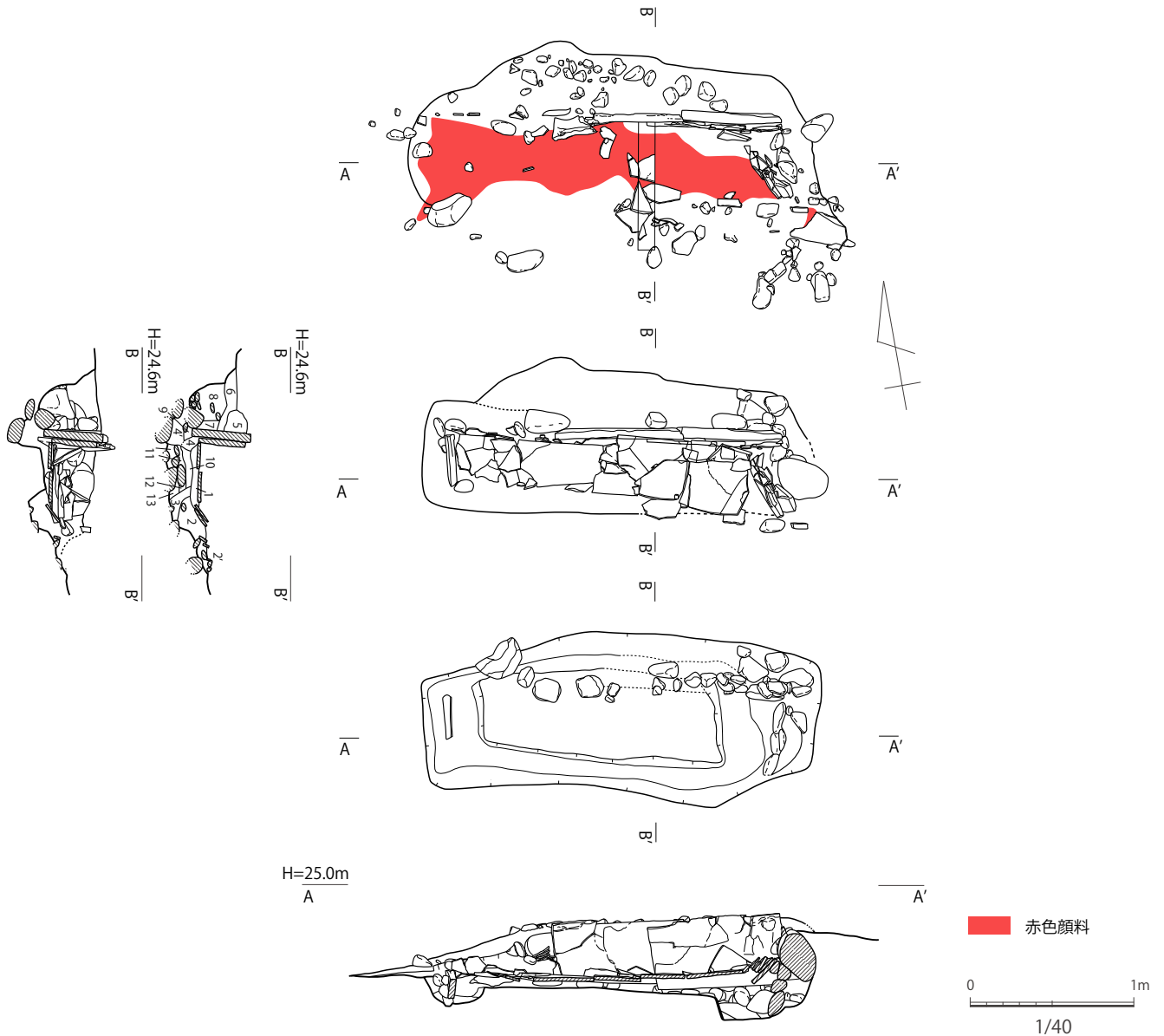
確認した5基の石棺墓の中では残存状況が最も良く、蓋石まで完存している。蓋石は6枚の板石が端を接するように並べられ、一部では上部に同様の石材を重ねている。検出時には蓋石上に人頭大ほどの円礫が重ねられていた。検出面では石棺周辺に拳大の礫が多く見られ、石棺の周囲に円礫を配置していた可能性もある。側壁上部及び側壁周辺では部分的に粘質土ブロックが確認されており、棺と蓋の合わせ目の目張りと考えられる。

法量は石棺内法で主軸長 158cm、東側幅 44cm、西側幅 31cm、石棺上端から棺床までの深さ 25cm、掘方で長さ 260cm 以上、幅 120cm、深さ 38cm を測る。石棺幅から頭位は東と考えられる。棺材は両



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い。細～粗砂をまばらに、1～15 cmの礫をまれに含む。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや強い。細砂、0.5～10 cmの礫をまれに含む。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。細～粗砂をまばらに、にぶい黄褐色粘土ブロックをまれに含む。3' は小礫を含む。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。3～5 cmの礫をまばらに、にぶい黄褐色粘土ブロックまれに含む。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。にぶい黄褐色粘土ブロック含む。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。0.5 cm程の地山ブロックまばらに含む。6' はやや大きな地山ブロックも含む。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。地山ブロックをまばらに含む。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。5～15 cmの礫を含む、地山ブロックまばらに含む。
- 9 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。地山ブロックを多く、細砂をまれに含む。
- 10 褐～黄褐色 (10YR4/6-5/6) 粘質土 粘性強い、しまりやや強い。地山土に黒色土が混じる。

図 15 ST03 実測図 (S=1/40)



- 1 赤褐色 (2.5YR4/6) 細砂混じり粘質土 粘性弱い、しまり強い。粗～極粗砂をまばらに、0.5～1 cmの礫をまれに含む。
- 2 暗褐色 (7.5YR3/4) 細砂混じり粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い。0.5～1 cmの礫をまばらに含む。2' 部分黒色土混じり汚い。攪乱の一部か。
- 3 褐色 (7.5YR4/4) 砂質シルト 粘性弱い、しまりやや強い。極粗砂大の白色粒多く、粗砂まばらに含む。
- 4 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト 粘性やや弱い、しまりやや弱い。0.5～2 cmの礫を多く含む。
- 5 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂質シルト 粘性やや弱い、しまり強い。粗砂大の白色粒密に、1 cm大の礫をまばらに含む。特に層上部に赤色顔料含む。
- 6 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂混じり粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。極粗砂をまばらに、地山ブロックをまれに含む。
- 7 極暗褐～黒褐色 (5YR2/3-7.5YR3/2) 砂混じり粘質土 粘性やや弱い、しまりやや強い。粗砂をまばらに含む。赤色顔料がわずかに混じる。
- 8 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土 粘性やや弱い、しまり強い。細～粗砂をまばらに含む。
- 9 暗赤褐色 (5YR3/4) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや強い。粗砂多く、3～5 cmの礫をまばらに含む。10～15 cmの礫を含む。
- 10 赤褐色 (5YR4/6) 砂質シルト 粘性弱い、しまりやや強い。0.2～1 cm大の礫を多く、2～5 cmの礫をまばらに含む。
- 11 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 砂質シルト 粘性弱い、しまりやや強い。極粗砂～1 cmの礫を密に、3～5 cmの礫をまれに含む。
- 12 にぶい赤褐～褐色 (5YR5/4-7.5YR4/6) 砂質シルト 粘性弱い、しまりやや弱い。極粗砂～1 cmの礫を密に含む。
- 13 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト 粘性弱い、しまりやや弱い。極粗砂大の白色粒、極粗砂～1 cmの礫を多く含む。

図 16 ST04 実測図 (S=1/40)

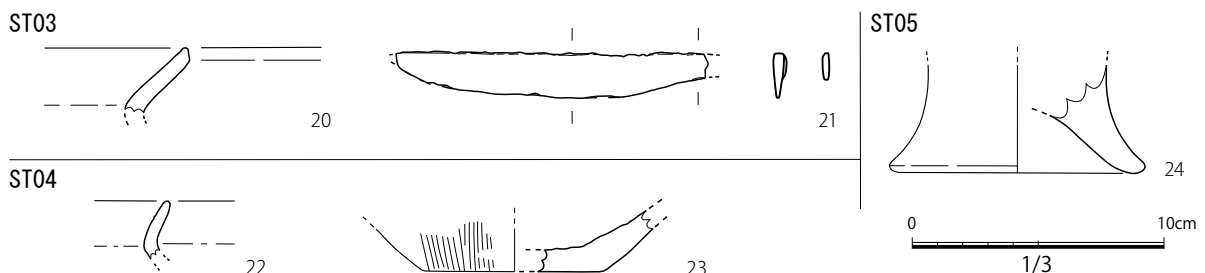


図 17 石棺墓出土遺物 (S=1/3)

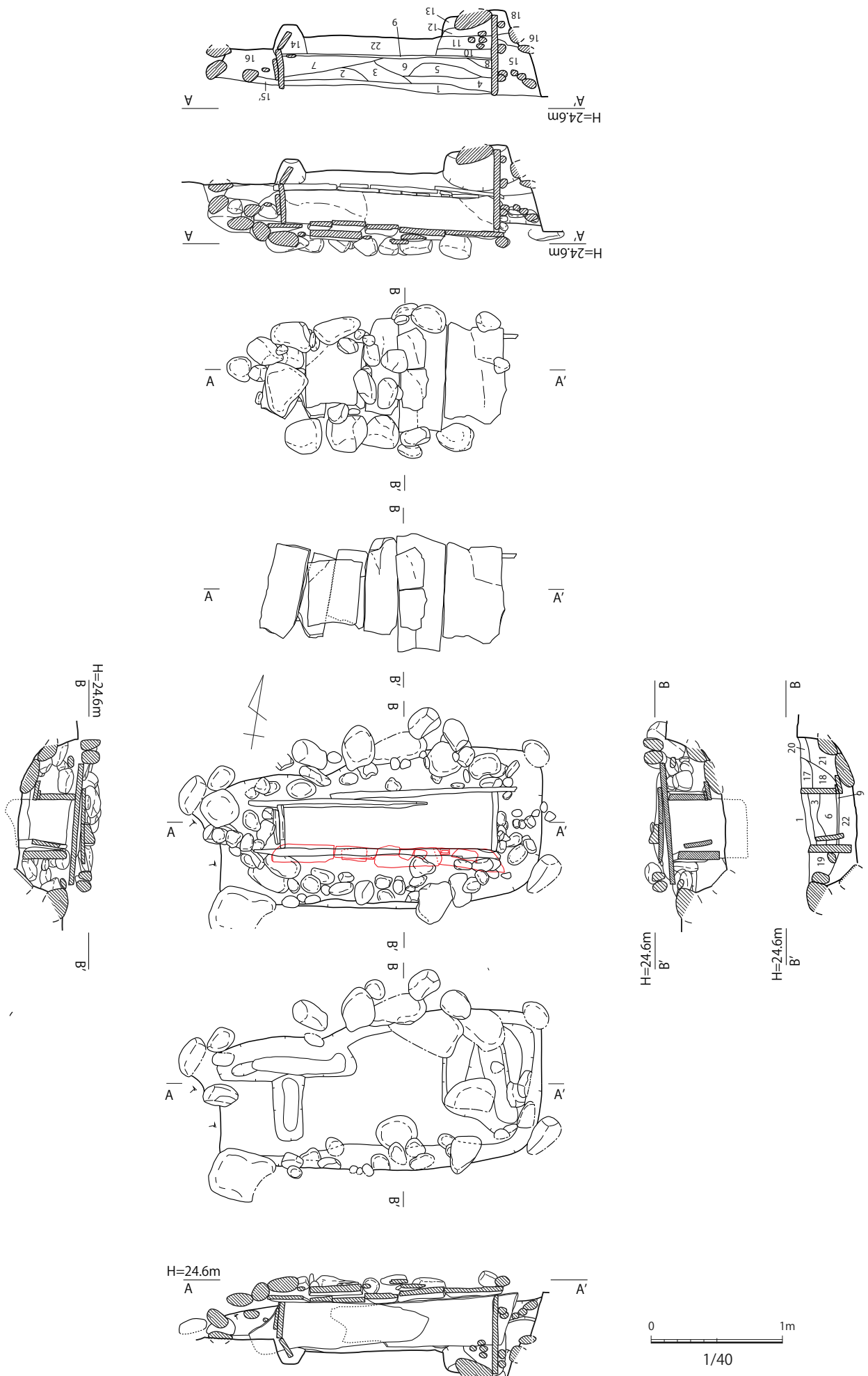


图 18 ST05 实测图 (S=1/40)

側壁の端部が小口より外側に出るように配置されているが、南側側壁の東側端部は石材の長さの影響か小口までで収まっている。側壁は、北側は長さ 137～142 cm、幅 2～6 cm、高さ 38 cm 程の板石 2 枚を重ね合わせ、南側は長さ 188 cm、幅 3～8 cm、高さ約 26 cm の板石 1 枚で構築されている。南側壁材の下部には長さ 9～52 cm、幅 7～16 cm、厚さ 2～5 cm の小型の板石が 1～3 段敷かれ、北側側壁と上端の高さを合わせるための調整がなされている。小口部分は東側では長さ 44 cm、幅 4 cm、高さ 60 cm の板石を 1 枚、西側では長さ 33 cm、幅 3 cm、高さ 15～30 cm の板石を重ねるように 2 枚立てている。小口部分は掘方が約 59 cm と深く、こちらも石棺上端の高さを揃えるための調整と考えられる。

棺内埋土は 9 層が薄く全体に広がっており、9 層下で小口石材を据える掘り込みが確認されている。9 層以上の堆積状況からも 9 層が棺床面であったと考えられる。棺内では副葬品と考えられる遺物は見られず、床面に赤色顔料の使用も見られなかった。

遺物は棺内や掘方から流入したものと思われる弥生土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。24 は台付甕の脚部で、蓋石上で出土した。表面は風化しているが、ハケ目等の痕跡は見られず、ナデ調整と思われる。

⑤ ST07

A 区 7828 グリッドに位置し、3b 層上面に属する遺構と考えられる。検出時には北側小口周辺を除いた大部分が欠失していた。ST04 に隣接し、主軸方位はおおよそ N-2° -E で南北方向に構築されている。残存長は石棺内法で長さ 38cm、北側小口の幅 40cm。掘方で長さ 73 cm、幅 115 cm、深さ 24 cm を測る。東側側壁は石材が失われ、据え付けの掘り込みのみ確認された。棺内埋土の 1 層には赤色顔料が混じっており、小口の石材を据える掘り込みが 1 層下面から掘り込まれていることから、3 層上面が床面であったと考えられる。赤色顔料は ST04 のように大量に使用されていたものではなく、部分的な使用であれば残存部分が頭位側であった可能性がある。掘方には裏込めと思われる多量の円礫が含まれており、円礫中から弥生土器の小片が出土した。ST04 との先後関係は不明だが、両者は非常に近接しており、また共に SD03 に囲まれている状況からは ST04 被葬者との関係性がうかがえるが、その一方で東側側壁が西側に比べて破損している状況から、ST04 の構築により一部が破壊されている可能性もある。

【ST05 土層注記】

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。白色粒、極粗砂をごくまれに含む。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。褐色土ブロックごくまれに含む。
- 3 黒褐色 (10YR2/2-2/3) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。褐色土粒まばらに含む。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。やや明るい黒褐色土のブロックを含む。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) 砂混じり粘質土 粘性やや弱い、しまり強い。1～3cm の礫をまれに含む。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性強い、しまりやや弱い。褐色土ブロックをまれに含む。
- 7 黒褐色 (10YR2/1) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや弱い。褐色土粒、1cm 大の礫をごくまれに含む。
- 8 黒褐～褐色 (10YR2/3-4/6) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや強い。わずかに砂が混じる。
- 9 褐色 (10YR4/6) 粘質土 粘性やや弱い、しまりやや強い。黒色土ブロックを含む。
- 10 黒褐～暗褐色 (10YR2/3-3/3) 砂質シルト 粘性弱い、しまりやや弱い。地山ブロックをまばらに含む。
- 11 黒褐色 (10YR2/3) 細砂混じりシルト 粘性弱い、しまりやや弱い。5 cm 大の礫をまばらに含む。
- 12 暗褐色 (10YR3/3-3/4) 細砂混じりシルト 粘性弱い、しまりやや強い。2～3cm 礫を含む。
- 13 褐～黄褐色 (10YR4/6-5/6) 砂質シルト 粘性弱い、しまり強い。極粗砂～1 cm の礫を含む。5～10cm の礫をまれに含む。
- 14 暗褐色 (10YR3/3-3/4) 砂質シルト
- 15 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。橙色粒、2～10cm の礫をまれに含む。15' 部分はやや色調が明るく砂を含む。
- 16 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い。黄色土ブロックをまれに含む。
- 17 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。粗砂混じり粘質土ブロック (目張り粘土) を含む。
- 18 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い。細砂をまばらに含む。
- 19 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い。黄色土ブロックを多く含む。
- 20 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性弱い、しまりやや強い。粗砂をまれに含む。
- 21 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 粘性弱い、しまりやや弱い。黄色土ブロックをまばらに含む。
- 22 褐色 (10YR4/6) 粘質土 粘性やや強い、しまりやや弱い。黒褐色土ブロックをまれに含む。地山に比べ全体的に汚れたように暗い。

(3) 溝状遺構 (SD)

① SD02・SD03

A区 7828、7830、8028 グリッドに位置する。切り合い関係が確認できず一連の遺構である可能性があるが、先に確認した南北方向に直線的に伸びる溝を SD02、SD02 の途中から東西方向に伸びL字状に屈曲する溝を SD03 とした。SD02 は調査区内での延長約 11m、幅約 120～140cm、検出面からの深さ 38cm、SD03 は長さ約 9m、幅 120～160cm、検出面からの深さ約 18cm を測る。SD03 の方向は ST04 とほぼ同じであり、ST04 を意識して構築されていると考えられる。SD02 より東側では石棺墓は確認されておらず、また、SD02 と SD03 の合流部北側は SD02 が一部途切れていることから、SD02・03 が墓域の区画溝であり、SD02 の途切れた箇所が墓域への入り口であった可能性がある。

遺物は弥生土器と土師器が出土している。25、26 が SD02、27 は SD03 から出土した。25 は低脚高坏の脚部で穿孔を有する。古墳時代前期の所産と考えられる。26 は大型の高坏脚部と思われ、外面に赤色顔料が見られる。27 は短く外方へ直立する口縁で壺と考えられる。

(4) 自然流路 (NR)

① NR01

B区 8230、8430、8432 グリッドに位置し、南東から北西方向に向けてB区を縦断する。A区南西壁の基本土層断面でも NR01 埋土と考えられる層を確認しているが、南西壁沿いに堆積状況確認のための先行トレンチを設けたため、平面での確認はできなかった。調査区内での延長は約 30m、検出面である 4 層上面での幅約 3m、深さは約 50 cm を測る。4 層上面での検出となったが、3b 層掘削中から NR01 上にあたる範囲では遺物の出土量が他より多く、また小礫の混入が多く見られていた。埋土と包含層の土質がよく似ているため区分できなかったが、本来は 3b 層上面に属する遺構と考えられる。流路は調査区東側に位置する微高地の等高線に沿うように流れていたものと考えられる。

遺物は弥生土器、古式土師器が出土している。28 は弥生土器で甕の口縁部と思われ、内面にヨコハケが施される。外面の調整は粗く、粘土紐の積み上げ単位とみられる段差が残る。29～31 は弥生土器の甕で、29 は口縁端部を丸くおさめ、口縁部内面に横方向、胴部内面に斜め方向、胴部外面に

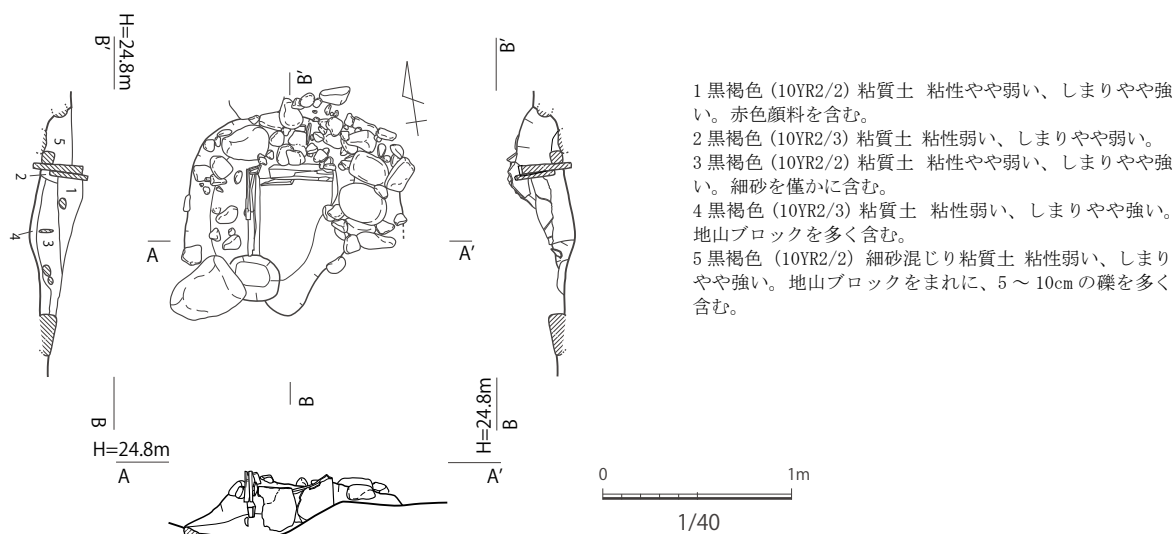


図 19 ST07 実測図 (S=1/40)

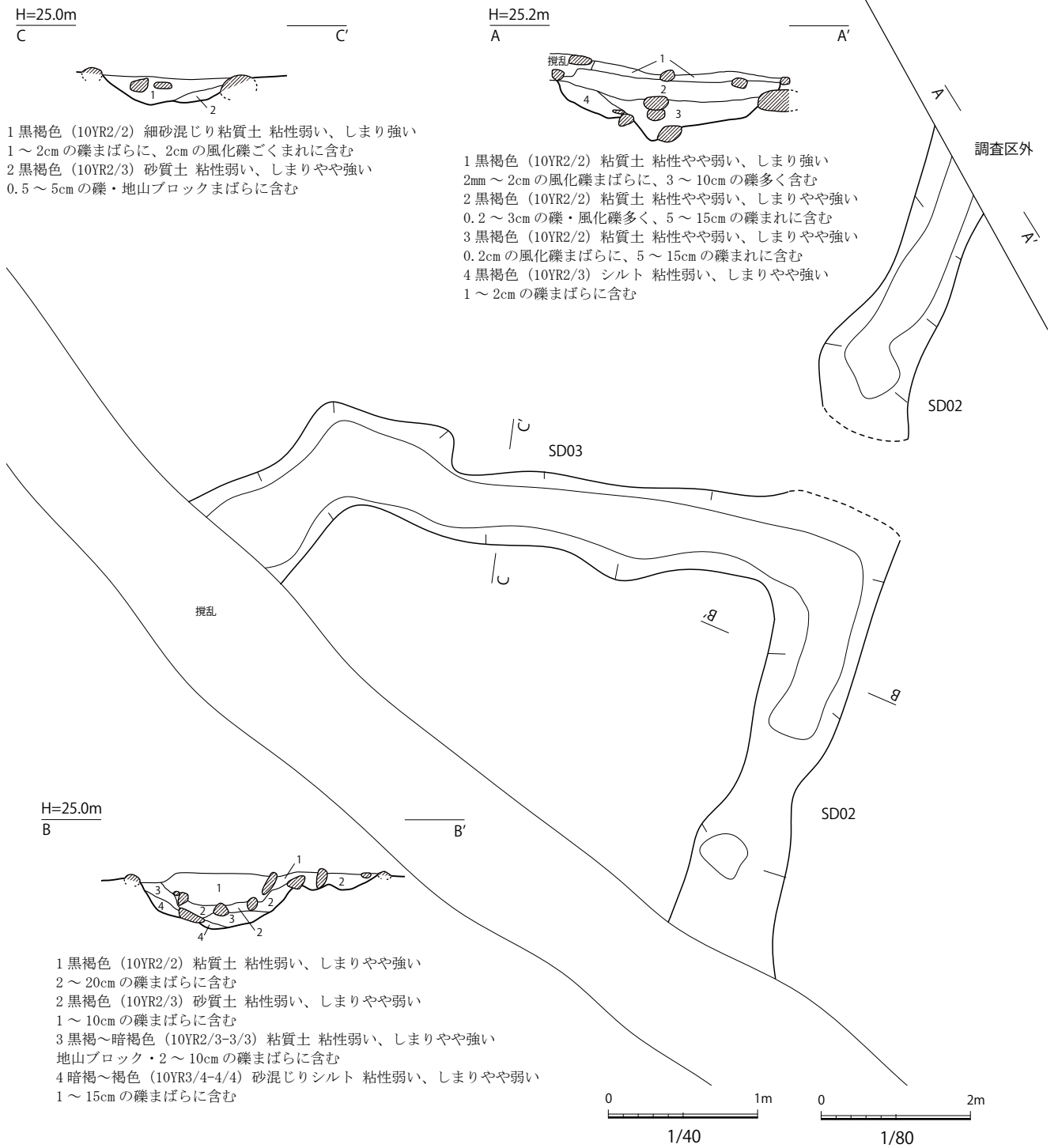


図 20 SD02・03 実測図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)

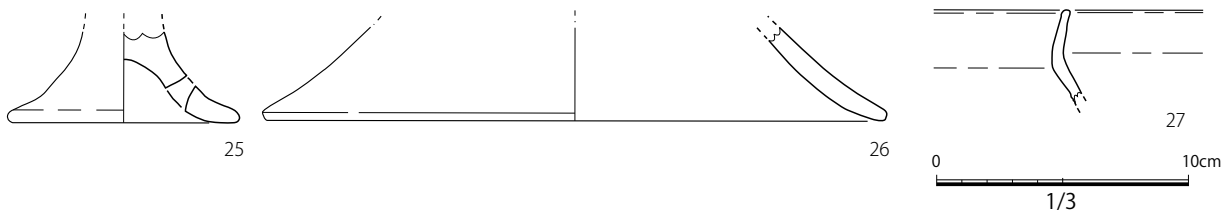


図 21 SD02・03 出土遺物 (S=1/3)

縦位に近い斜め方向のハケ目を施す。30は口縁がやや内湾しながら外側に開く。胴の張りは弱い形態になると思われる。31はわずかに外反しながら開く口縁部で、胴部との屈折部に低い突帯を有する。32は壺の胴部とみられ、最大径付近に断面三角形の突帯3条を有する。内外ともに縦あるいは斜め方向のハケ目を施している。33は台付甕の胴部破片。34は台付甕の脚部で端部を丸くおさめている。脚部はやや高く、脚部底径が広いことから弥生時代後期後半の所産と考えられる（古門 2018）。35は壺の口縁部で外側に強く外反する。36は弥生土器の底部で平底を呈する。37、38は高坏の口縁部である。37の体部は鉢状に丸い。口縁下に幅広の突帯を1条貼り付け、2条の幅広の凹線を施すことで3条の突帯に見せている。南島原市今福遺跡で同様の高坏が出土しており、宮崎貴夫は外来系の影響を受けた在来系高坏で畿内あるいは瀬戸内地域の系譜としている（宮崎 2015）。38は体部が強く内湾し、内外にハケ目調整を施す。

2. 遺物

弥生時代から古墳時代の遺物は3b層を中心に、3a層や2層、ピットからも出土している。大部分は包含層からの出土遺物だが、自然流路（NR01）上層についても3b層として掘削しているため、3b層出土遺物には本来NR01に属する遺物が混在している。

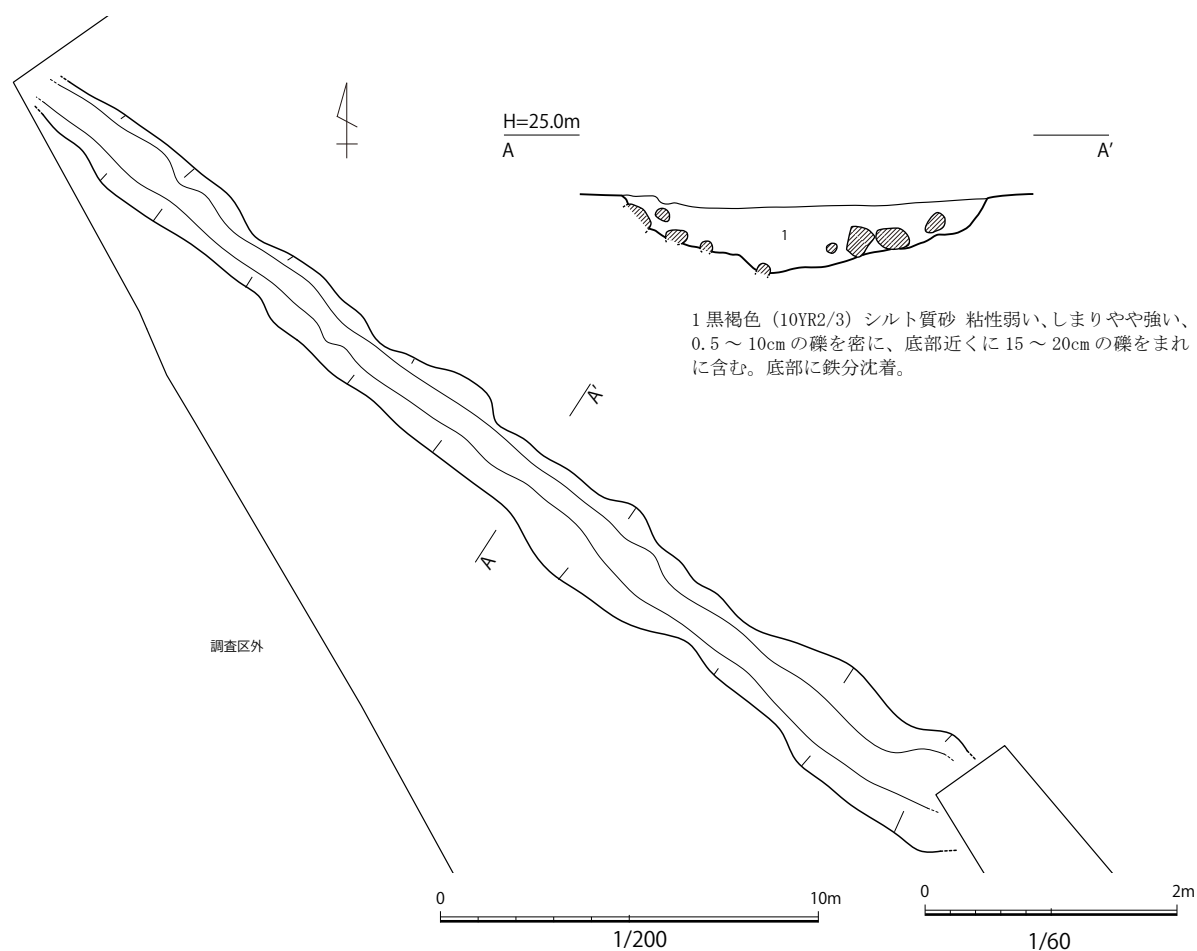


図 22 NR01 実測図（平面 S=1/200・断面 S=1/60）

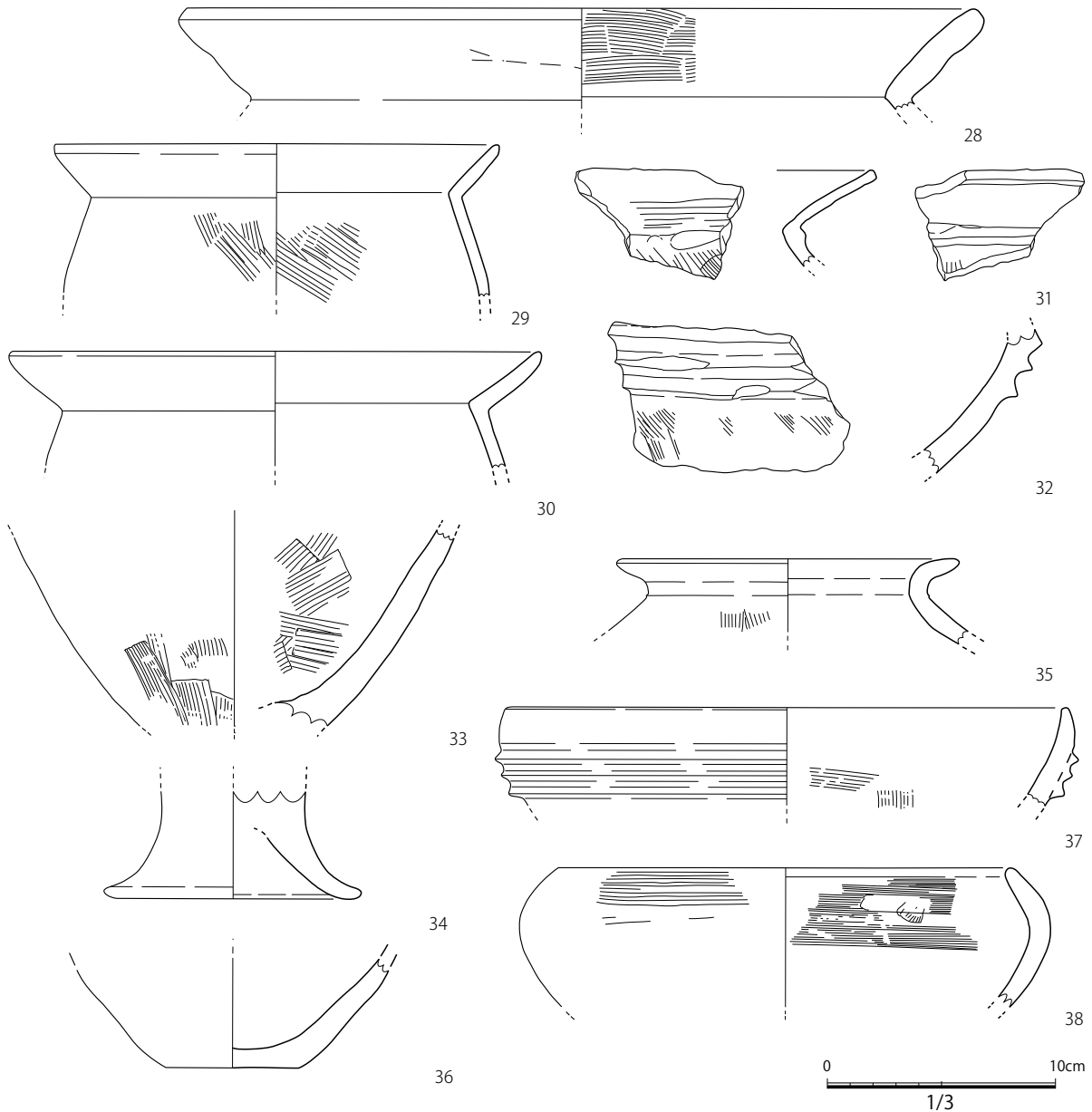


図 23 NR01 出土遺物 (S=1/3)

(1) 土器

39は甕の口縁部で屈曲はやや強く、くの字状を呈し端部を丸くおさめる。口縁部下位から胴部にハケ目と思われる跡がわずかに残っておりハケ後にナデ調整を施しているものと考えられる。40は甕の口縁部で口縁が波状となる。肩部付近から器壁が薄くなり内面の砂粒の動きも大きいため、ケズリを施しているものと考えられる。41～44は甕の口縁部。41は外方に強く屈曲し口縁はやや外反する。42は不明瞭だが外面にタテハケが施される。43はわずかに内湾する。44は口縁の屈曲が弱く胴部は膨らまない。内外ともナデ調整が施されるが、内面の一部に工具の当たりと思われる段が見られることから、内面はナナメハケ後にナデ調整を施しハケ目をナデ消していると考えられる。器形から弥生時代終末期のものと考えられる。45は甕の口縁から胴部で胴部は大きくは膨らまない。内面は口縁にヨコハケ、胴部にタテハケを施したのちナデを施している。口縁内面にはわずかに光沢が見られ、ミガキを施している痕跡が見られる。46は甕の口縁部から胴部で口縁部はほぼ直立し胴部の張

りは弱い。内面は胴部に斜め方向、口縁部に横方向のハケを施す。外面はハケあるいは板ナデ調整と考えられる。47は甕の口縁部で口縁と胴部の境に低い突帯を巡らす。突帯よりも口縁部側までハケ目があり、ハケ調整後に突帯を貼り付けているものと思われる。口縁の屈曲が強く弥生時代後期前半から中頃の所産と考えられる。48は台付甕で内面にハケ目が残る。胴部上半と脚部が欠損するが胴部が膨らまないタイプと思われる。49～53は台付甕の脚部。50は内面脚端部に稜を有する。51はタテハケ後にナデを施し脚台は低く狭い。52は脚部が低く脚台端部を丸くおさめる。脚部天井にはユビオサエとハケ状の工具でのオサエが見られる。

54～56は布留系の甕口縁部で54は口縁がくの字状を呈し緩やかに内湾する。内面は口縁直下までケズリを施している。55は中央部をわずかに肥厚させ若干内湾するくの字状を呈する。56は若干内湾し中央付近をわずかに肥厚させる。57は小型の壺で頸部は短く外反する。器壁が薄く、赤色顔料が残る。58は壺で頸部は短くほぼ直立する。風化のため調整は不明である。59は壺の頸部で短く直線的に延びる。器壁は風化が著しいがナデ調整を施しているとみられる。60は壺の口縁部で、頸部と胴部の境に断面三角形の低い突帯がめぐる。61・62は壺の口縁部で、外反し端部を強くなでて凹部を形成する。63は壺の口縁部で、口縁部は強く屈曲し外側に開く。64は複合口縁壺の口縁部。65は壺の口縁部で端部を上方に突出させる。口唇部はナデにより凹部を形成している。弥生時代後期後半の所産と考えられる。66は複合口縁壺の口縁部で内外ともハケ調整を施す。弥生時代後期から古墳時代初頭のものと考えられる。67は複合口縁壺の口縁部で弥生時代後期から古墳時代初頭のものと考えられる。68は大型の複合口縁壺の口縁部で、口縁端部を面取りし内面にはハケが施される。

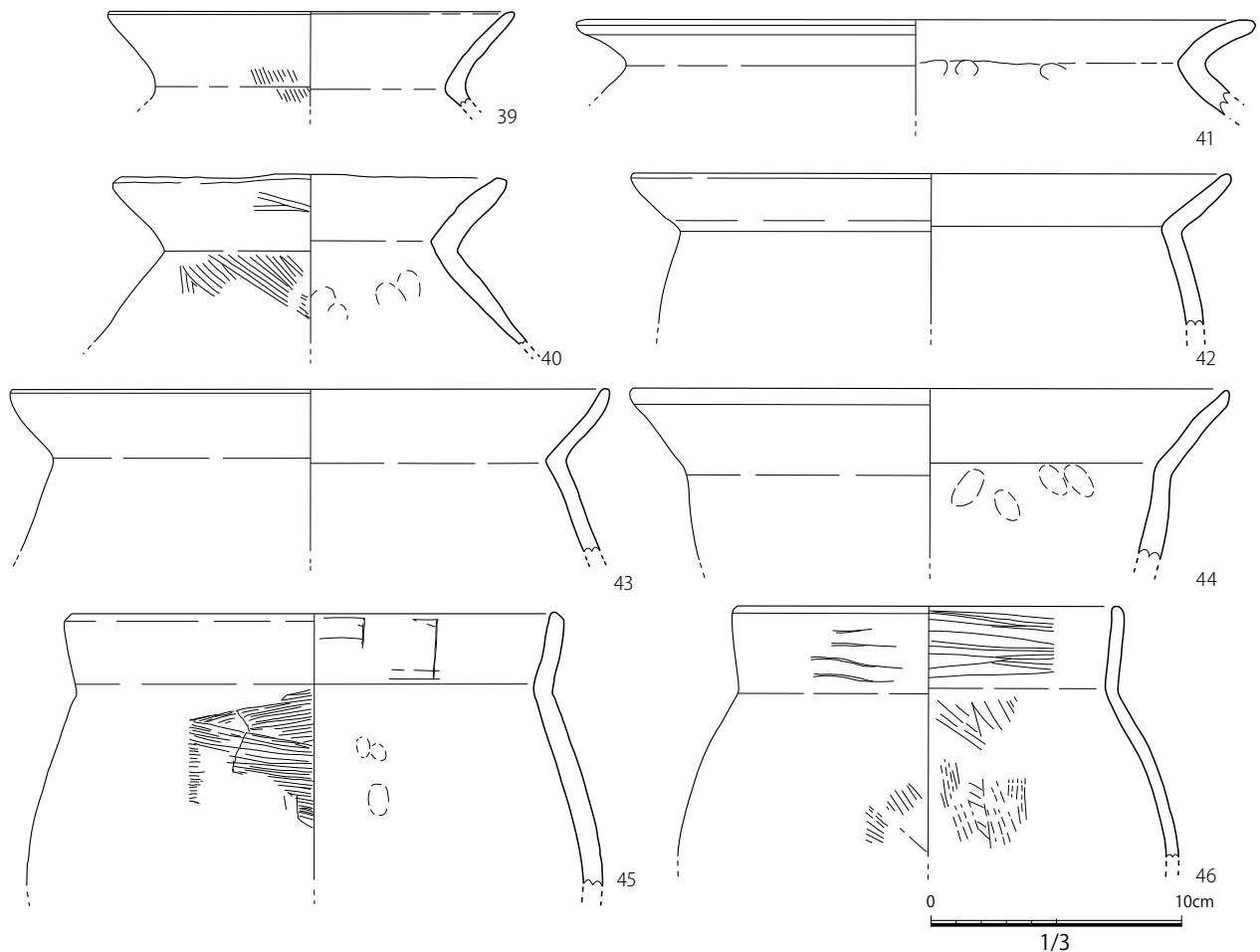


図 24 弥生～古墳時代の遺物① (S=1/3)

69 は複合口縁壺の口縁部で端部を丸くおさめる。70 は山陰系複合口縁壺の口縁部で、弥生時代終末から古墳時代前期の所産と考えられる。71 は小型の壺の口縁部で器壁は薄く直線的に延びる。口縁端部は丸くおさめわずかに外反する。外面はタテハケ調整後にナデを施す。72 は甕の口縁部と思われ、わずかに外反しながら立ち上がる。内外面ともにナナメハケ後にナデ調整を施している。73 は壺で口縁部は直線的に延びる。内外面にナナメハケを施す。

74 は偏球形の無頸壺で、丸底を呈する。器壁は薄く、外面の一部に赤色顔料が残る。口縁を絞って整形しているものと思われ、内面の口縁直下に絞りの跡と思われる皺が確認できる。75 は SP51 出土の壺で、肩の張りは弱い。器壁は薄く、内面にはユビオサエや強いナデの跡が残る。器表は風化が著しいが、肩部よりも下位にハケ目、肩部以上はナデが施される。76 は小型壺の頸部で、頸部は短く外反する。弥生時代後期から終末期の所産と考えられる。77 は壺で、頸部に楕円直線文を巡らせる。楕円は 10 条で、工具の磨耗によるものか中央部の楕円は浅い。南島原市今福遺跡で同様のものと思われる長頸壺が出土しており、報告を行った宮崎貴夫は「形態が畿内第二様式の資料に類似する」（宮崎編 1986）として、その系譜を畿内地方に求めている（宮崎 2015）。78 は壺の胴部でタテハケ調整後に断面三角形の突帯を 2 条貼り付け、刻み目を入れる。内面は半分以上が剥離しており調整痕が不明瞭だが、ナデ調整と思われる。79 は壺の胴部で、胴部最大径よりやや下位に断面三角形の突帯を 2 条貼り付け、突帯頂部に刻み目を施す。80 は壺の胴部と思われ、幅広で断面台形の突帯を貼り付け、斜め格子文を施文する。内面下部はハケ後にナデを施している。

81～87 は弥生土器の底部である。81～84 は平底を呈し、81 は底部径が小さく底面はわずかに上げ底状となる。85 はやや丸みを帯びた平底を呈し、内面にはハケを施す。外面の一部に赤色顔料が見られる。86 は若干丸みを帯びた平底で、内面はユビオサエとナデ、外面には底面までハケ目調整を施す。底部の形状から弥生時代終末期のものと考えられる。87 は丸底で弥生時代終末期のもの

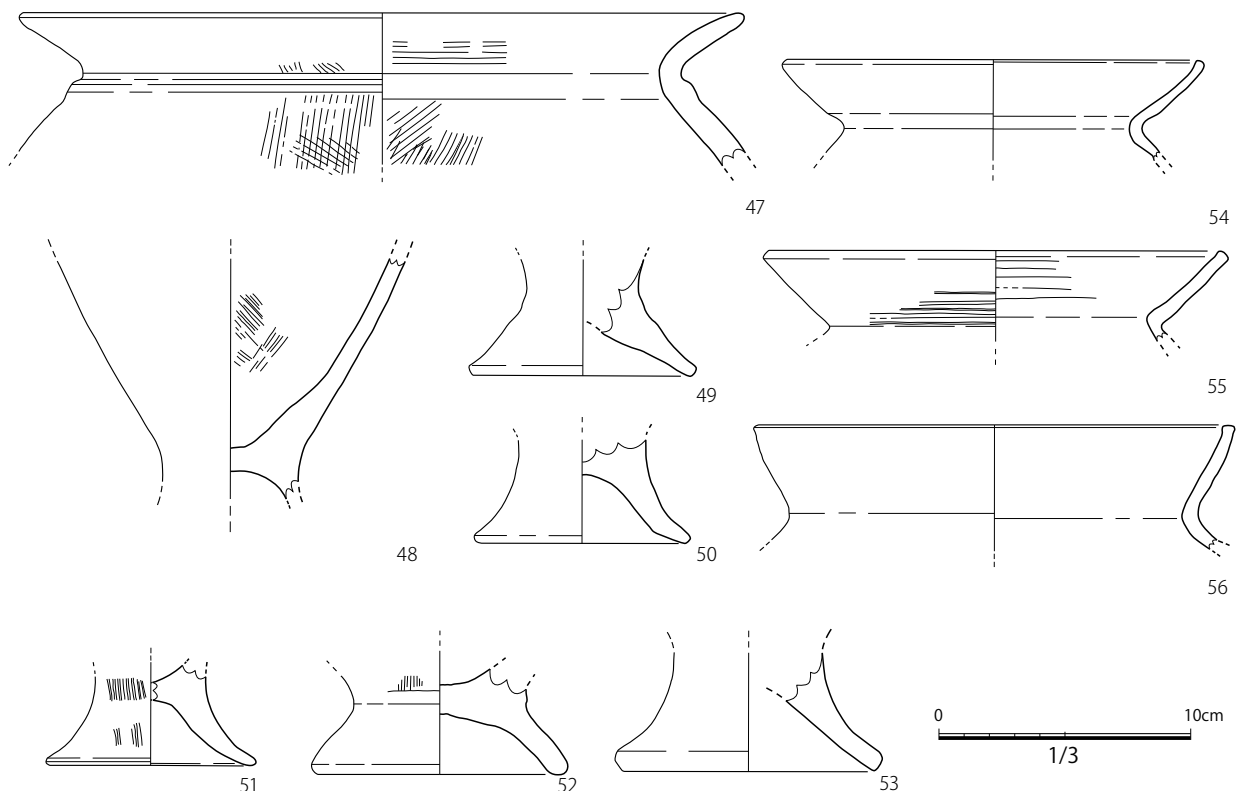


図 25 弥生～古墳時代の遺物② (S=1/3)

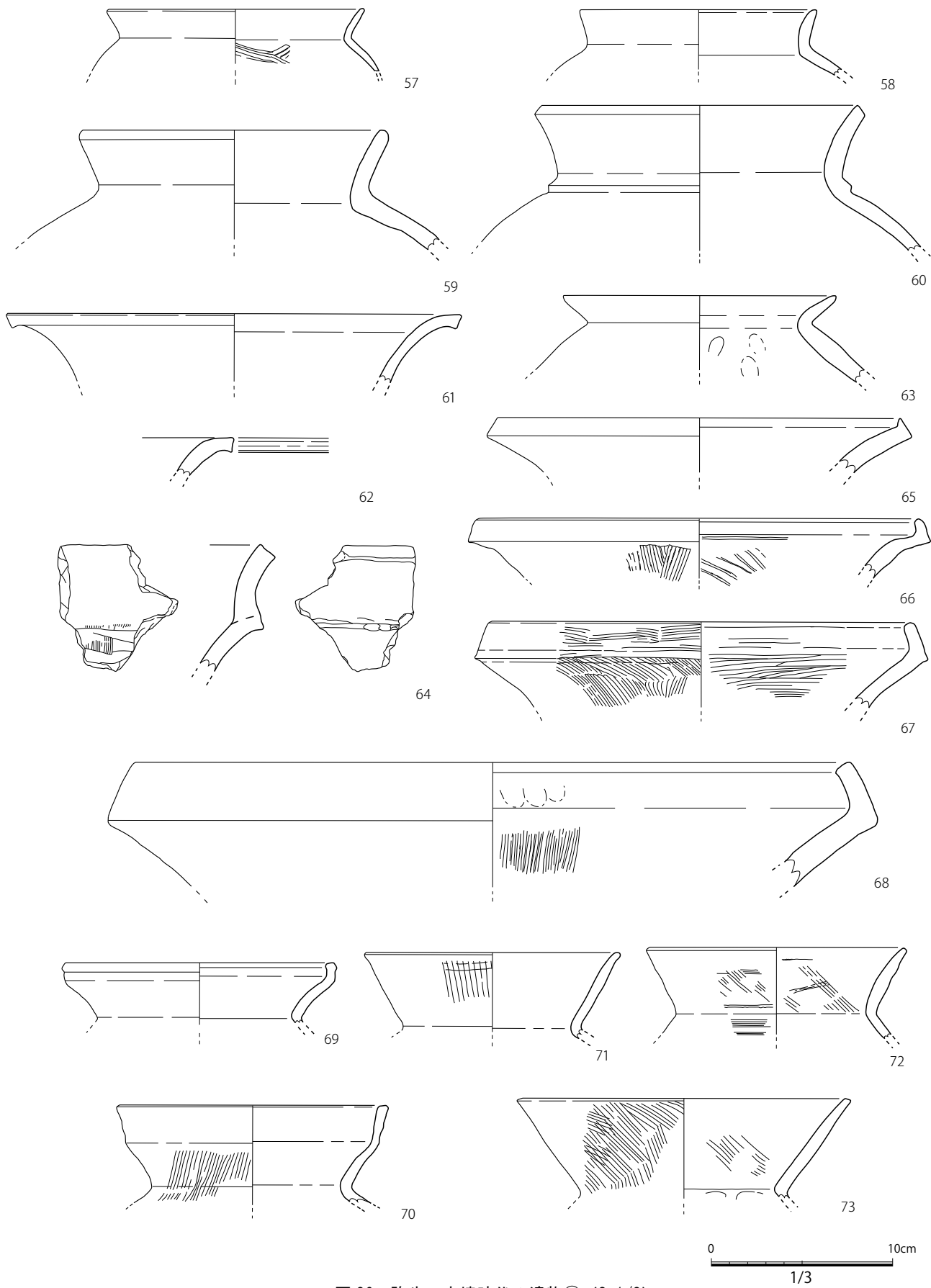


図 26 弥生～古墳時代の遺物③ (S=1/3)

考えられる。風化が顕著で調整は不明である。88は壺の底部で、胴部下位に2条の細い貼り付け突帯をめぐらせる。突帯は断面三角形で、頂部に工具による刻みを施す。外面は幅が狭く短いハケが縦及び斜め方向に施され、ミガキの痕跡を有する。底部はほぼ丸底となる。89は弥生土器で小型の甕の底部である。底部は三角形の粘土帯を貼り付けて上げ底状に成形しており、粘土帯外面にユビオサエが見られる。外来系の土器と思われるが、系譜は不明である。

90～101は高坏の坏部。90は浅く丸い坏部で口縁は外方に長く伸び、端部を丸くおさめる。内外ともにミガキを施す。91は口縁が外反しながら立ち上がる。弥生時代後期の所産である。92は大型の高坏坏部で、坏部の中位で屈曲し、口縁は外反しながら立ち上がる。外面はミガキが施され、赤色顔料が残る。93は坏部中位で屈曲し口縁は外反する。端部は角張り面をなしている。弥生時代終末期から古墳時代初頭のものと考えられる。94は口縁部片で、屈曲部ではがれている。口縁は外反しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。95も口縁部で、坏部中位で屈曲し、口縁が外反する。坏部内面にはミガキが施されている。高坏D類（古門2005）で、弥生時代終末期から古墳時代初頭の所産と考えられる。96は下半が丸みを帯び、口縁は外反しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。97は坏部中位で屈曲する。端部は角張り面を成している。98は口縁部で、口縁端部は丸みをもって小さく内側に湾曲する。弥生時代後期の所産で、西部瀬戸内地域の影響を受けたものと思われる。99は、布留系の高坏と思われ、口縁は直線的に伸び端部を丸くおさめる。外面はハケ調整の後にミガキが施される。100は坏部の下位で屈曲し、口縁はわずかに外湾しながら長く立ち上がる。不明瞭だが内外ともに横位のハケとナデを施している。庄内式あるいは布留式の影響を受けたものと思われ、弥生時代終末期から古墳時代初頭の所産と考えられる。101は坏部の下位で屈曲し、口縁が外反する。

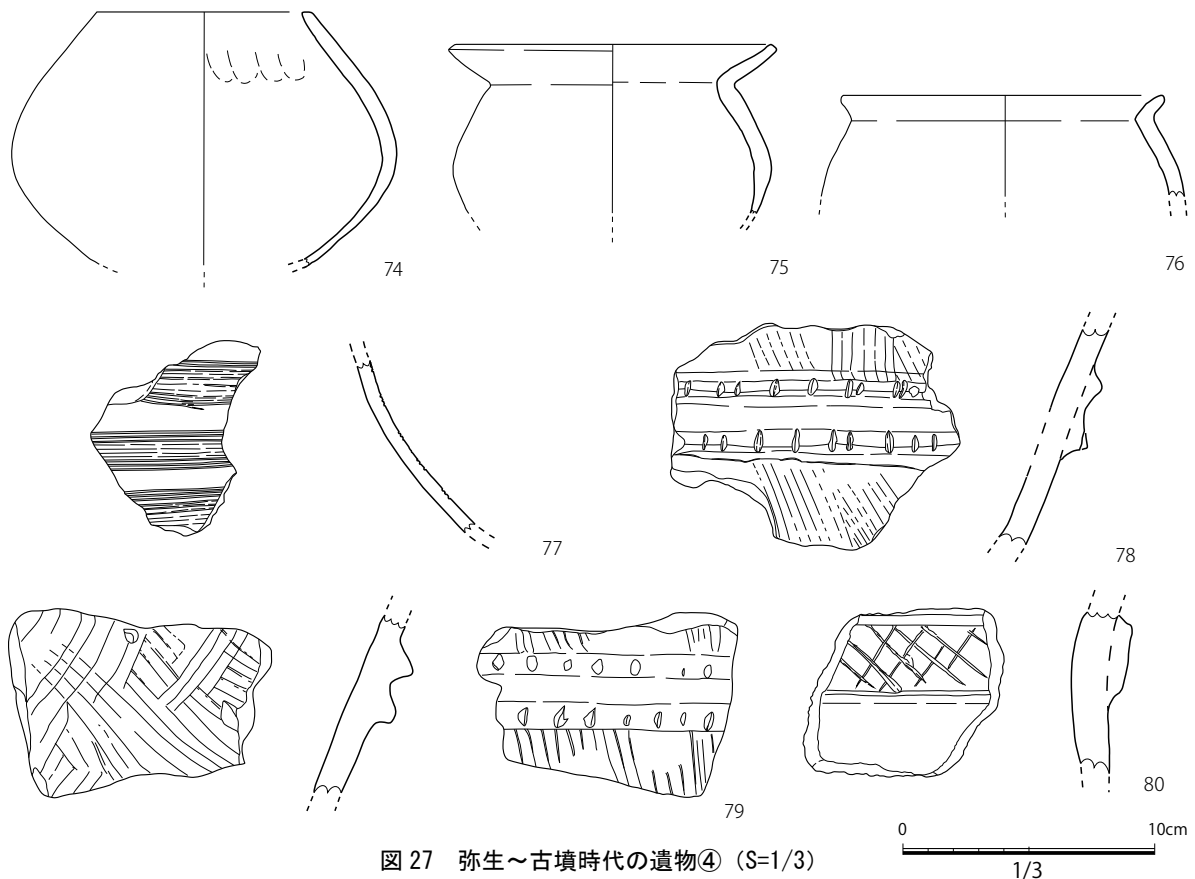


図 27 弥生～古墳時代の遺物④ (S=1/3)

口縁は外面では緩やかな外反だが、内面では稜をつけて屈曲し、端部がすぼまる形状となる。胎土は精良で混和剤となる砂粒は観察できない。102～106は高坏の脚部。102は長脚高坏で、表面が風化し調整は不明瞭である。103は裾部が大きく外側に開き、やや膨らんだ「八」の字形を呈する。肥後系の高坏と考えられ、弥生時代後期終末の所産と考えられる。104は低脚高坏の脚部で、充填法で坏部と接合しているものと見られる。105は一部にハケ目が残る。接合部付近を絞って整形しているものとみられる。布留系の高坏と思われるが、小型器台の可能性もある。106の脚部は膨らみを帯び脚端部は大きく広がる器形になると思われる。107は肥前型器台の破片で、確認できる範囲では3条の沈線を巡らせる。

108はミニチュア土器で、胴部上半で内湾し、無頸壺状の形態を呈する。109～111は鉢で、109は頸部が弱く締まり口縁が外反する。口縁部内面はナデ調整と思われるが、ミガキの痕跡を有する。頸部より下は細かなハケが施される。110は頸部の締まりが甘く口縁が外反する。内面は横方向のケズリの跡をナデ消しているものと思われる。111は碗型の鉢で、体部中位で屈曲し、口縁はほとんど開かず直線的に延びる。内面はナデ調整だが体部下半に工具の当たりと思われる凹凸が見られ、ハケ後にナデ調整を施している可能性がある。112は脚台付鉢の脚部と思われる。113～116は小形丸底壺。113はSP76出土で、口縁部からほぼ底部までが残る。頸部は締まっており、口縁部は長く直線的に立ち上がる。頸部の直下にハケの痕跡がわずかに残っており、胴部はタテハケ後にナデ調整を行っていると思われる。114は頸部が締まっており、やや内湾しながら延びる。外面口縁部付近と内面にハケ目が見られる。115・116は頸部が締まり、立ち上がりは短く外反する。115は外面、116は外面と内面上半部にミガキを施す。

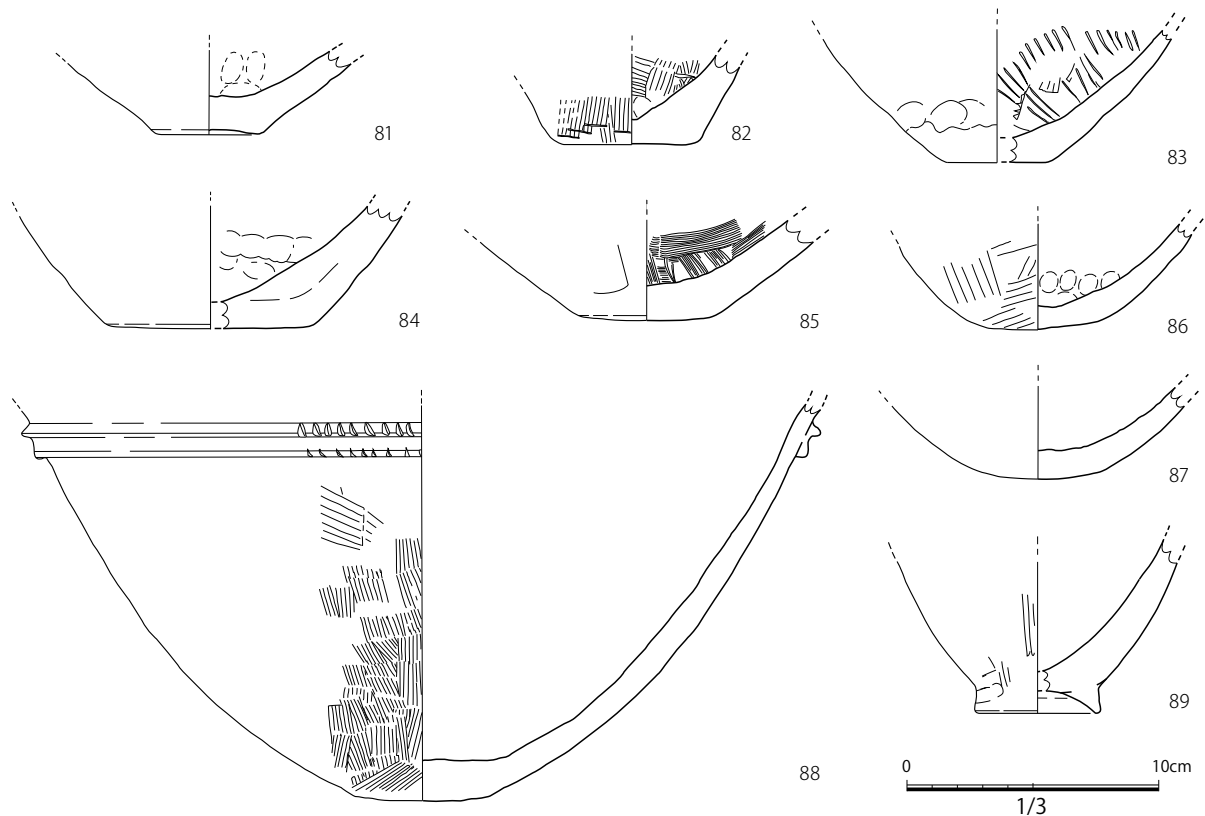


図 28 弥生～古墳時代の遺物⑤ (S=1/3)

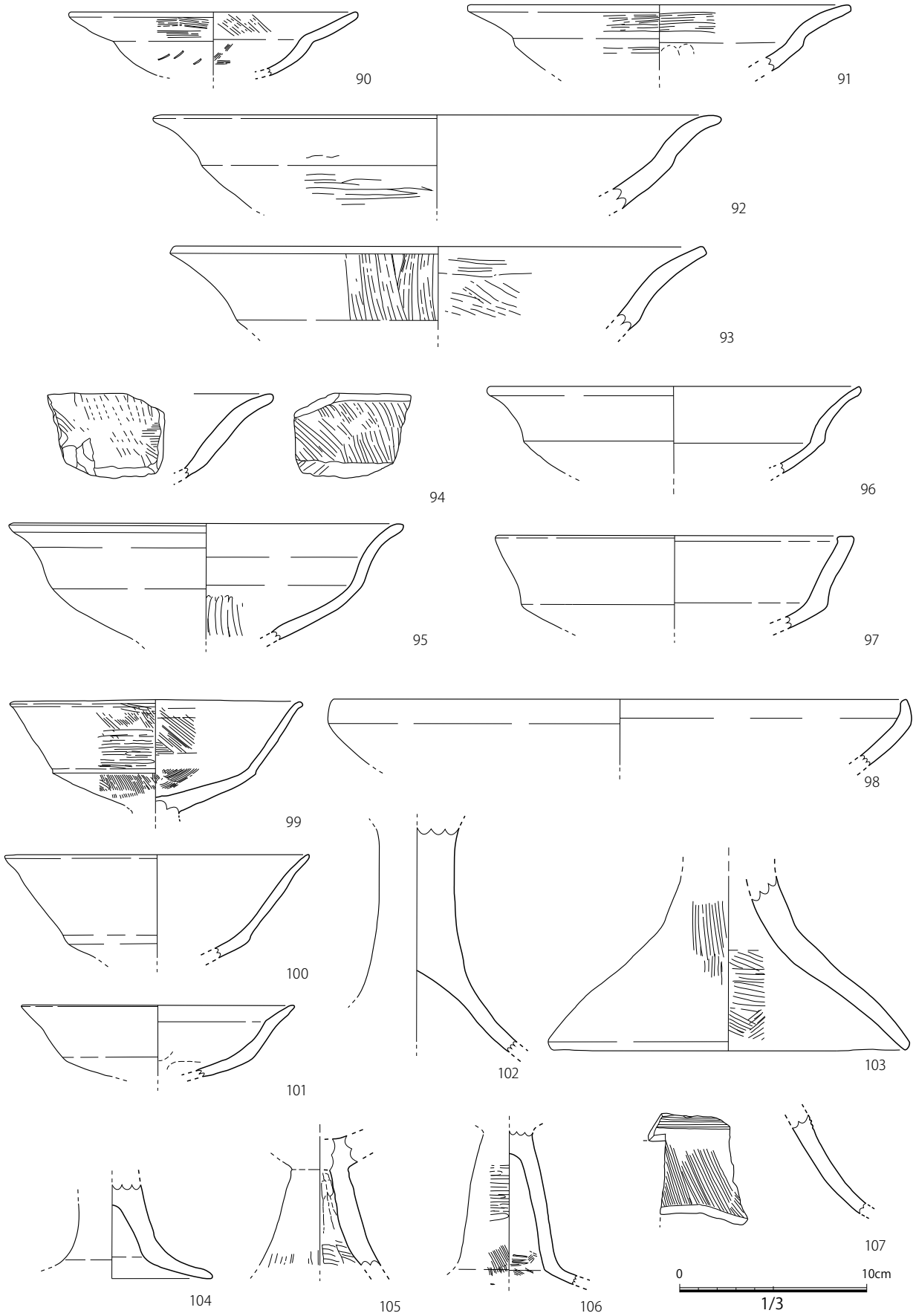


図 29 弥生～古墳時代の遺物⑥ (S=1/3)

(2) 石器

117～119は泥岩製の磨製石庖丁である。117は片刃で2箇所穿孔を有している。穿孔は表裏両面から施されており、右側の穿孔は身部に対して垂直には施されず、やや角度が付いている。平面形は直背凸刃となるものと思われ、背は明瞭な面を成す。裏面の穿孔上部に縦方向の擦痕が見られる。使用の影響か、表裏両面ともに刃部周辺に光沢が見られる。118は片刃で平面形は弧背直線刃を呈し、表裏両面から2箇所の穿孔を施す。背は稜を有しているが、一部欠損している左側の穿孔付近の背は面を成している。裏面では完形で残っている右側穿孔の横に穿孔を途中で止めた浅い凹みが見られる。裏面刃部付近に使用痕と見られる光沢を有する。表面刃部に横方向、裏面に斜め方向の擦痕が見られる。119は平面形が杏仁形を呈する石庖丁の端部で、側縁まで刃部を形成している。刃部の稜は裏面では確認できないが、断面形状は両刃に近い。裏面の一部が剥離しているが、背は面を成している。表裏両面に擦痕が見られ、裏面刃部付近に使用痕と見られる光沢が見られる。

(3) 金属器

120は3a層出土の鉄製ヤリガンナで、錆膨れにより不明瞭だが先端付近は断面三日月状を呈している。基部側の断面は方形を呈することから、茎部から身部の付近の破片と思われる。121は3層出土の平根式の有茎鉄鏃で、左側側縁から切先と茎先端が欠損する。茎部は断面方形を呈し、打ち延ばして身部を形成する。残存する右側側縁は直線的に延びる。

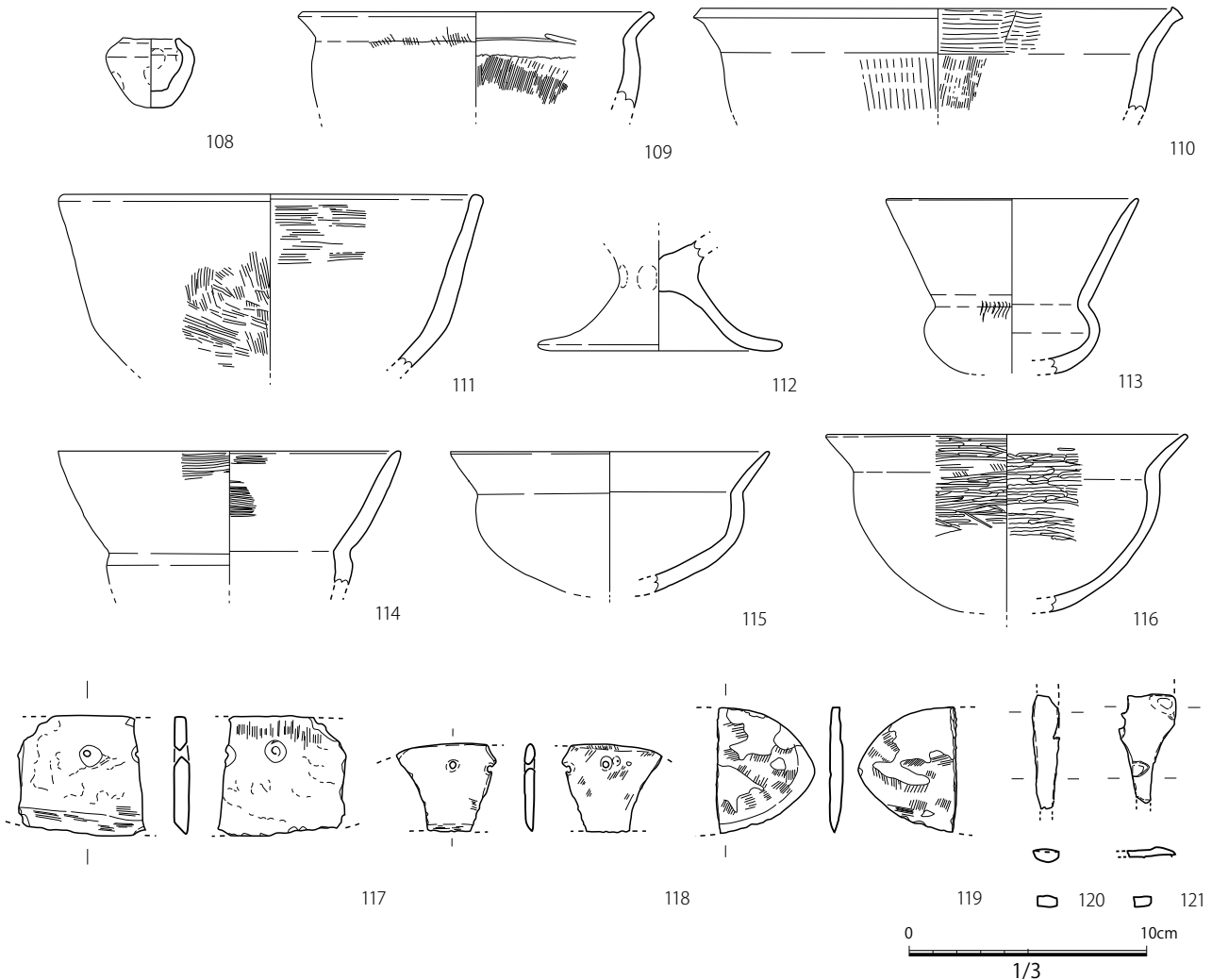


図30 弥生～古墳時代の遺物⑦ (S=1/3)

VI. 古代～近世の遺物

1. 遺物

(1) 須恵器

122 は須恵器の蓋で、口縁端部にかえりを有する。天井部の傾斜から器高が低く天井部はやや平坦な器形になるものと思われる。口縁周辺には回転ヘラケズリを施し、一部に自然釉が見られる。形状から7世紀の所産と考えられる。

(2) 貿易陶磁器

貿易陶磁の分類・時期については134を除き大宰府編年（山本2000）を参考とした。

①白磁

123 は白磁碗Ⅳ類の口縁部。口縁は肉厚の玉縁で、器壁の外表に小孔が見られる。胎土はやや粗い。124 は白磁碗の口縁部で、口縁端部は外方に屈曲し尖る。口縁上端部は水平になる。大宰府編年白磁碗Ⅴ-4a類と思われるが、口縁部のみの破片のため白磁碗Ⅷ類の可能性もある。

②青磁

125 はSP87出土の青磁碗である。口縁端部は丸くおさめ、直口となる。体部外面に幅広の鎬蓮弁を有する。内面見込みが残存しないため見込み文様の有無は不明だが、龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類となると思われる。126 は青磁碗の口縁部から体部で、外面に幅広の鎬蓮弁を有する。口縁端部がわずかに外反する。125と同じく龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類であろう。127・128 は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、口縁は若干外反する。127 は碗Ⅳ類と思われる。129 は青磁碗の底部で、高台は低い角高台を呈し、削りは浅い。内面見込みに沈線状の段がつき、釉薬のかかり方は全体的に厚い。龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1a類と思われる。130 は青磁碗の底部。釉薬はやや黄色味を帯び、外面は無文と思われる。内面見込みは有段で、見込み中央にスタンプ文を施す。高台は断面四角で削りは浅く、畳付まで釉がかかるが、一部が露胎している。龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1c類になるとと思われる。131 は龍泉窯系青磁碗の底部で、内面見込みにスタンプ文の花文が見られる。高台はやや高い角高台で、外端を面取りし、畳付の釉を掻き取っている。高台内面は中央部が凸状になる。130より新しい時期のものと考えられる。132 は龍泉窯系青磁の坏か皿と思われる口縁部で、外反する口縁端部を肥厚させ面取りしている。内面には型押しの花文が見られる。口縁端部に欠けた部分が見られ、輪花の可能性もある。坏Ⅲ類と同時期のものと思われ、13世紀中頃から14世紀初頭の所産と考えられる。133 は青磁皿の底部。外面の底部付近は露胎し、回転ヘラケズリが見られる。底部は上げ底状になる。内面見込みに篋描文と櫛点描文を有する。底部のみのため詳細は不明だが、同安窯系青磁の皿Ⅰ-1b類と思われる。134 は朝鮮陶器で李朝の雑釉陶器と思われる。内面見込みに目跡が残り、胎土目と思われるがやや砂質で砂目に近い。高台は断面台形で、外側を斜めに削り、畳付の釉を掻き取っている。16世紀の所産と考えられる。

(3) 土師質土器

135～137 は土師質土器の坏で、いずれも底部の切り離しは糸切りである。135 は口縁がわずかに外向しながら直線的に立ち上がる。中世Ⅴ期（15世紀後葉～16世紀末）（山本・山村1997）の所産と考えられる。136 は体部がやや外反し、口縁端部をつまみあげる。内面底部と体部の境には沈線を巡らせている。137 は体部がやや丸みを帯びた形状になると思われ、体部下方にろくろ目が見られる。

15世紀頃の所産と考えられる。138・139は底部糸切りの土師器小皿。138は口縁がほぼ直立する。139は器高が低く、口縁はやや外方に開く。13世紀後半から14世紀前半の所産か。

(4) 中世須恵器・石鍋・瓦質土器

① 東播系須恵器

140は須恵器鉢の口縁で、口縁端部を上下に拡張し、縁帯を形成する。縁帯部分には自然釉がつく。東播系須恵器と思われ、口縁部の形状から森田編年第Ⅲ期第2段階(14世紀前半)の所産と考えられる。

141は須恵器の底部で、底面にはヘラ切りの跡が見られる。139同様に東播系須恵器と思われる。

② 瓦質土器

142は瓦質土器で羽釜あるいは湯釜の鏝部分である。鏝は外方に長く延びる。外面は鏝の下部にハケ目、上部にナデが見られ、内面は鏝の部分にユビオサエが見られ、その上から横位の細かなハケ目が施されている。

③ 石鍋

143は石鍋の底部片で、一部が被熱により赤色を呈し、外面には煤が付着する。器壁は厚さ8mm程度で、薄く仕上げられている。体部および底部外面には幅5mmほどの鑿跡が明瞭に残る。内面には幅1cm程の工具痕が見られる。底部と体部の境界には鑿の当たりが深く残っており、縦方向に割った後に体部に横方向の調整を施しているものと思われる。

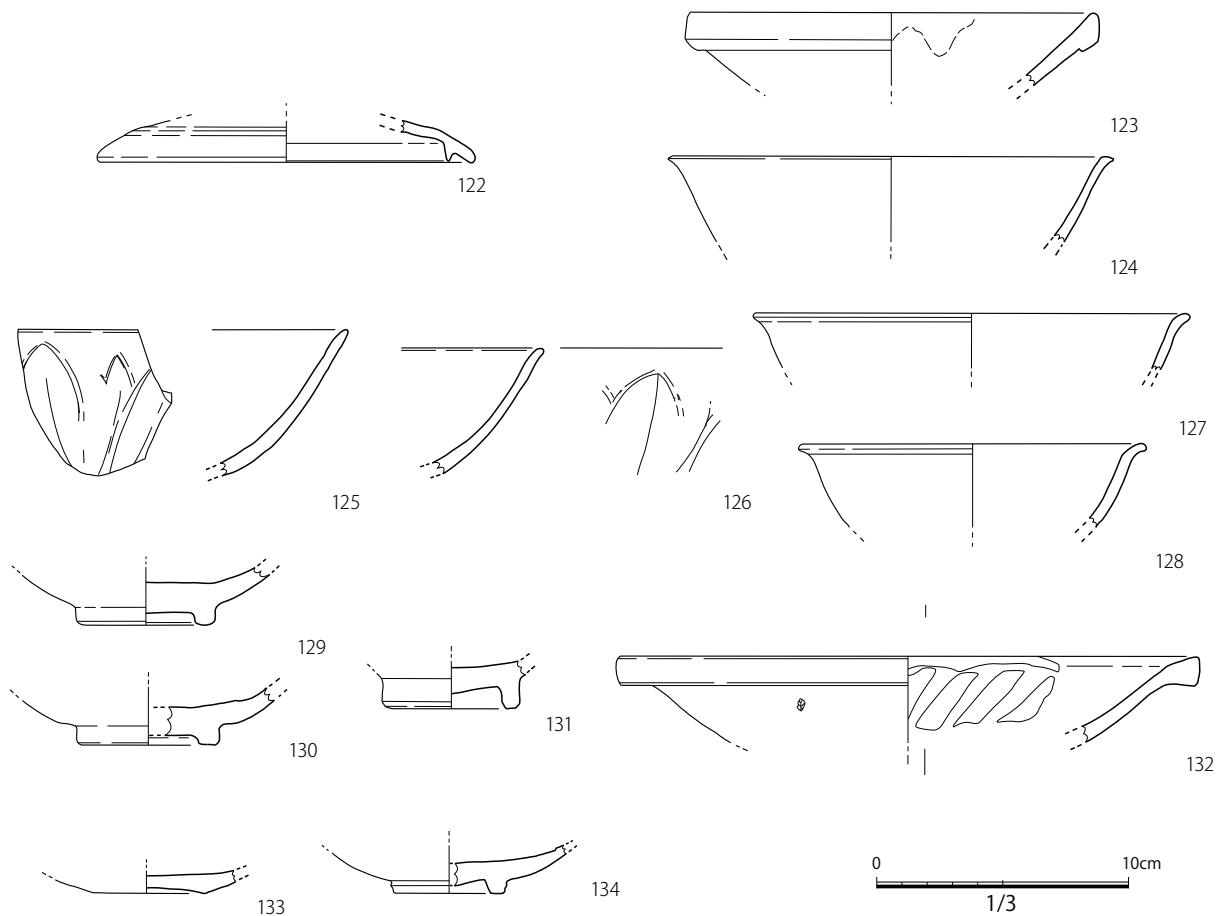


図 31 古代～近世の遺物① (S=1/3)

144は鏝付きの石鍋口縁部片。鏝は断面形が台形を呈する。口縁端部内面を5mmほどの幅で面取りする。器壁は内外面とも丁寧に調整されているが、外面口縁端部付近と鏝の基部に僅かに加工痕が残る。鏝の基部に鑿の当たりが残り、刃部幅1cm程度の工具が使用されていると思われる。

(5) 近世陶磁器

145は白磁紅皿である。貝殻状の型押し成形で、内面と外面口縁部付近のみに施釉する。口縁の幅が広く、1820年代以降の所産と考えられる。146は陶器の口縁部と思われ、胎土は精良だが、釉薬の融け方が悪く白濁している。破片のため詳細は不明だが、体部下半が露胎している可能性がある。形状からは溝縁皿と思われ、九州陶磁編年の波佐見I期（17世紀初頭）のものである可能性がある。

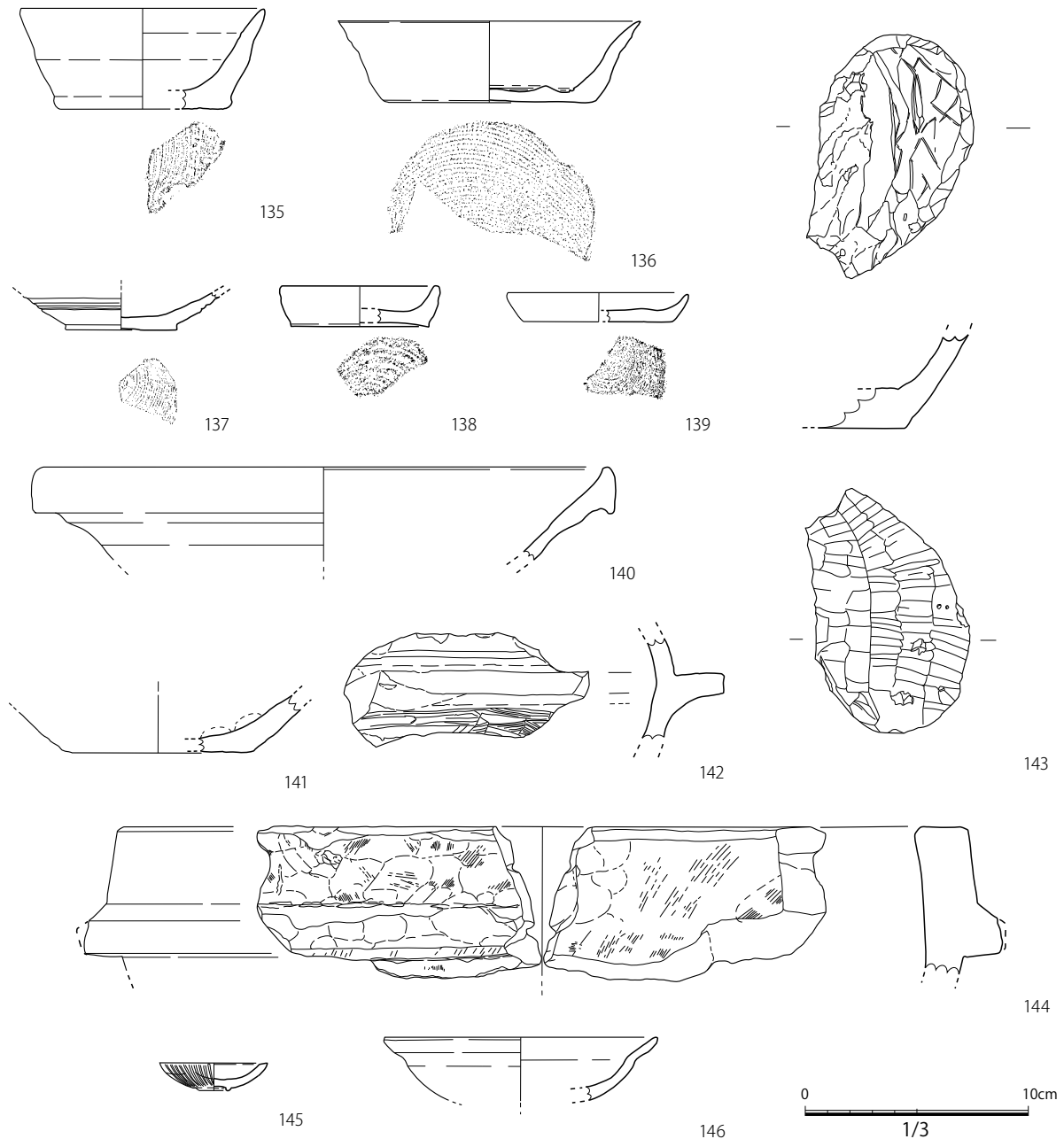


図 32 古代～近世の遺物② (S=1/3)

VII. その他の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 土坑

① SK01

B区 8230 グリッドに位置し、NR01 掘削中に4層上面で確認された。平面形は長方形を呈し、長軸 198cm、短軸 124cm、検出面からの深さ 30cm を測る。遺構の性格、NR01 との先後関係は不明である。

147 は台付甕の脚部で、低く狭い脚部になると思われ、弥生時代後期前半から中頃の所産と考えられる。148 は高坏の脚部で、外面と脚端部に赤色顔料が残る。4層上面での検出状況ではSK01 は弥生時代後期から古墳時代の流路であるNR01 に隣接しているが、NR01 は本来は3b層上面の遺構である。SK01 が検出された位置は3b層掘削時に礫や遺物の出土が多かったことからNR01 の上層にあたりと考えられ、実際にはNR01 と重複関係にあったものと考えられる。出土遺物からは弥生時代後期前半から古墳時代の遺構である可能性が考えられるが、NR01 が弥生時代後期から古墳時代の遺物を含んでおり、重複の先後関係が確認できないため確定できない。

② SK04・SK05・SK06・SK07

A区 7828 グリッドに位置し、4層上面で検出した。周辺は削平を受けており、弥生時代の遺物が出土しているが本来遺構が掘り込まれた面は不明であり、時期の確定はできない。

検出面の精査により4基の土坑が重複しているものと判断したが、検出位置が石棺墓群に近く、検出面や埋土中から板石の破片も見つかっていることから、弥生時代のものであれば全体が一つの遺構であり、ST01 同様に破壊された石棺墓の可能性も残る。検出面の一部が赤色となっており被熱していると思われる。

SK04 は重複した4基の土坑の中では最も新しく、平面形は円形を呈する。径 105cm、深さ 44 cm を測る。SK05 はSK06・SK07 より新しく、SK04 に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ 164cm、深さ 22 cm を測る。SK06 はSK04・SK05 よりも古いが、SK07 との先後関係は不明である。平面形は隅

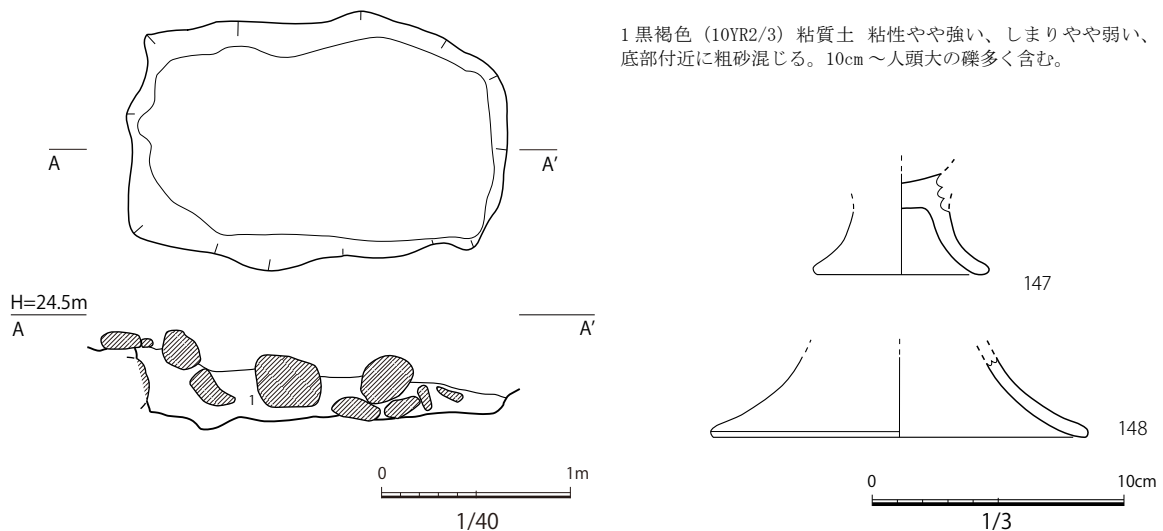


図 33 SK01 実測図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/3)

丸方形を呈し、残存部の長さ 90 cm、深さ 46 cmを測る。SK07 はSK05 に切られている。平面形は円形で、残存部の径 46 cm、深さ 24 cmを測る。

遺物はSK04 から出土している。149 は鉢の口縁部で、内外ともハケ後にナデ調整を行っている。ハケ目がやや歪み、口縁部に皺状の線が入ることから、口縁を絞っている可能性がある。口縁端部に赤色顔料が付着し、弥生時代後期の所産と思われる。

(2) 石列状遺構 (SS01)

B区 8030・8230 グリッドに位置し、3a 層上面で検出した。60～10cm ほどの石を配した石列 2 列の間は溝状になっており、調査区内での延長は約 15m、溝状部分の深さは 45 cmを測る。溝状部分の埋土には砂や砂利を含む層が見られることから流水に伴う堆積が想定され、石列を有する溝の可能性が高い。遺物は溝状部分から出土しており、弥生土器、土師器、近世陶磁器などが出土した。弥生土器などは周囲の包含層からの流入と見られ、遺構の構築自体は近世以降と考えられる。性格は不明だが、畑などの土地区画の可能性はある。

150 は陶器の鉢で、轆轤成形で外面にヘラケズリの跡が見られる。高台畳付は幅広で、高台端部をわずかに面取りする。内面には白化粧土を塗布し、その上に鉄釉で文様を描いている。破片のため文

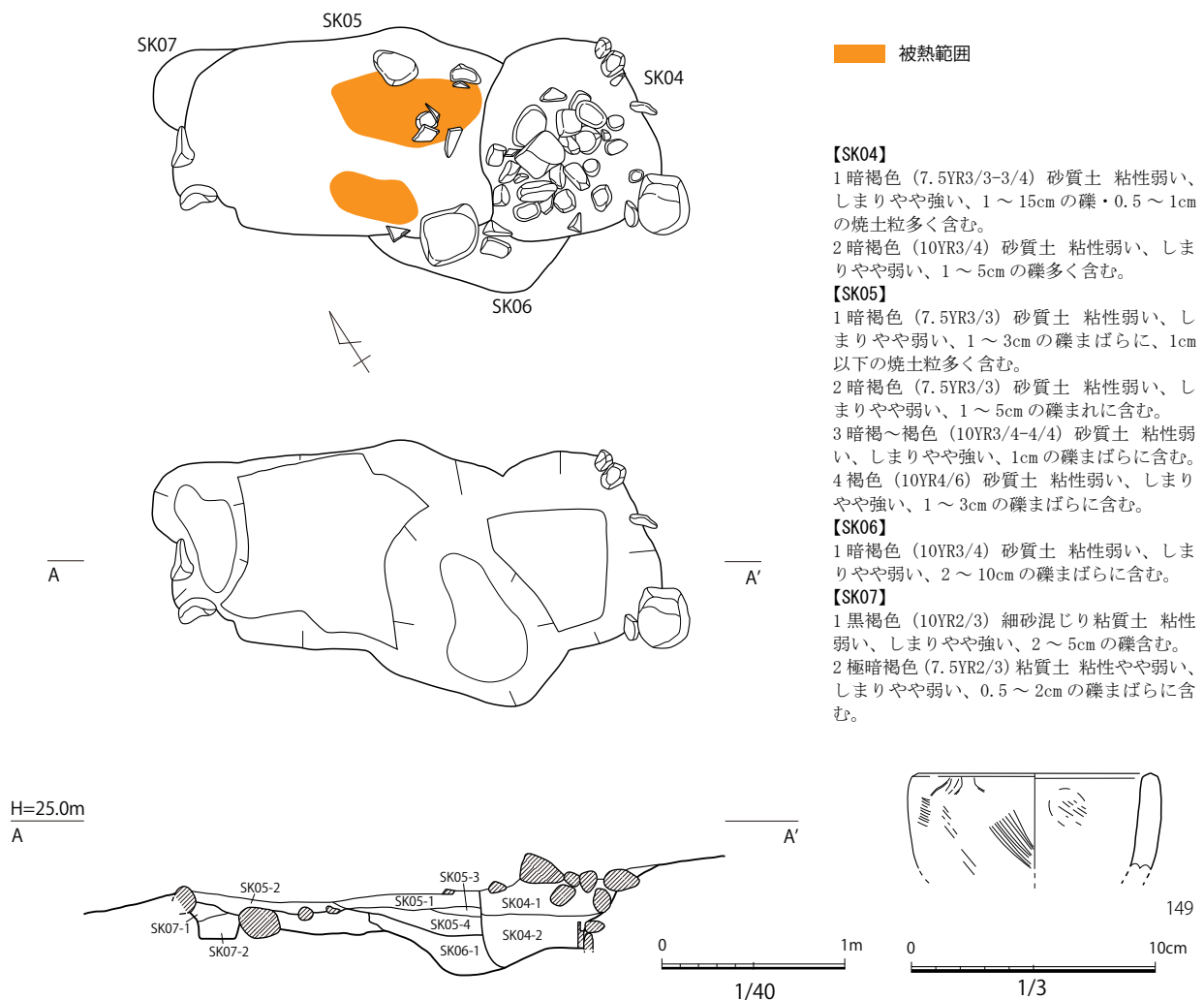


図 34 SK04-07 実測図 (S=1/40)・SK04 出土遺物 (S=1/3)

様の詳細は不明だが、見込み付近には波状文が描かれる。内面見込みは白化粧土がかからず、アルミナ砂を塗布する。

(3) 不明遺構 (SX01)

B区 8230・8430 グリッドに位置し、3a層上面で検出した。径4.4m、深さ約40cmの不正円形を呈する浅い土坑あるいは落ち込みの中に径5～60cmの礫が密に入る。礫は敷いたり並べたりした状況ではなく、性格は不明である。遺物は近世陶磁器の小片がわずかに出土しており、近世以降の遺構と考えられる。

2. 遺物

(1) 金属器

151は3a層出土の不明棒状鉄製品で先端に向かい緩やかに湾曲する。基部側には段関状の段が見られる。錆の影響の可能性もあるが、断面形状をみると基部側は素材を巻き込むように整形しているようにも見える。刃部等は確認できず、性格は不明である。152は3層出土の不明棒状鉄製品で、端部が屈曲する。全体に薄く、屈曲する側にむかって厚さが減じ、幅が広がるように見えることから、

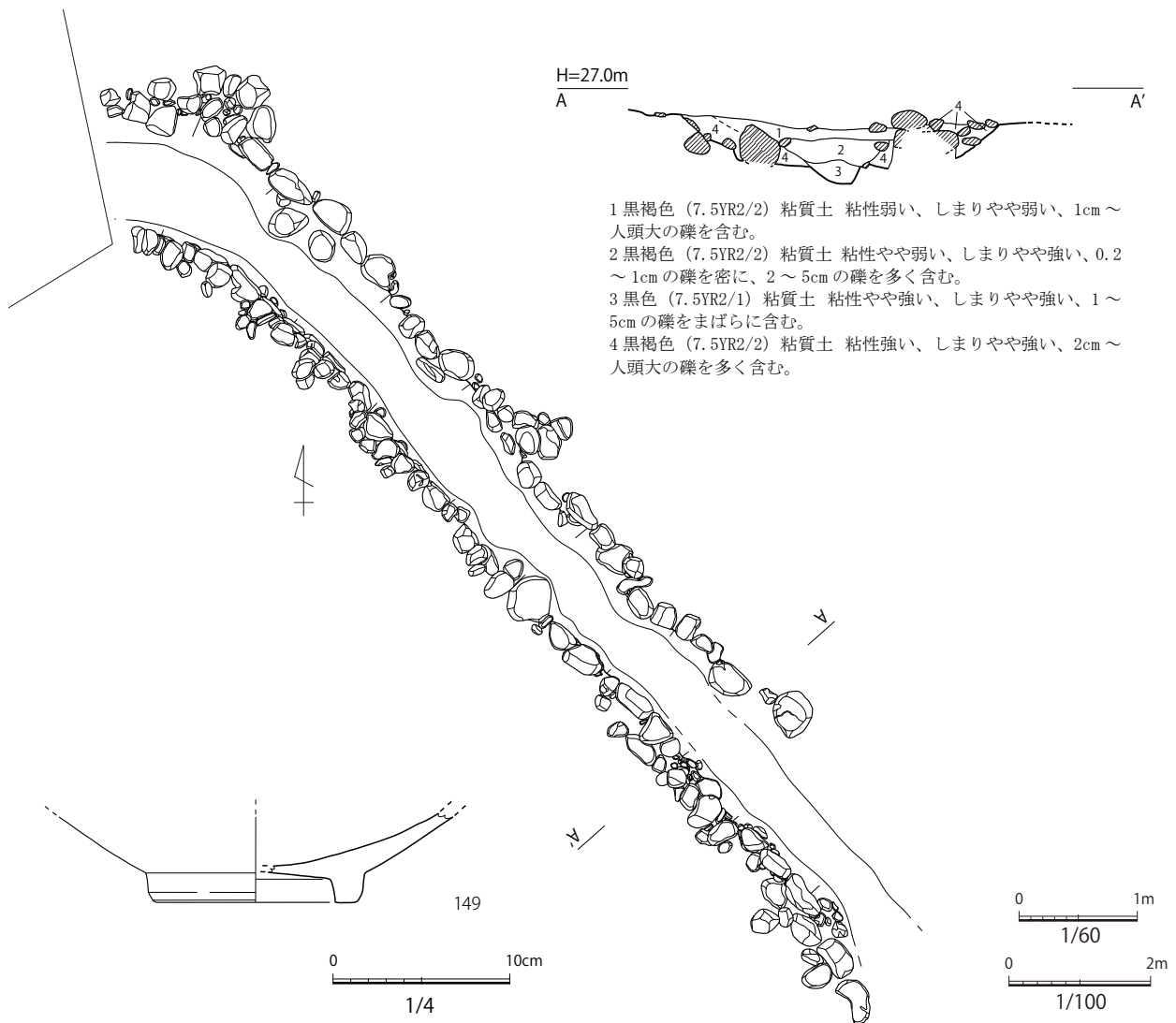


図 35 SS01 実測図 (平面 S=1/100・断面 S=1/60)・出土遺物 (S=1/4)

鑿やヤリガンナのような工具が土圧で曲がったものの可能性もあるが詳細は不明である。153は鉄釘で、断面は方形を呈し、端部を折り曲げ釘頭を整形する。平面形は大きく曲がっている。3a層出土であり、中世のものである可能性がある。154は3層出土の鉄製品で、薄い鉄片が端部付近で湾曲する。両端とも破断面と考えられ、形状からは鋌とも考えられるが、厚さは0.2cmと薄く、別の器種である可能性が高い。155は銅製の飾り金具と思われ、端部に穿孔が見られる。表面は金銅張りと思われ、錆を落とすと花文様を線書きし、その周囲を魚々子文で埋める装飾が確認できた。3層出土だが、3層は時期幅が広く、出土場所周辺にはピットや攪乱があった可能性もあり、時期は不明である。

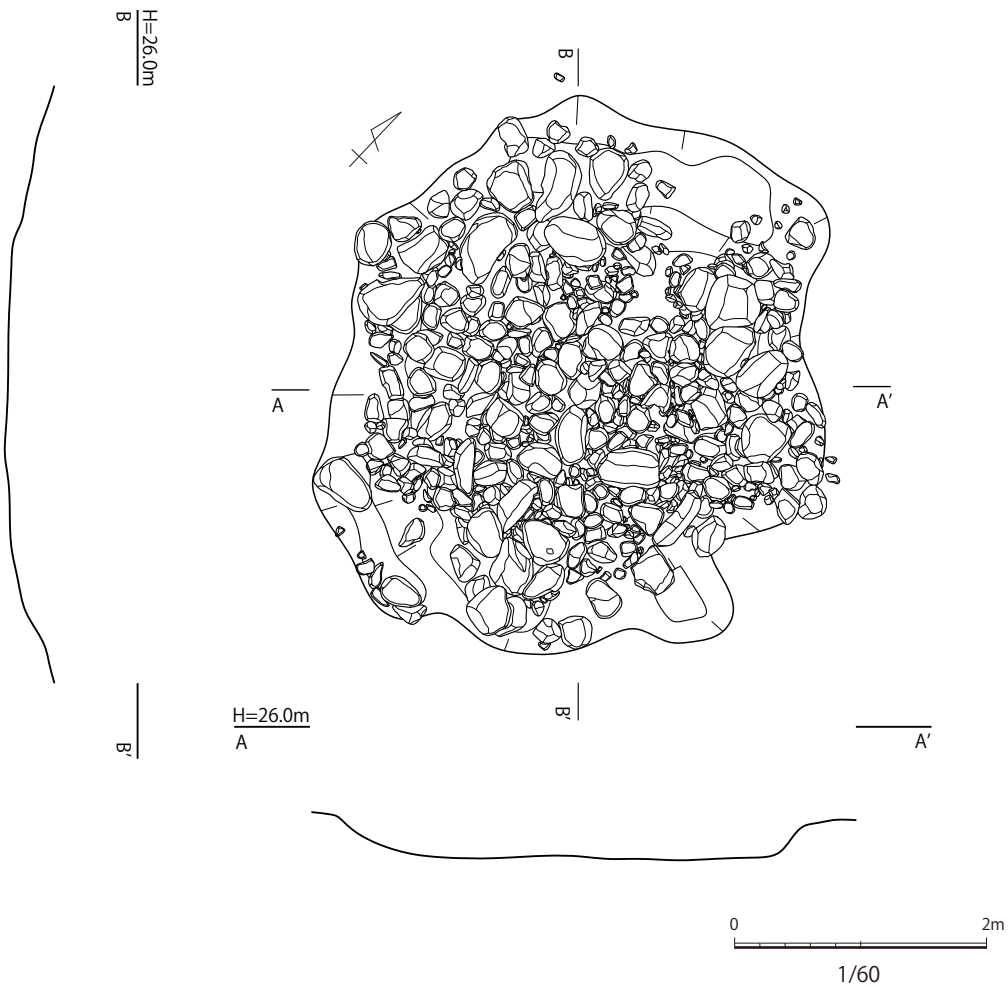


図 36 SX01 実測図 (S=1/60)

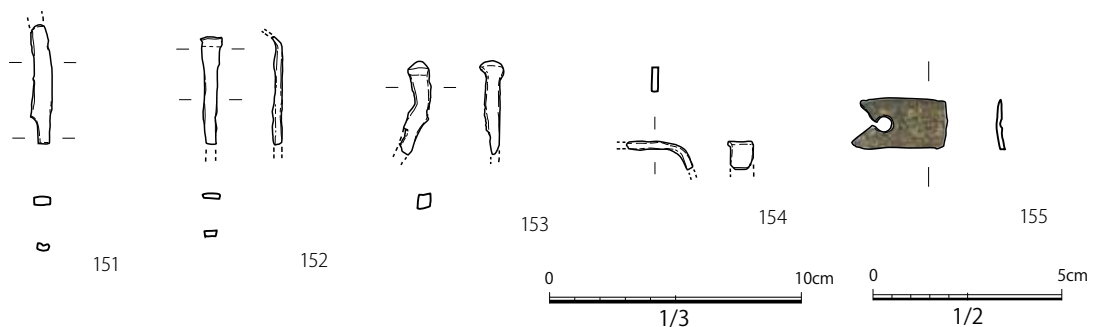


図 37 その他の遺物 [包含層出土] (S=1/3・155のみ S=1/2)

表2 ピット一覧1

番号	調査区	グリッド	検出面	法量 (cm)		埋土	遺物	備考
				直径	深さ			
SP001	B	8030	4層上面	30	16	A1,Cc		
SP002	B	8030	4層上面	32	4	A		
SP003	B	8030	4層上面	40	15	A1,Ca		
SP004	B	8030	4層上面	39	10	A		
SP005	B	8030	4層上面	32	18	A1		
SP006	B	8030	4層上面	50	16	Aa4		
SP007	B	8030	4層上面	46	22	A1,B1		
SP008	B	8030	4層上面	38	12	Aa1	土師器片、結晶片岩小片	
SP009	B	8030	4層上面	47	35	Ab		
SP010	B	8030	4層上面	44	14	A4		
SP011	B	8030	4層上面	42	33	A1,B4		
SP012	B	8030	4層上面	18	7	A2		
SP013	B	8030	4層上面	38	8	A2		
SP014	B	8030	4層上面	83	24	A3	土師質土器小片	
SP015	B	8030	4層上面	44	28	A6	土師器片	
SP016	B	8230	4層上面	26	7	A		
SP017	B	8230	4層上面	60	15	Ac1	弥生土器片、土師器片	
SP018	B	8230	4層上面	80	9	A	弥生土器片	
SP019	B	8230	4層上面	56	36	Ab2	弥生土器片	
SP020	B	8030	4層上面	33	15	Ab		
SP021	B	8030	4層上面	43	30	Ab		
SP022	B	8230	4層上面	42	17	Ab2		
SP023	B	8230	4層上面	17	17	Ab1		
SP024	B	8230	4層上面	40	7	A2		
SP025	B	8230	4層上面	29	10	A1,B		
SP026	B	8230	4層上面	13	4	A	土師器片	
SP027	B	8230	4層上面	30	18	A1,B1		
SP028	B	8230	4層上面	31	16	Ab	弥生土器片	
SP029	B	8230	4層上面	48	15	A		
SP030	B	8230	4層上面	40	26	A3		
SP031	B	8230	4層上面	57	22	A4		
SP032	B	8030	4層上面	34	10	C1		
SP033	B	8030	4層上面	22	5	Ab		
SP034	B	8030	4層上面	32	12	A1		
SP035	B	8230	4層上面	47	14	A3		
SP036	B	8230	4層上面	94	34	C1,Ab4	弥生土器片	
SP037	B	8230	4層上面	39	14	A1		
SP038	B	8230	4層上面	60	28	A1,Ac2	弥生土器片	
SP039	B	8230	4層上面	30	10	C1	弥生土器片、土師器片	
SP040	B	8230	4層上面	29	14	Cb	弥生土器片	
SP041	B	8430	4層上面	34	17	Aa1	土師器片	
SP042	B	8432	4層上面	34	9	Aa1		
SP043	B	8430	4層上面	41	20	D1,A1		
SP044	B	8430	4層上面	36	26	D1,A1		
SP045	B	8232	4層上面	50	30	Ab3	弥生土器片、土師器片	SP046と重複
SP046	B	8232	4層上面	39	11	Ab3	弥生土器片、土師器片	SP045と重複
SP048	B	8232	4層上面	40	26	A2	弥生土器片、土師器片	
SP050	B	8232	4層上面	30	18	A	土師器片	
SP051	B	8232	4層上面	55	18	A,Cc	弥生土器、土師器片	
SP053	B	8230	4層上面	46	31	A2	弥生土器片、土師器片	
SP056	B	8230	4層上面	71	28	Ab2	弥生土器片、土師器片	
SP057	B	8230	4層上面	20	13	A1		
SP058	B	8232	4層上面	53	12	A1	弥生土器片	
SP059	B	8232	4層上面	29	5	Ab1		
SP060	B	8232	4層上面	34	14	Ab1	弥生土器片、土師器片	
SP061	B	8232	4層上面	49	22	Ab4	弥生土器片	
SP062	B	8232	4層上面	48	50	A5	弥生土器片	
SP063	B	8232	4層上面	60	46	Ab3	弥生土器片、土師器片	

表3 ピット一覧2

番号	調査区	グリッド	検出面	法量 (cm)		埋土	遺物	備考
				直径	深さ			
SP064	B	8230	4層上面	43	20	Ab1		SP065と重複
SP065	B	8230	4層上面	20	16	Ab5		SP064と重複
SP066	B	8230	4層上面	30	16	A1	弥生土器片	
SP067	B	8230	4層上面	39	41	A3		
SP068	B	8230	4層上面	45	29	A5		
SP069	B	8230	4層上面	29	6	A	弥生土器片	
SP070	B	8230	4層上面	117	30	Aa5	土師器、弥生土器	
SP072	B	8230	4層上面	66	21	B3	弥生土器	
SP073	B	8230	4層上面	54	28	A	弥生土器片、土師器片	
SP074	B	8230	4層上面	37	18	A2	弥生土器片	
SP075	B	8230	4層上面	51	23	Ab1	土師器、弥生土器片	
SP076	B	8230	4層上面	25	22	Ab1	土師器、弥生土器片	攪乱と重複
SP077	B	8230	4層上面	37	24	Ab3		
SP078	B	8230	4層上面	32	14	A2		
SP079	B	8230	4層上面	66	24	A2	土師器片	
SP080	B	8230	4層上面	63	32	A1	弥生土器片	
SP081	B	8230	4層上面	62	22	A4	弥生土器片、土師器片	
SP082	B	8230	4層上面	37	14	A1	弥生土器片	
SP083	B	8230	4層上面	24	26	A1	弥生土器片	
SP084	B	8230	4層上面	36	18	A1		
SP085	B	8230	4層上面	30	15	A1		
SP086	B	8230	4層上面	24	10	A1		
SP087	A	7828	3b層上面	26	22	A,C1	青磁碗	
SP088	A	7828	4層上面	42	24	Aa2		
SC01-P01	B	8430	SC01床面	30	12			
SC01-P02	B	8430	SC01床面	20	8			
SC01-P03	B	8430	SC01床面	26	21			
SC01-P04	B	8430	SC01床面	70	39			調査中SC01-SK01
SC01-P05	B	8430	SC01床面	46	34			
SC01-P06	B	8430	SC01床面	50	32			

【埋土類型】

A 黒褐色(10YR2/3)細砂～粗砂混じり粘質土。粘性・しまりやや弱い。
 B 褐色(10YR4/3)粗砂混じり粘質土。粘性やや弱い、しまりやや強い。
 C 暗褐色(10YR3/3～3/4)細砂～粗砂混じり粘質土。粘性・しまりやや弱い。
 D 暗褐～黒褐色(10YR3/1～2/2)砂質土。粘性弱い、しまりやや弱い。

a しまりやや強い
 b 褐色土混じり
 c 黒褐色土混じり

1 5cm以下の礫を含む
 2 10cm以下の礫を含む
 3 15cm以下の礫を含む
 4 20cm以下の礫を含む
 5 30cm以下の礫を含む

表4 遺物一覧1(石器)

掲載番号	ID	出土位置		器種	石材	法量 (cm・g)				備考
		遺構等	層位			長さ	幅	厚み	重量	
4	701	B区8230	2層	打製石斧	安山岩	12.2	9.4	1.9	260	
5	703	A区8028		磨製石斧	蛇紋岩	9.2	5.9	2.5	190	ST05横集石中出土
6	704	B区8230	3b層	磨製石斧再加工品	蛇紋岩	6.3	3.1	0.8	20	裏面の一部を研ぎ出し刃部とする
7	716	A区8028	3層	石錘	安山岩?	13.5	12.1	8.2	1520	
8	709	A区7828	2層	打製石鏃	黒曜石	2.4	1.7	0.4	0.98	裏面に一次剥離痕の痕跡残す
9	710	A区7828	2層	打製石鏃	黒曜石	2.5	1.7	0.5	1.61	
10	712	B区8430	3層	打製石鏃	黒曜石	2.5	1.7	0.5	1.87	
11	711	B区8430	2層	打製石鏃	安山岩	2.9	2.2	0.4	1.28	表裏全面に斜め方向の擦過痕
12	713	B区8230	3b層	打製石鏃	安山岩	2.5	1.9	0.4	1.75	表裏全面に擦過痕
117	706	B区SD01		石庖丁	泥岩	5	5.4	0.7	33.6	平面形:直背凸刃
118	707	B区8230	3b層	石庖丁	泥岩	3.7	4.2	0.4	10.4	平面形:弧背直線刃
119	708	B区8230	3b層	石庖丁	泥岩	4.2	5.3	0.6	16.7	平面形:杏仁形
143	721	B区8230	3b層	石鍋	滑石	底径(12.0)		1.8	190	被熱・煤付着
144	719	A区7828	2層	石鍋	滑石	口径(39.0)		2.4	480	鏝付き

表5 遺物一覧2(土器・陶磁器)

掲載番号	ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段: 外面 下段: 内面	備考
		遺構等	層位			器高	口径	底径			
1	077	B区(NR01)	3b層	縄文土器 深鉢 縄文時代早期 か	口縁部	5.3	-	-	外】ミガキ、貝殻腹縁押捺 内】ミガキ	明黄褐色(10YR7/6) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
2	298	B区 8230	2層	縄文土器 深鉢 縄文時代後期 ～晩期	底部	2.6	-	(9.0)	外】ナデ 内】ナデ、ユビオサエ	明赤褐色(5YR5/6) 明赤褐～灰褐色 (5YR5/6-7.5YR4/2)	
3	304	B区 8430	2層	縄文土器 深鉢 縄文時代後期 ～晩期	底部	3.9	-	(11.6)	外】ナデ、ユビオサエ 内】ナデ	にぶい赤褐色(5YR5/4) 暗赤褐色(5YR3/2)	
13	001	B区SC01 (北東部)	床面直上 埋土下層 埋土上層	土師器 甕 古墳時代前期	口縁部～ 肩部	6.8	(15.0)	-	外】口縁部ヨコナデ、肩部ヨコハケ 内】口縁部ヨコナデ(ハケか)、体部 ケズリ	灰黄褐色(10YR5/2) 浅黄褐色(10YR8/4)	外面に煤付着
14	002	B区SC01 (南東部)	埋土下層	土師器 甕 古墳時代前期	口縁部	4.0	(14.4)	-	外】タテハケ後ヨコナデ 内】ナナメハケハケ後ヨコナデ	橙色(7.5YR7/6) 橙色(7.5YR6/6)	
15	006	B区 SC01 (北東部)	床面直上	土師器 鉢 古墳時代前期	口縁部	4.3	(19.0)	-	外】ナデ 内】ヨコハケ後ナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 明褐色(7.5YR5/6)	
16	009	B区 SC01 (南西部)	埋土下層	土師器 小型丸底壺 古墳時代前期	口縁部～ 胴部	5.8	(14.3)	-		浅黄褐色(7.5YR8/4) 橙色(7.5YR7/6)	
17	004	B区 SC01 (南東部)	埋土上層	土師器 甕 古墳時代前期	口縁部	3.5	-	-	外・内】ヨコナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
18	003	B区SC01	南北ベル ト床面直 上 南北ベル ト上層	土師器 甕	口縁部	5.5	-	-	外・内】ヨコナデ	橙色(5YR6/8)	
19	005	B区 SC01	東西ベル ト床面直 上	弥生土器 壺 弥生時代後期	頸部	-	-	-	外】ヨコナデ 内】ヨコハケ・ヨコナデ	橙色(5YR6/6) 橙色(7.5YR6/6)	
20	082	A区 ST03	掘方	弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	2.6	-	-	外】ナデ 内】ハケ	にぶい黄橙～灰黄褐色 (10YR6/4-5/2) にぶい黄橙～にぶい黄 褐色(10YR7/4-5/3)	
22	083	A区 ST04	棺内	弥生土器 直口壺か 弥生時代後期	口縁部	2.3	-	-	外・内】ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
23	084	A区 ST04	掘方	弥生土器	底部	2.4	-	(7.4)	外】ハケ 内】ユビオサエ	橙色(7.5YR7/6)	
24	087	A区 ST05	蓋石上	弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	4.3	-	(10.2)	外・内】ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
25	094	A区 SD02		土師器 低脚高坏 古墳時代前期	脚部	3.6	-	(9.2)	外・内】ナデ	明赤褐色(2.5YR5/8)	
26	096	A区 SD02		高坏	脚部	3.7	-	(24.8)	外・内】ナデ	橙色(7.5YR7/6) 浅黄褐色(7.5YR8/6)	外面に赤色顔料
27	102	A区 SD03		弥生土器 壺 弥生時代後期	口縁部	3.8	-	-	外・内】ナデ	黒褐～にぶい橙色 (7.5YR3/1-7/3) にぶい橙～黒褐色 (7.5YR7/4-3/1)	外面の一部に赤 色顔料
28	018	B区 NR01		弥生土器 甕	口縁部	4.4	(35.2)	-	外】ナデ 内】ヨコハケ	にぶい黄褐色 (10YR7/4) にぶい黄褐色 (10YR6/4)	
29	022	B区 NR01		弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	6.6	(19.4)	-	外】ナデ、ナナメハケ 内】ヨコハケ、ナナメハケ	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 橙色(7.5YR6/6)・黒褐 色(10YR3/2)	
30	026	B区 NR01		弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	5.0	(23.4)	-	外】ナデ 内】ナデ、ヨコハケ	暗灰黄色(2.5Y4/2) 灰黄褐色(10YR4/2)	
31	023	B区 NR01		弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	4.3	-	-	外】ナデ 内】ハケ	橙色(7.5YR7/6) 橙色(7.5YR6/6)	突帯
32	029	B区 NR01		弥生土器 壺 弥生時代	胴部	6.3	-	-	外・内】タテハケ、ナナメハケ	橙色(7.5YR7/6) 黄褐色(7.5YR7/8)	突帯
33	014	B区 NR01		弥生土器 台付甕 弥生時代後期	胴部	8.5	-	-	外】タテハケ 内】ヨコハケ、ナナメハケ	にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい橙色(7.5YR6/4)	

表6 遺物一覧3(土器・陶磁器)

掲載番号	ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段: 外面 下段: 内面	備考
		遺構等	層位			器高	口径	底径			
34	013	B区	NR01	弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	4.7	-	11.2	外・内】ナデ	明黄褐色(10YR7/6) 浅黄色(2.5Y7/3)	
35	025	B区	NR01	弥生土器 壺	口縁部	3.7	(15.0)	-	外】ナデ、タテハケ 内】ナデ	褐灰～にぶい黄褐色 (10YR4/1-5/3) 褐灰～にぶい黄褐色 (10YR4/1-6/3)	
36	015	B区	NR01	弥生土器	底部	4.8	-	(6.2)	内】底部ユピオサエ	橙色(5YR6/6)	
37	020	B区	NR01	弥生土器 高坏 弥生時代後期	口縁部	4.3	(24.6)	-	外】ナデ、下半タテハケ 内】ハケ後ナデ	にぶい黄橙～浅黄色 (10YR7/3-2.5Y7/3)	貼り付け突帯
38	021	B区	NR01	弥生土器 高坏	口縁部	6.1	(19.8)	-	外・内】ハケ後ナデ	浅黄褐色(7.5YR8/6) 橙色(7.5YR7/6)	
39	136	B区	8230	3b層 弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	3.8	(16.2)	-	外】ハケ後ナデ 内】ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
40	245	B区	8230	3b層 弥生土器か 甕	口縁部	6.6	(15.8)	-	外】ナデ、ハケ 内】ナデ、ユピオサエ、ケズリか	にぶい橙～灰褐色 (7.5YR6/4-4/2) 灰褐～にぶい橙色 (7.5YR5/2-5YR6/4)	
41	252	B区	8432	3b層 弥生土器 甕 弥生時代後期 か	口縁部	3.9	(27.1)	-	外・内】ナデ	橙色(7.5YR6/6) にぶい橙色(7.5YR6/4)	
42	033	B区	(NR01)	3b層 弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	6.0	(24.0)	-	外】タテハケ 内】ナデ	灰黄褐色(10YR4/2) にぶい黄褐色 (10YR5/3)	
43	045	B区	(NR01)	3b層 弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	6.5	(23.8)	-	外・内】ナデ	暗灰黄～にぶい黄褐色 (2.5Y4/2-10YR6/4) にぶい黄褐～暗灰黄色 (10 YR5/4-2.5Y4/2)	
44	137	B区	8230	3b層 弥生時代 甕 弥生時代終末 期	口縁部	6.8	(24.0)	-	外】ナデ 内】ナデ、ハケ後ナデ、ユピオサエ	にぶい黄橙～灰黄褐色 (10YR6/4-6/2) にぶい黄褐色 (10YR6/3)	
45	150	B区	8230	3b層 弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部～ 胴部	10.9	(20.0)	-	外】ナデ、ヨコハケ 内】ハケ後ナデ	にぶい橙色(7.5YR6/4- 7/4) にぶい黄橙～橙色 (10YR7/4-7.5YR7/6)	
46	133	B区	8230	3b層 弥生土器 甕	口縁部～ 胴部	10.0	(15.6)	-	外】ナデ、ハケか 内】ハケ	灰褐～褐灰色 (7.5YR4/2-4/1) にぶい黄橙～灰黄褐色 (10YR6/4-5/2)	
47	149	B区	8230	3b層 弥生土器 甕 弥生時代後期	口縁部	5.5	(28.8)	-	外】ナデ、ハケ 内】ナデ、ハケ、ユピオサエ	橙色(5YR6/8) 橙色(5YR6/6)	
48	175	B区	8230	3b層 弥生土器 台付甕 弥生時代後期	胴部～脚 部	9.6	-	-	外】ナデ 内】ハケ	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 灰黄褐色(10YR4/2)	
49	067	B区	(NR01)	3b層 弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	4.6	-	(9.0)	外】ナデ、ユピオサエ 内】ナデ	にぶい橙色(7.5YR6/4) 褐灰色(7.5YR5/1)	
50	296	A区	8028	3層 弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	4.1	-	8.6	外・内】ナデ	にぶい黄橙～橙色 (10YR7/3-7.5YR6/6) 褐灰～明黄褐色 (10YR5/1-6/8)	
51	178	B区	8230	3b層 弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	4.0	-	(8.3)	外】タテハケ、ナデ 内】ナデ	明褐色(7.5YR5/8) にぶい褐～褐色 (7.5YR5/4-4/3)	
52	173	B区	8230	3b層 弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	3.9	-	(10.2)	外】ナデ 内】ナデ、ユピオサエ、ハケオサエ	にぶい橙色(7.5YR7/4) にぶい橙～褐色 (7.5YR6/4-6/6)	
53	339	A区	南西ト レンチ	弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	4.7	-	(10.6)	外・内】ナデ	にぶい橙～灰黄褐色 (7.5YR7/4-10YR5/2) にぶい橙色～褐灰色 (7.5YR4/2)	
54	127	B区	8230	3b層 土師器 甕 古墳時代前期	口縁部	4.0	(16.8)	-	外】ナデ 内】ナデ、体部ケズリ	にぶい橙色(7.5YR7/4) 橙色(7.5YR6/6)	
55	144	B区	8230	3b層 土師器 甕 古墳時代前期	口縁部	3.6	(18.4)	-	外・内】ナデ	黒褐～灰黄褐色 (10YR3/2-4/2) にぶい黄褐～にぶい褐 色(10YR5/4-7.5YR5/4)	
56	147	B区	8230	3b層 土師器 甕	口縁部	4.9	(19.1)	-	外・内】ナデ	橙色(5YR6/8)	

表7 遺物一覧4(土器・陶磁器)

掲載番号	ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段: 外面 下段: 内面	備考
		遺構等	層位			器高	口径	底径			
57	235	B区 8230	3b層	弥生土器 壺	口縁部	3.4	(14.2)	-	外・内】ナデ	にぶい黄橙～橙色 (10YR7/4-7.5YR6/6) にぶい黄橙色 (10YR7/4)	
58	031	B区(NR01)	3b層	弥生土器 壺 弥生時代後期 か	口縁部	3.6	(11.0)	-		橙色(7.5YR6/8) 橙色(7.5YR7/6)	
59	326	A区 南西ト レンチ		弥生土器 壺	頸部	6.6	(17.6)	-	外・内】ナデ	橙色(5YR7/8) 橙～にぶい橙色 (7.5YR7/6-7/4)	
60	034	B区(NR01)	3b層	弥生土器 壺 弥生時代後期 か	口縁部	8.0	(17.4)	-	外・内】ナデ	浅黄橙色(7.5YR8/4) 浅黄橙色(10YR8/4)	突帯
61	123	B区 8230	3b層	弥生土器 壺 弥生時代後期	口縁部	3.8	(25.2)	-	外・内】ナデ	明黄褐色(10YR7/6) 黄褐色(10YR8/6)	
62	138	B区 8230	3b層	弥生土器 壺 弥生時代後期	口縁部	2.2	-	-	外・内】ナデ	橙色(7.5YR7/6) 浅黄褐色(7.5YR8/6)	
63	041	B区(NR01)	3b層	弥生土器 壺	口縁部	4.7	(15.0)	-	外】ナデ 内】ナデ・ユビオサエ	褐灰～にぶい橙色 (10YR4/1-5YR7/4) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
64	047	B区(NR01)	3b層	弥生土器 複合口縁壺 弥生時代後期	口縁部	6.9	-	-	外・内】ナデ	橙色(7.5YR6/6) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
65	131	B区 8230	3b層	弥生土器 壺 弥生時代後期	口縁部	3.0	(23.4)	-	外・内】ナデ	橙～にぶい黄褐色 (7.5YR6/6-10YR7/4) 橙～にぶい黄褐色 (7.5YR7/6-10YR7/3)	
66	284	A区 7828	3層	弥生土器 複合口縁壺 弥生時代後期 ～	口縁部	3.2	(24.6)	-	外・内】ナデ、ハケ	にぶい橙色(7.5YR7/4) 浅黄褐色(7.5YR8/4)	
67	267	B区	3b層	弥生土器 複合口縁壺 弥生時代後期	口縁部	4.7	(25.0)	-	外・内】ナデ、ハケ	明黄褐色(10YR7/6) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
68	329	A区 南西ト レンチ		弥生土器 複合口縁壺 弥生時代後期	口縁部	6.8	(39.2)	-	外】ナデ 内】ナデ、ユビオサエ、タテハケ	にぶい黄褐色 (10YR7/3) 浅黄橙～にぶい黄褐色 (10YR8/4-6/3)	
69	146	B区 8230	3b層	弥生土器 複合口縁壺 弥生時代後期	口縁部	3.3	(15.0)	-	外・内】ナデ	褐灰～黄褐色 (10YR5/1-7.5YR7/8) 橙色(7.5YR7/6)	
70	271	B区 8230	3a層	弥生土器 複合口縁壺 弥生終末～古 墳初頭	口縁部	5.4	(15.0)	-	外】ナデ、ハケ 内】ナデ	橙色(7.5YR7/6)	山陰系
71	130	B区 8230	3b層	土師器 壺 古墳時代前期	口縁部	4.8	(14.0)	-	外】ハケ、ナデ 内】ナデ	にぶい橙色(7.5YR7/4) 橙～黒褐色(7.5YR7/6- 3/1)	
72	148	B区 8230	3b層	甕	口縁部	5.0	(14.0)	-	外・内】ナナメハケ後ナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	
73	239	B区 8230	3b層	土師器か 壺 古墳時代前期 か	口縁部	5.5	(18.4)	-	外・内】ハケ	橙色(5YR7/6) 浅黄褐色(7.5YR8/4)	
74	251	B区 8430	3b層	弥生土器 無頸壺	口縁部～ 体部	10.0	(8.6)	-	外】ナデ 内】ナデ	明黄褐～橙色 (10YR7/6-5YR6/6) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁絞る?
75	106	B区 SP51		弥生土器 壺 弥生時代後期	口縁部～ 体部	6.7	(13.0)	-	外】ハケ、ナデ 内】ナデ、ユビオサエ	橙色(5YR6/6)	
76	285	A区 7828	3層	弥生土器 小型壺 弥生時代後期	頸部	4.0	(12.6)	-	外】ナデ 内】ナデ、ユビオサエ	橙色(7.5YR6/6) にぶい褐～橙色 (7.5YR5/4-6/6)	
77	270	B区	3b層	弥生土器 壺 弥生時代	胴部	6.5	-	-	外】ナデ、櫛描直線文 内】ナデ	橙色(7.5YR7/6)	
78	049	B区(NR01)	3b層	弥生土器 壺 弥生時代後期 か	胴部	8.5	-	-	外】タテハケ、ナデ(突帯間) 内】ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	刻目突帯

表8 遺物一覧5(土器・陶磁器)

掲載番号	ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段: 外面 下段: 内面	備考
		遺構等	層位			器高	口径	底径			
79	232	B区 8230	3b層	弥生土器 壺	胴部	7.0	-	-	外】ハケ、ナデ(突帯間)、刻目突帯 内】ハケ	浅黄橙色(10YR8/4) 黄灰~黄褐色 (2.5Y4/1-5/3)	
80	220	B区 8230	3b層	弥生土器 壺	胴部	6.4	-	-	外】貼り付け突帯に斜め格子文、 ナデ 内】ハケ後ナデ	明赤褐色(5YR5/6)	
81	259	B区 8432	3b層	弥生土器 弥生時代後期か	底部	3.3	-	(4.6)	外・内】ユビオサエ、ナデ	浅黄橙~褐灰色 (7.5YR8/6-5/1) 浅黄橙色(10YR8/4)	
82	075	B区(NR01)	3b層	弥生土器 弥生時代後期か	底部	3.5	-	5.6	外】タテハケ 内】ハケ、ユビオサエ	橙色(7.5YR7/6)	
83	344	A区 平成25年度 試掘坑 (TP3)	埋戻し土	弥生土器	底部	5.3	-	(4.5)	外】ナデ、ユビオサエ 内】ハケ	浅黄橙色(10YR8/4) 浅黄褐色(10YR8/3)	
84	072	B区(NR01)	3b層	弥生土器 弥生時代後期か	底部	4.9	-	(8.2)	外】ナデ 内】ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 橙色(7.5YR6/6)	
85	159	B区 8230	3b層	弥生土器 弥生時代後期	底部	4.0	-	(5.2)	外】ナデ 内】ハケ	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 黒色(10YR2/1)	赤色顔料?
86	071	B区(NR01)	3b層	弥生土器 弥生時代終末	底部	4.2	-	5.7	外】ユビオサエ、ナデ 内】ハケ	にぶい黄橙色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
87	162	B区	3b層	弥生土器 弥生時代終末	底部	3.7	-	3.8		橙色(7.5YR7/6) 淡黄色(2.5Y8/4)	
88	376	B区 8030 サブトレンチ 2		弥生土器 壺 弥生時代後期	底部	15.6	-	5.4	外】ハケミガキか、ハケ、ナデ 内】ナデ、ユビオサエ	浅黄橙~黒色 (10YR8/4-) 浅黄褐色(10YR8/3)	
89	160	B区 8230	3b層	弥生土器 壺	底部	6.9	-	(5.0)	外】タテハケ、ナデ、ユビオサエ 内】ナデ、ユビオサエ	橙色(7.5YR6/6) にぶい黄褐色 (10YR5/4)	
90	183	B区 8230	3b層	弥生土器 高坏 弥生時代後期	坏部	3.3	(15.4)	-	外】ハケ、ミガキ 内】ハケか、ミガキ	橙色(2.5YR6/6) 橙色(2.5YR6/8)	
91	256	B区 8432	3b層	弥生土器 高坏 弥生時代後期	坏部	3.5	(20.4)	-	外・内】ナデ	黄褐色(2.5YR5/3) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
92	185	B区 8230	3b層	弥生土器 高坏 弥生時代後期か	坏部	5.7	(30.4)	-	外】ナデ、ミガキ 内】ナデ	橙色(5YR6/8) 橙色(5YR6/6)	赤色顔料
93	128	B区 8230	3b層	弥生土器 高坏 弥生終末~古 墳初頭	坏部	4.5	(28.8)	-	外・内】ハケ	明黄褐~褐灰色 (10YR6/6-4/1) 橙色(7.5YR7/6)	
94	217	B区 8230	3b層	弥生土器か 高坏	口縁部	4.5	-	-	外・内】ハケ	黒褐色(2.5Y3/1) 橙色(7.5YR7/6)	
95	044	B区(NR01)	3b層	弥生土器 高坏 弥生終末~古 墳初頭	坏部	6.2	(21.1)	-	外】ナデ 内】ナデ、ミガキ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
96	188	B区 8230	3b層	弥生土器 高坏 弥生時代後期	坏部	4.6	(20.0)	-	外・内】ナデ	橙色(7.5YR6/6) オリーブ褐~明黄褐色 (2.5Y4/3-10YR6/6)	
97	143	B区 8230	3b層	弥生土器 高坏 弥生時代後期	坏部	5.0	(19.2)	-	外】ナデか 内】ナデ	橙色(5YR7/6)	
98	035	B区(NR01)	3b層	弥生土器 高坏	口縁部	3.5	(30.6)	-	外・内】ナデ	橙色(5YR7/6) 橙色(7.5YR6/6)	
99	243	B区 8230	3b層	土師器 高坏 古墳時代前期	坏部	6.1	15.6	-	外】ハケ後ミガキ 内】ハケ	明赤褐色(5YR5/6) 橙色(5YR6/6)	
100	184	B区 8230	3b層	土師器 高坏 古墳時代前期	坏部	5.5	(16.2)	-	外・内】ハケか、ナデ	橙色(5YR6/8) にぶい黄橙~橙色 (10YR7/4-7.5YR7/6)	
101	233	B区 8230	3b層	高坏 古墳時代前期か	坏部	3.8	(14.6)	-	外・内】ナデ	橙色(5YR7/6) 浅黄褐色(7.5YR8/6)	
102	195	B区 8230	3b層	弥生土器 高坏	脚部	11.9	-	-	外】ナデ、ユビオサエ 内】ナデ	浅黄橙~橙色 (7.5YR8/6-5YR7/6) 橙色(5YR7/6)	
103	325	A区 南西ト レンチ		弥生土器 高坏 弥生終末~古 墳初頭	脚部	9.3	-	(19.4)	外】タテハケ、ナデ 内】ヨコハケ	橙色(7.5YR7/6) にぶい黄褐色(7.5YR7/4)	

表9 遺物一覧6(土器・陶磁器)

掲載番号	ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段: 外面 下段: 内面	備考
		遺構等	層位			器高	口径	底径			
104	196	B区 8230	3b層	高坏	脚部	5.0	-	(10.7)	外・内】ナデ	橙色(5YR6/8) 明赤褐色(5YR5/8)	
105	208	B区 8230	3b層	土師器か 高坏 古墳時代前期か	脚部	6.9	-	-	外】ナデ、ハケ 内】ハケ、ナデ	橙色(7.5YR7/6) 明黄褐色(10YR7/6)	
106	205	B区 8230	3b層	高坏	脚部	8.1	-	-	外】ハケ、ミガキ 内】ナデ、ハケ	橙色(5YR6/8)	
107	275	B区 8230	3a層	弥生土器 肥前型器台 弥生時代後期	胴部	5.2	-	-	外】ハケ、沈線 内】ナデ、一部ハケ後ナデか	橙色(7.5YR7/6) 橙色(7.5YR6/6)	
108	120	B区(NR01)	3b層	ミニチュア土器	完形	2.9	2.4	1.0	外・内】ナデ、ユビオサエ	橙色(7.5YR6/6)・褐灰色(7.5YR4/1) にぶい橙～橙色(7.5YR6/4-6/6)	
109	293	A区 8028	3層	弥生土器 鉢	口縁部	4.0	(14.6)	-	外・内】ナデ、ハケ	にぶい橙色(7.5YR7/4) 橙色(5YR6/6)	
110	250	B区 8430	3b層	土師器か 鉢	口縁部	4.3	(19.6)	-	外】ナデ、ハケ 内】ハケ、ケズリ後ナデか	褐灰色(10YR4/1) にぶい橙～褐灰色(7.5YR6/4-10YR4/1) にぶい黄橙～褐灰色(10YR7/2-4/1)	
111	139	B区 8230	3b層	土師器 鉢 古墳時代初頭	口縁部～ 体部	7.2	(17.6)	-	外】ナデ、タテハケ、ナメハケ 内】ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙～褐灰色(10YR7/3-5/1) にぶい黄橙～褐灰色(10YR7/2-4/1)	
112	211	B区 8230	3b層	土師器 脚台付鉢か 古墳時代前期	脚部	4.7	-	(10.3)	外・内】ナデ	浅黄褐色(10YR8/4) にぶい黄褐色(10YR7/3)	
113	108	B区 SP76		土師器 小型丸底壺 古墳時代前期	口縁部～ 胴部	7.5	(10.6)	-	外】ハケ後ナデ 内】ナデ	橙色(7.5YR7/6) 橙色(7.5YR7/6-2.5YR7/8)	
114	238	B区 8230	3b層	土師器 小型丸底壺 古墳時代前期	頸部	5.6	(14.4)	-	外】ヨコハケ、ナデ 内】ハケ	明黄褐色(10YR6/6) 明黄褐色(10YR7/6)	
115	309	A区 7828	2層	小型丸底壺 弥生終末～古墳前期	口縁部～ 胴部	5.9	(13.4)	-	外】ミガキ 内】ナデ	橙～にぶい黄褐色(7.5YR6/6-10YR7/4) 橙色(7.5YR6/6-7/6)	
116	310	A区 7828	2層	小型丸底壺 弥生終末～古墳前期	口縁部～ 胴部	7.5	(15.2)	-	外・内】ナデ、ミガキ	明褐色(7.5YR5/6) 橙色(7.5YR6/6)	
122	349	A区 7828	2層	須恵器 蓋 7世紀	口縁部	1.7	(15.0)	-	外】回転ヘラケズリ 内】回転ナデ	褐灰色(10YR6/1) 灰オリーブ色(5Y6/2)	
123	355	B区 8432	2～3a層	白磁 碗 白磁碗IV類	口縁部	2.9	(16.6)	-	胎土】浅黄色(2.5Y7/3) 口縁玉縁、器壁外面に小孔	灰黄色(2.5Y7/2)	
124	367	B区 8230	3b層	白磁 碗 白磁碗V-4a類か	口縁部	3.4	(17.4)	-	胎土】灰白色(5Y7/1) 口縁端部が外方に尖る 器壁外面に小孔	灰白色(7.5Y7/1)	
125	109	A区 SP87		龍泉窯系青磁 碗II-b類	口縁部～ 体部	5.8	-	-	外】幅広の鎬蓮弁	オリーブ黄色(7.5Y6/3)	
126	362	B区 8230	3a層	龍泉窯系青磁 碗II-b類	口縁部～ 体部	5.0	-	-	胎土】灰色(5Y6/1) 幅広の鎬蓮弁	灰オリーブ色(7.5Y5/2)	
127	350	B区 8230	2層	龍泉窯系青磁 碗IV類か	口縁部	2.1	(17.4)	-	胎土】灰白色(5Y8/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	
128	351	B区 8230	2層	龍泉窯系青磁 碗	口縁部	3.3	(13.8)	-	胎土】灰色(7.5Y6/1)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	
129	361	B区 8230	3a層	龍泉窯系青磁 碗I-1a類	底部	2.3	-	(5.4)	胎土】灰白色(N8/0) 内面見込みに沈線状の段、無紋	灰オリーブ色(10Y6/2) 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	
130	357	A区 7828	2層	龍泉窯系青磁 碗I-1c類	底部	2.3	-	(5.6)	胎土】黄灰色(2.5Y6/1) 内面見込みに段、スタンプ文 高台畳付きまで施釉	灰オリーブ(7.5Y4/2) 灰オリーブ(7.5Y5/3)	
131	358	A区 7828	2層	龍泉窯系青磁 碗IV類か	底部	1.9	-	(5.0)	胎土】灰白色(5Y7/1) 内面見込みにスタンプ文	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	
132	370	B区 8230 サブトレンチ 1		龍泉窯系青磁 坏もしくは皿	口縁部	3.4	(23.2)	-	胎土】淡黄色(2.5Y7/3) 内面に型押の花纹、口縁端部に輪花か	灰オリーブ(5Y5/3)	
133	363	B区 8230	3a層	同安窯系青磁 皿I-1b類 李朝陶器	底部	0.9	-	4.5	胎土】灰色(5Y6/1) 内面見込みに鑿描文と楕点描文	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	
134	373	B区 攪乱		碗 16世紀か	底部	1.9	-	(4.4)	胎土】灰白色(5Y7/1) 内面見込みに目跡	オリーブ黄色(5Y6/3)	
135	280	B区 8230	3a層	土師質土器 坏 15世紀後葉～ 16世紀末	口縁部～ 底部	4.5	(11.0)	(7.5)	外】ナデ、底部系切り 内】ナデ	橙色(7.5YR6/6)	

表 10 遺物一覧7(土器・陶磁器)

掲載番号	ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段: 外面 下段: 内面	備考	
		遺構等	層位			器高	口径	底径				
136	368	B区	8230	3b層	土師質土器 坏 中世	口縁部～ 底部	3.7	(13.5)	(9.6)	外・内】ナデ 底部糸切り	橙色(5YR6/6) にぶい橙色(5YR6/4)	
137	299	B区	8230	2層	土師質土器 碗 15世紀か	底部	1.7	-	(5.0)	外】ナデ、ろくろ目 内】ナデ 底部糸切り	橙色(5YR6/8)	
138	282	B区	8230	3a層	土師質土器 小皿 13世紀後半～ 14世紀前半	口縁部～ 底部	1.8	(6.6)	(6.2)	外・内】ナデ 底部糸切り	にぶい黄橙色 (10YR7/4) にぶい黄橙～褐灰色 (10YR7/3-6/1)	
139	281	B区	8230	3a層	土師質土器 小皿 13世紀後半～ 14世紀前半	口縁部～ 底部	1.2	(8.0)	(6.6)	外・内】ナデ 底部糸切り	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 明黄褐色(10YR7/6)	
140	277	B区	8230	3a層	須恵器 捏鉢 14世紀前半	口縁部	4.2	(25.2)	-	外】ナデ、口縁に自然釉 内】ナデ	灰色(5Y6/1-4/1) 灰色(5Y6/1)	東播系須恵器か
141	278	B区	8230	3a層	須恵器 鉢 中世	底部	2.6	-	(8.6)	外】ナデ、底部へラ切り 内】ナデ、ユビオサエ	黄灰色(2.5Y6/1)	東播系須恵器か
142	348	A区	攪乱		瓦質土器 釜	鏝	4.5	-	-	外】ナデ、ヨコハケ 内】ヨコハケ、ユビオサエ	暗灰黄色(2.5Y5/2) 黄褐色(2.5Y5/3)	
145	365	B区	8432	3a層	近世陶磁 紅皿 19世紀前半以 降	口縁部～ 底部	1.2	4.8	1.4	胎土】灰白色(5Y8/2) 型押し成形、内面と外面口縁部付 近に施釉	灰白色(5Y8/1)	
146	372	B区	攪乱		近世陶磁 溝縁皿か 17世紀初頭か	口縁部	2.8	(12.2)	-	胎土】灰白色(10YR8/2)	灰白～灰黄色 (2.5Y8/2-7/2) 淡黄～にぶい黄色 (2.5Y8/3-6/3)	
147	093	B区	SK01		弥生土器 台付甕 弥生時代後期	脚部	4.0	-	(6.8)	外・内】ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
148	092	B区	SK01		土師器 高坏 古墳時代前期	脚部	3.2	-	(15.0)	外・内】ナデ	橙色(7.5YR6/6) 浅黄橙色(7.5YR8/4)	赤色顔料
149	090	A区	SK04		弥生土器 鉢 弥生時代後期 か	口縁部	3.9	(9.5)	-	外・内】ハケ、ナデ、ユビオサエ	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色顔料
150	118	B区	SS01		近世陶磁 陶器鉢 18世紀前半か	底部	5.0	-	(11.1)	外】へラケズリ 内】白化粧土、鉄釉による文様	灰白色(2.5Y8/2-8/1) にぶい赤褐～赤色 (5YR5/4-10R4/6)	武雄系
	237	B区	8230	3b層	弥生土器 肥前型器台 弥生時代後期	胴部	-	-	-	外】ハケ、沈線(3条) 内】ハケ、ナデ	橙色(2.5YR6/8) 橙色(5YR6/8-7/8)	写真のみ 方形透かし
	240	B区	8230	3b層	弥生土器 肥前型器台 弥生時代後期	胴部	-	-	-	外】沈線(7条) 内】ナデ、ユビオサエ	浅黄橙色(7.5YR8/4) 浅黄橙～淡橙色 (7.5YR8/4-5YR8/4)	写真のみ 方形透かし
	262	B区	8432	3b層	弥生土器 肥前型器台 弥生時代後期	胴部	-	-	-	外】ナデ、櫛描文 内】ハケ後ナデか	浅黄橙色(7.5YR8/4) にぶい橙色(7.5YR7/4)	写真のみ 方形透かし

表 11 遺物一覧8(金属器)

掲載番号	ID	出土位置		器種	材質	法量(cm)			備考	
		遺構等	層位			長さ	幅	厚み		
21	901	A区	ST03		刀子	鉄	12.4	1.8	0.4	
120	904	B区	8230	3a層	ヤリガンナ	鉄	4.7	1.0	0.6	
121	909	A区	7828	3層	鉄鏃	鉄	4.5	2.3	(身)0.3 (茎)0.4	
151	905	B区	8230	3a層	不明棒状品	鉄	4.7	0.8	0.35	段開状の段
152	910	B区	南西トレンチ	3層	不明棒状品	鉄	4.3	0.8	0.2	先端曲がる
153	914	B区	8230	3a層	鉄釘	鉄	3.7	0.7	0.6	
154	906	B区	8230	3層	錠?	鉄	2.6	1.0	0.2	
155	908	A区		3層	飾り金具	銅	2.5	1.3	0.1	魚々子文地に線書きの花文を施す

VIII. 自然科学分析

1. 長崎県大村市川端遺跡から出土した石棺墓採集赤色顔料の調査

長崎県埋蔵文化財センター
岩佐朋樹・片多雅樹

川端遺跡出土石棺墓検出赤色顔料について長崎県埋蔵文化財センターで科学的調査を行った。古代の赤色顔料には酸化鉄を主成分とするベンガラ、硫化水銀を主成分とする朱、酸化鉛を主成分とする鉛丹が知られており、成分分析によってその差異を見出すことができる。ここでは、採集された赤色顔料の由来を調べるため顕微鏡観察及び蛍光X線分析を実施した結果を報告する。

川端遺跡からは5基の石棺墓が検出され、それぞれST01～07としており（ST02とST06は欠番）、棺内が赤色に施された状態で検出されたものがあった。特にST04（4号石棺墓）の赤色度は高く、調査担当者によって各石棺墓から赤色土壌がサンプリングされた。ST01から1点、ST04から25点、ST07から4点の土壌塊が採集され、それらの試料を調査対象とした^{註1}。試料の一覧及び調査結果を表1に示す。

試料は自然乾燥させ、肉眼観察で大まかな観察を行ったところ、ほとんどの試料に赤みを帯びた褐色がみられた。実体顕微鏡（10～40倍）観察では赤色物の有無、混入物の有無、有機質遺物の有無について観察した。その結果、色味は赤褐色のものが最も多く、淡赤褐色、褐色がそれに次ぎ、混入物は白粒や黒粒が見られた（図1）。なお、有機質遺物は見られなかった。続いて、実体顕微鏡で観察された赤色土壌の凝集部分を抽出し、蛍光X線分析に、また抽出した赤色土壌を更に研和したものを、生物顕微鏡観察及び電子顕微鏡観察に供した。蛍光X線分析（SII ナノテクノロジー社製：SEA1200VX）では、特にベンガラの指標となる鉄Feと朱の指標となる水銀Hgに着目し、主成分元素を分析した。その結果、全体的に鉄Feが顕著に検出され、水銀Hgは検出されないものと、微量、少量、一定量検出されたものと分かれた（図5）。水銀Hgを検出した試料に関しては、生物顕微鏡（50～200倍、落射光）を用いた赤色顔料粒子の観察を行い、特に朱粒子の有無を確認した。側射光では朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透明な粒子に、ベンガラは暗赤色等の微粒子が見られるといわれている（志賀2018）。表1で「朱」と記載しているものは朱の粒子を観察できたものであるが、いずれもまばらに分布していた（図2）。電子顕微鏡（30～3000倍、反射電子像）観察では、ベンガラ粒子についてパイプ状粒子^{註2}の有無（それぞれP、非P）を確認し、さらに朱粒子と思われるものについては付属の蛍光X線分析装置で鉄Fe、水銀Hg等の分析を行った。その結果、ベンガラは全てベンガラ（非P）で、朱粒子と思われたものも水銀Hgは検出されず、鉄Feが多くを占めていた（図3・4）。

川端遺跡からほど近い竹松遺跡では、ベンガラ（非P）は（A）九州北半で通常見られる暗赤色を呈するもの、（B）赤土様で赤みが弱く赤褐色の粘土状のものや淡赤色の小塊中に白色鉱物や空隙が斑点状に認められるものに分けられている（志賀2018）。今回分析した試料では白粒や黒粒の混入が見られたほか、赤みの弱いものもあったが、境界が不明瞭であったため本稿では参考に留めたい。

また、一部の試料について蛍光X線分析で水銀Hgを検出し、生物顕微鏡で光沢のあるルビー色の粒を確認しているが、電子顕微鏡および付属する蛍光X線分析による詳細な分析では検出されなかった。蛍光X線分析で最も多く水銀Hgを検出したNo.22は朱のショッキングピンク～オレンジ色とは

異なる色調であり、他の水銀 Hg を検出した試料についても朱としてではなく、何らかの原因で混入したと思われる。したがって今回分析した試料は全てベンガラ（非 P）と考えられる。

以上の分析結果を踏まえ、石棺墓ごとの状況をまとめる。なお、調査担当者によればいずれの石棺墓も遺物は無く時期の絞込みが難しいが、掘り方からの出土遺物や石材の加工技術から推定して石棺墓の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭とみられる。

- ・ ST01 は、既に崩壊した石棺墓の上層から採集されており、出土状況の詳細なデータは得られず、ベンガラ（非 P）を利用していた可能性が考えられるが、流入した可能性もぬぐえない。
- ・ ST04 は、全面に渡ってベンガラ（非 P）が塗られていたとみられ、本田氏の赤色顔料の分類（本田 1987・1995）^{註3} の c 類に相当する。サンプリング場所ごとの偏りもみられない。
- ・ ST07 は、既に崩壊しており流れ込みの可能性も考えられる。

弥生時代の後期の九州北半では b 類が典型的な使用方法と考えられており、それに反して隣接する竹松遺跡では a 類が最も多く出土しているが、本遺跡では c 類のみの出土となった。このことについて、本田氏の分析が福岡県内を中心としたものであったことと九州北半内でも赤色顔料の使用方に地域性がある可能性も指摘されているが（志賀 2018）、本遺跡での結果は、データ数は少ないながらも地域性あるいは集団の相違を示唆するものと思われる。

【註】

- 1 ただし、調査の都合上、詳細なサンプリング場所を特定できたものは No. 2～16 である。
- 2 ベンガラ粒子の形状はさまざまであるが、出土ベンガラ中には透明な管状粒子を含む例があり「パイプ状粒子」と呼ばれる。これは鉄細菌（Leptothrix）の鞘とみられ、ベンガラ（P）は崖端の湧水部や池中から鉄細菌を含む沈殿物を採集・燃焼して得られたものと考えられる（岡田 1997）。なお、ベンガラ（非 P）については鉄鉱石由来のものと考えられる。
- 3 本田氏によると、a 類は床面から朱だけが出土するもの。埋葬施設の床面あるいは遺骸から朱だけが検出され、朱は遺骸自身に施されていたものと推定される。b 類は朱とベンガラが出土するもの。埋葬施設の内面にベンガラを塗布し、床面にもベンガラを散布あるいは塗布した状態に a 類の遺骸を納めたものを推定される。c 類はベンガラだけが出土するもの。埋葬施設内面にベンガラだけを塗布したものと推定される。

【参考・引用文献】

- 岡田文男 1997 「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集』 38-39 頁 日本文化財科学会
- 片多雅樹 2019 「坂口町石棺墓石棺材に残る赤色顔料の蛍光 X 線分析」『大村市市内遺跡発掘調査概報 9』大村市文化財調査報告書第 43 集 77-79 頁 大村市教育委員会
- 志賀智史 2018 「竹松遺跡から出土した赤色顔料について」『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 6 集 531-540 頁 長崎県教育委員会
- 志賀智史 2019 「竹松遺跡から出土した赤色顔料について（2）」『竹松遺跡Ⅳ：下巻：古代・中世編』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 11 集 328-330 頁 長崎県教育委員会
- 本田光子 1987 「墳墓出土の赤色顔料小考：玉名郡天水町経塚古墳の出土例から」『肥後考古』第 6 号 110-117 頁 肥後考古学会
- 本田光子 1991 「石室、石棺の赤色顔料」『肥後考古：交流の考古学：三島格会長古稀記念』第 8 号 421-426 頁 肥後考古学会
- 本田光子 1995 「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第 31・32 号 63-79 頁 日本文化財科学会



図1 No. 27の実体顕微鏡写真 (x40)
赤褐色の中に白粒・黒粒が認められる。



図2 No. 27の生物顕微鏡写真 (x200)
ルビー色の樹脂状光沢を持つ粒 (朱?)

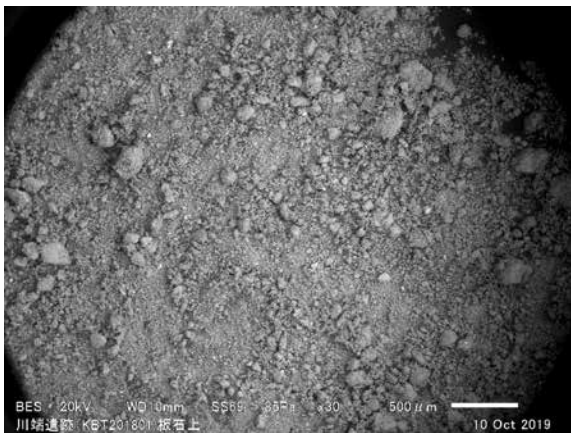


図3 No. 22の電子顕微鏡写真 (反射電子像)
パイプ状ベンガラ粒子はみられない。

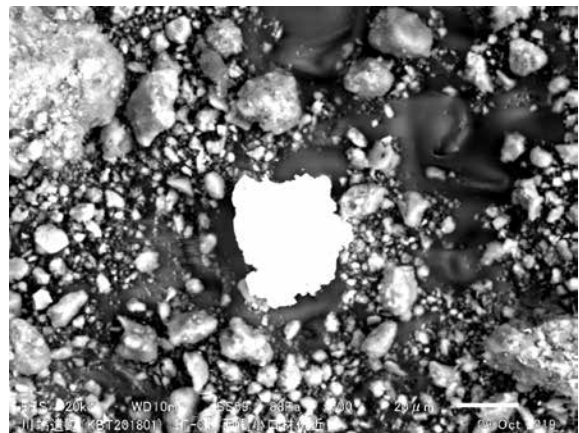


図4 No. 3の電子顕微鏡写真 (反射電子像)
強く反応しているが水銀Hgは検出されない。

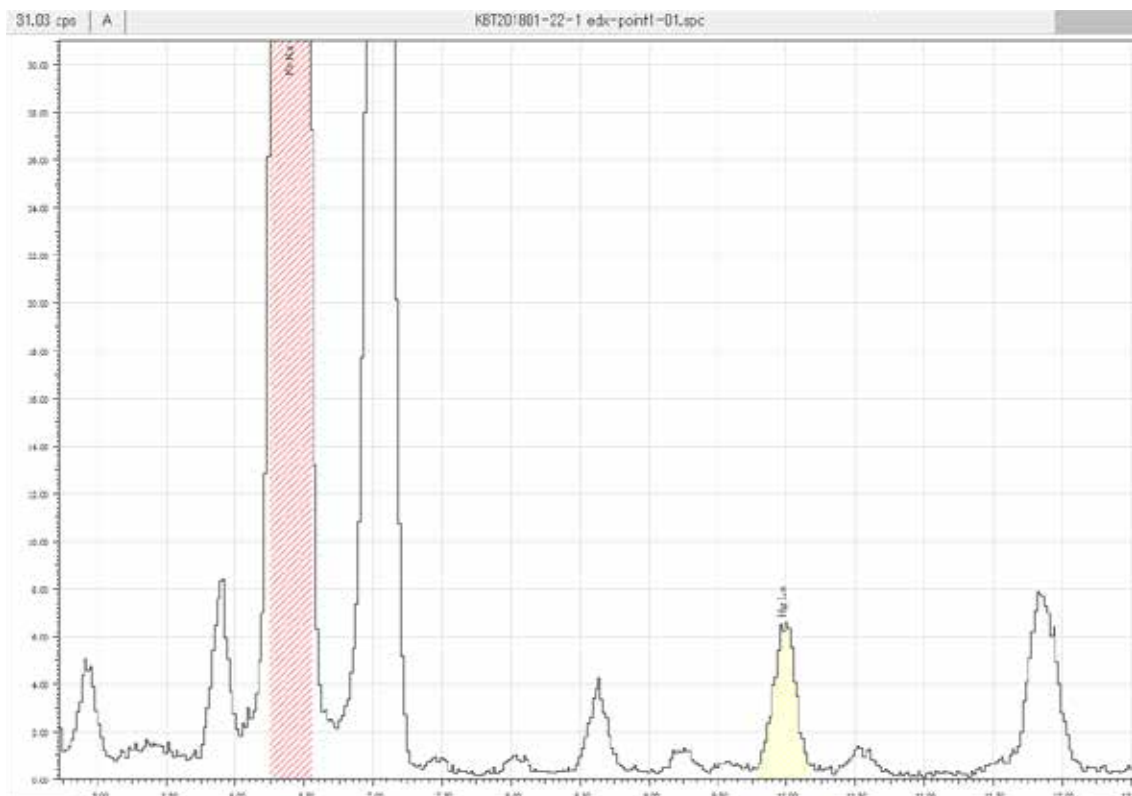


図5 No. 22の蛍光X線分析スペクトル
鉄Feが顕著だが、水銀Hgも検出された。

川端遺跡【KBT201801】検出土壌サンプル一覧

表 1 調査結果一覧

No.	サンプルNo.	石棺墓	サンプリング箇所	サンプリング日	サンプリング量[g]	肉眼	実体顕微鏡	生物顕微鏡	電子顕微鏡	蛍光X線	分析結果	備考
1	ST-01	上層	上層	-	20.84	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
2	ST-04	西側小口材付近	西側小口材付近	-	226.74	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg微	ベングラ(非P)	
3	ST-04	西側小口材付近	西側小口材付近	-	53.72	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg	ベングラ(非P)	
4	ST-04	北側中央床上	北側中央床上	20180912	178.03	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg	ベングラ(非P)	
5	ST-04	北側中央棺外	北側中央棺外	20180914	510.18	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
6	ST-04	東側蓋材除去板石下	東側蓋材除去板石下	-	114.62	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg少	ベングラ(非P)	
7	ST-04	東側蓋材除去板石下	東側蓋材除去板石下	-	59.01	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg少	ベングラ(非P)	
8	ST-04	東側床面板石下	東側床面板石下	-	198.06	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg微	ベングラ(非P)	
9	ST-04	中央床面板石下	中央床面板石下	-	200.70	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg少	ベングラ(非P)	
10	ST-04	西側床面板石下	西側床面板石下	-	136.25	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
11	ST-04	北側中央床面	北側中央床面	-	66.34	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg少	ベングラ(非P)	
12	ST-04	東側小口材付近	東側小口材付近	-	153.74	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg少	ベングラ(非P)	
13	ST-04	南側中央床面	南側中央床面	-	112.76	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ	ベングラ(非P)	Fe,Hg少	ベングラ(非P)	
14	ST-04	北側側壁おさえ材付近	北側側壁おさえ材付近	-	112.33	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
15	ST-04	西側小口材付近	西側小口材付近	-	148.27	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
16	ST-04	北側側壁材上部(11層)	北側側壁材上部(11層)	-	83.52	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
17	ST-04	側壁材	側壁材	-	379.46	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	石棺材を含む
18	ST-04	棺材継ぎ目	棺材継ぎ目	-	540.14	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
19	ST-04	棺材間	棺材間	-	60.35	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
20	ST-04			20181001	13.83	なし	-	-	-	-	-	
21	ST-04	赤色粘質土下層出土(石棺材No.10)	赤色粘質土下層出土(石棺材No.10)	20180919	737.51	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ	ベングラ(非P)	Fe,Hg	ベングラ(非P)	石棺材を含む
22	ST-04	板石上	板石上	20180914	70.86	ベングラ	淡赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱?	ベングラ(非P)	Fe,Hg	ベングラ(非P)	
23	ST-04	側壁上(南側中央)	側壁上(南側中央)	-	11.05	ベングラ	褐色、白黒粒	ベングラ	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
24	ST-04	2層	2層	-	23.05	なし	-	-	-	-	-	
25	ST-04	北側(板石上)	北側(板石上)	-	22.28	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe,Hg	ベングラ(非P)	
26	ST-04	掘方粘度	掘方粘度	20180911	409.43	なし	-	-	-	-	-	
27	ST-07	1層(赤色粘土含む)	1層(赤色粘土含む)	20180905	14.80	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
28	ST-07	1層	1層	20180911	5.28	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
29	ST-07	小口下	小口下	-	121.46	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	
30	ST-07	赤色粘土	赤色粘土	20180910	19.76	ベングラ	赤褐色、白黒粒	ベングラ、朱	ベングラ(非P)	Fe	ベングラ(非P)	

IX. 総括

1. 縄文時代

調査では縄文時代の遺物が少量ながら出土しており、縄文時代後期から晩期の深鉢などが出土している。調査区内で明確な当該期の遺構は確認できていないが、隣接する立小路遺跡では縄文時代晩期の土器を中心とする縄文時代の包含層が確認されており縄文時代晩期の埋甕も検出されていることから、同集団の生活域が当調査区周辺まで及んでいたものと考えられる。

2. 弥生時代～古墳時代

(1) 石棺墓

①石棺の構築

今回確認された石棺墓で両側壁の石材が残っていた ST03、ST05 に特徴的な構造は、側壁石材の下に高さを調整するためと思われる石材を挿入している点である。その様相は ST05 で特に顕著であり、南側側壁材の下部に薄い板石を挿入している。ST05 は南側と北側で側壁材の幅が異なっており、北側に比べ幅の狭い南側の側壁の高さを調整し、両側壁上端を合わせるための構造と思われる。板石ではなく円礫を使用しているが、ST03 でも側壁材下部に礫が挿入されており、ST05 と同様両側壁の高さを調整している可能性が高い。ST04 についても残存していた北側側壁の下部には円礫を含む地山とは異なる土層が確認されていることから、墓壙を掘削した後に円礫を混ぜた土で側壁下部を埋め戻した上で側壁材を設置しているものと考えられる。構築状況からは川端遺跡で検出された石棺墓は墓壙の大きさに合わせた石材を入手しているのではなく、入手できた石材を墓壙に合うように調整して利用している可能性が想定される。川端遺跡周辺で確認されている石棺墓では同様の構造は確認できず、川端遺跡の造墓集団独自のものなのか他地域から導入されたものなのかは今後類例の調査が必要になる。

②赤色顔料

ST04 では赤色顔料の使用が確認された。赤色顔料の自然科学分析（Ⅷ章）によると使用されていた顔料はベンガラで、水銀朱は確認されなかった。ST01、ST07 でも赤色顔料が検出されているが量は僅かであり、また両石棺は破損していることから破損時に赤色顔料が流入した可能性もあるため確実に赤色顔料が使用された石棺墓は ST04 のみである。近年石棺墓が調査された遺跡には竹松遺跡、坂口町石棺墓があるが、両者では水銀朱の使用が確認されており床面への散布は限定的である（古門編 2018・柴田編 2019）。ST04 はベンガラのみを使用し、床面の板石上下に多量のベンガラが使用されているという点で様相が異なっており、掘方埋土にも赤色顔料を混入している点で特徴的である。ST04 の赤色顔料の使用方法は熊本県阿蘇市下山西遺跡の例に類似する（高谷編 1987）。下山西遺跡では 4 基の石棺墓が調査されており、2・3・4 号石棺で棺材にベンガラが塗布され、床面には板石上にベンガラ面が確認されている。また 3 号石棺では土壙埋土中にベンガラが含まれ、「石棺内ばかりではなく土壙にも意識的にベンガラを散布した」ものと見られる（高谷編 1987）。川端遺跡では肥後系の高坏が出土しており、石棺への赤色顔料の使用方法についても肥後地域の影響を受けている可能性が指摘できる。

③石棺墓の時期

石棺墓内からはST03出土の刀子を除き副葬品と思われる遺物は出土していない。土器片が少量出土しているもののいずれも小片であり、石棺内への土砂の流入に伴いあるいは破損した際に混入したものである可能性が高い。石棺掘り方から台付甕の破片が出土していることから弥生時代後期以降に構築された墓域であることは確かだが、遺物から石棺墓の時期を推定することは難しく、構造や石材から石棺墓構築の時期について検討してみたい。

残存状況の良いST03・ST05の構造をみると小口を「H」字型に組み、側壁は2枚の石材を使用している場合は端部を重ね合わせて構築されており、いずれも寺田正剛による石棺型式（寺田2005）ではⅢ式となる。破損しているため詳細は不明だが、ST04についても破損した東側小口の石材は側壁の内側で検出されており、「H」字型に組み込まれていた蓋然性が高い。残存していた北側側壁の石材端部同士が接する形となっている点は寺田のⅡc式に共通するが、西側小口の石材は東側小口より幅が狭く、平面形としてはⅢ式の様相を呈するものと思われる。寺田はⅡc式からⅢ式を弥生時代後期から古墳時代初頭としており、構造からみれば石棺墓の構築時期は弥生時代後期から古墳時代初頭と言える。一方石棺墓に使用される石材はいずれも整形され、特に蓋石まで残存しているST05について見ると、蓋石に使用される石材は短冊形に整形されている。川端遺跡周辺で弥生時代後期から古墳時代初頭の石棺墓が調査されている遺跡には古墳時代後期の竹松遺跡（古門編2018）、弥生時代終末期～古墳時代初頭の冷泉遺跡（大野他2003）、弥生時代終末期～古墳時代前半の坂口町石棺墓（柴田編2019）があるが、竹松遺跡、冷泉遺跡の石棺墓の蓋石は明瞭な短冊形にはならず、加工状況は坂口町石棺墓のものに近い。坂口町石棺墓について報告者は石棺の構造が最も類似するのは4～5世紀の石棺墓群である小佐古石棺墓群であるとしつつも、周溝の痕跡が無く副葬品も少ないことと石棺の構造が寺田の石棺型式Ⅲ式に該当する点から弥生的な様相も有するとし、「坂口町石棺墓は冷泉遺跡よりも新相、小佐古石棺墓群より古相か同時期頃のものとして位置付けられ、弥生時代終末期から古墳時代前半に構築された」と評価している（柴田編2019）。川端遺跡で検出された石棺墓は、SD02・03が周溝の可能性こそあるものの、坂口町石棺墓と形態的に類似し副葬品の少なさも共通することから同様の時期である可能性が高い。SD02からは古墳時代前期のものと考えられる低脚高坏が出土していることから、古墳時代前期にはSD02が埋没していなかった可能性は高く、弥生時代終末期から古墳時代初頭を中心に古墳時代前期までの時期幅を想定しておきたい。

④墓域について

前述のとおり石棺墓は弥生時代終末期から古墳時代前期のものと考えられ、調査区南部で確認されたSC01と大きな時期の隔たりは無いことが考えられる。石棺墓は調査区の北部に集中しており、SD02からSC01の間では同時期の明確な遺構が確認されていないことから、墓域と居住域の境界であったものと考えられる。今回の調査区から約200mの北側には平成29年度川端遺跡調査区が位置しているが、平成29年度調査区の南部では石棺墓の可能性のある土坑SK01が確認されている。SK01は長軸2.02mを測る隅丸長方形の土坑で、床面に溝状の掘り込みを有している。板石も検出されており、報告者は断定できないものの破壊された石棺墓の可能性を指摘している（宮木編2018）。形状からはST01同様に棺材が抜かれた石棺墓である可能性が高く、平成29年度調査区南部まで墓域が広がっていた可能性は十分に考えられ、調査対象地外となった平成29年度・平成30年度調査区間も本来は墓

域の一部であったことが想定される。

3. 古代末～中世

古代末～中世の遺構は確認されていないものの、貿易陶磁等が出土している。遺物の中には白磁碗など大宰府編年C期（11世紀後葉～12世紀前半）の標識となる磁器や16世紀と考えられる李朝陶器・15～16世紀の所産と考えられる土師器も見られるが、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類や同安窯系青磁皿Ⅰ類など、D期～F期（12世紀後半～14世紀前半）の標識となるものが多い。土師器小皿や東播系須恵器も13世紀から14世紀の所産と考えられることから、近隣で当該期の活動があったことが想定できる。

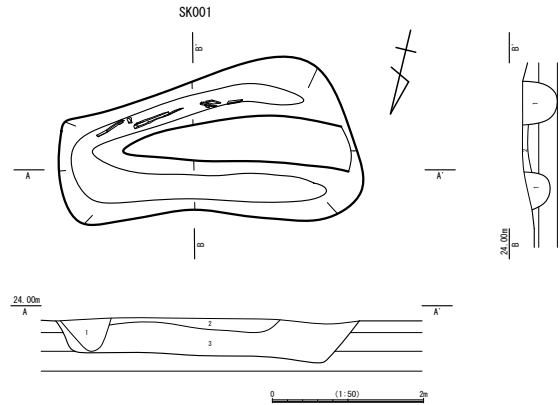


図 38 川端遺跡平成 29 年度調査 SK01

【引用・参考文献】

- 安樂哲史 2016『竹松遺跡』大村市教育委員会
宇野愼敏 2018「肥前西部における横穴式石室の展開とその背景—彼杵郡の軍事集団の出現について—」『西海考古』第 10 号，西海考古同人会
大野安生・松川憲毅・松尾尚哉 2003『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 vol. 3』大村市文化財調査報告書第 25 集，大村市教育委員会
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
久田松和則 2014「第二章第三節 大村氏の出自」『新編大村市史』第二卷中世編，大村市史編さん委員会
小松義博編 2018『立小路遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ，長崎県文化財調査報告書第 216 集，長崎県教育委員会
阪口和則 2013「第一章 地形・地質」『新編大村市史』第一卷 自然編，大村市史編さん委員会
柴田亮編 2019『大村市内遺跡発掘調査概報 9』大村市文化財調査報告書第 43 集，長崎県大村市教育委員会
高谷和生編 1987『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告書第 88 集，熊本県教育委員会
檀佳克 2015「甕形土器と器台からみた熊本と周辺地域の交流」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
辻田直人・小野綾夏 2008『龍王遺跡Ⅲ』縄文時代・古墳時代編，雲仙市教育委員会
寺田正剛 2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古』第 6 号，西海考古同人会
中尾篤志 2013「第二章 縄文時代」『新編大村市史』第一卷 原始編，大村市史編さん委員会
馬場晶平 2017「九州島内における古式土師器—肥前西部—」『九州島における古式土師器』第 19 回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・基本資料集，九州前方後円墳研究会
秀島貞康 2013「第四章 古墳時代」『新編大村市史』第一卷 原始編，大村市史編さん委員会
古門雅高 2005「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古』第 6 号，西海考古同人会
古門雅高編 2018『竹松遺跡Ⅲ』九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ，新幹線文化財調査事務所調査報告書第 6 集，長崎県教育委員会
宮木貴史編 2018『川端遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ，長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 26 集，長崎県教育委員会
宮木貴史・松元一浩 2017「壱岐島の古式土師器」『九州島における古式土師器』第 19 回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・基本資料集，九州前方後円墳研究会
宮崎貴夫編 1986「弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅲ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第三冊，長崎県文化財調査報告書第 84 集，長崎県教育委員会
宮崎貴夫 2015「長崎県本土地域の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
森浩嗣 2016『西海まるごと地質図鑑』西海市教育委員会
森田稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
柳田康雄 1987「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ，雄山閣
山本信夫・山村信榮 1997「[10]九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集，国立歴史民俗博物館
山本信夫 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財第 49 集，大宰府市教育委員会



写真1 B区南西トレンチ土層断面状況（北から）



写真2 A区南西トレンチ土層断面状況（南東から）



写真3 B区遺構完掘状況（右が北西）



写真 4 縦穴建物跡 (SC01) 検出状況 (北から)



写真 5 SC01 東西ベルト土層断面 (北西から)



写真 6 SC01 南北ベルト土層断面 (南西から)



写真 7 SC01-P1 土層断面 (北から)



写真 8 SC01-P2 土層断面 (西から)



写真 9 SC01-P3 土層断面 (南から)



写真 10 SC01-P4 土層断面 (北から)



写真 11 SC01-P5 土層断面 (東から)



写真 12 SC01-P6 土層断面 (南東から)



写真 13 SC01-SL1 半截状況 (北西から)



写真 14 壁際溝土層断面 (北西から)



写真 15 ST03 棺内完掘状況（北東から）



写真 16 ST05 棺内完掘状況（北から）



写真 17 ST05 南側壁下石材確認状況（北東から）



写真 18 ST01 検出状況（北から）



写真 19 ST01 西半土層断面（西から）



写真 20 ST01 東半土層断面（東から）



写真 21 ST01 完掘状況（北から）



写真 22 ST03 検出状況（北東から）



写真 23 ST03 棺内円礫出土状況（北東から）



写真 24 ST03 遺物（刀子）出土状況（南東から）



写真 25 ST03 掘方完掘状況（北東から）



写真 26 ST04 検出状況 (南から)



写真 27 ST04 床面上赤色顔料 (東から)



写真 28 ST04 床面下赤色顔料検出作業状況 (南から)



写真 29 ST04 床面板石除去状況 (南から)



写真 30 ST04 短軸断面 (西から)



写真 31 ST04 側壁材下円礫確認状況 (北東から)



写真 32 ST04 完掘状況 (南から)



写真 33 ST05 検出状況 (北から)



写真 34 ST05 蓋石検出状況 (北から)



写真 35 ST05 側壁上粘質土ブロック検出状況 (北から)



写真 36 ST05 西半土層断面 (南から)



写真 37 ST05 長軸東側掘方断面 (北から)



写真 38 ST05 短軸南側掘方断面 (西から)



写真 39 ST05 南側壁下石材検出状況 (北から)



写真 40 ST05 完掘状況 (北から)



写真 41 ST07 検出状況 (南西から)



写真 42 ST07 土層断面 (北西から)



写真 43 ST07 棺内完掘状況 (南西から)



写真 44 SD02 ベルト土層断面 (北から)



写真 45 SD02 完掘状況 (北から)



写真 46 SD03 ベルト土層断面 (東から)



写真 47 NR01 検出状況 (北西から)



写真 48 NR01 ベルト土層断面 (南東から)



写真 49 SK01 検出状況 (南西から)



写真 50 SK01 土層断面 (南西から)



写真 51 SK01 完掘状況 (南西から)



写真 52 SK04-07 検出状況 (南東から)



写真 53 SK04-07 土層断面 (南東から)



写真 54 SS01 土層断面 (北西から)



写真 55 SX01 検出状況 (南東から)



写真 56 ST03 調査風景



写真 57 B区作業風景



写真 58 出土土器・石器（縄文時代）



写真 59 SC01 出土遺物



写真 60 石棺墓出土遺物



写真 61 SD02・SD03 出土遺物



写真 62 NR01 出土遺物



写真 63 出土土器 (弥生～古墳時代) ①



写真 64 出土土器（弥生～古墳時代）②



写真 65 出土土器 (弥生~古墳時代) ③



写真 66 出土土器（弥生～古墳時代）④



写真 67 出土石器・金属器（弥生～古墳時代）



写真 68 出土陶磁器・土器（古代～近世）



写真 69 出土瓦質土器・石鍋・陶磁器（古代～近世）



写真 70 SK01・04 出土遺物

写真 71 SS01 出土遺物



写真 72 出土金属器

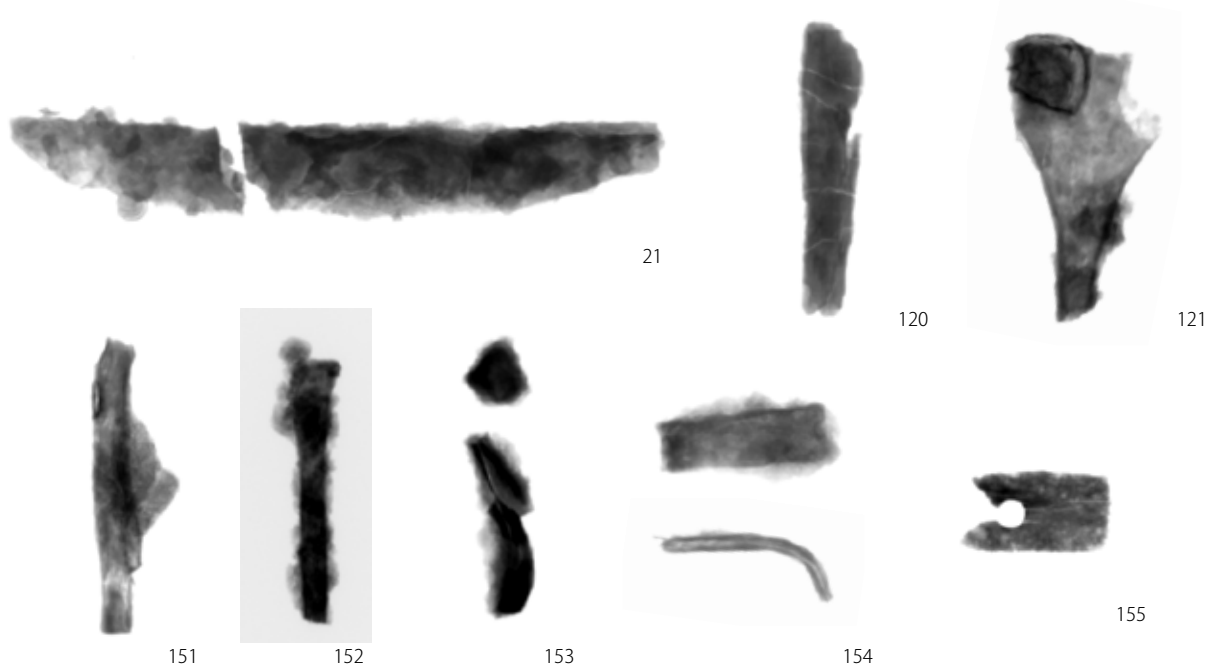


写真 73 出土金属器×線撮影写真

報告書抄録

ふりがな	かわばたいせきに
書名	川端遺跡Ⅱ
副書名	都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	VII
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号名	第34集
編著者名	山梨千晶、岩佐朋樹、片多雅樹
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話0920(45)4080
発行年月日	西暦2019年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわばたいせき 川端遺跡	ながさきけんおおむらし 長崎県大村市 おにぼしまち 鬼橋町	42205	181	32° 56' 48"	129° 57' 09"	本調査 2018.5.21～ 2018.10.10	1448 m ²	道路建設

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川端遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世 近世	石棺墓 竪穴建物跡 溝状遺構 自然流路	縄文晩期土器 石器 弥生土器 土師器 石器 鉄器 貿易陶磁器 土師質土器 東播系須恵器 瓦質土器 石鍋 陶磁器	石斧、石錘、石鏃 石棺内・石棺掘方に赤色顔料 石庖丁 刀子・ヤリガンナ 白磁・青磁・李朝陶器 紅皿

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第34集

川端遺跡Ⅱ

2019（令和元）年12月25日

発行 長崎県教育委員会
長崎市尾上町3番1号

印刷 株式会社 昭和堂